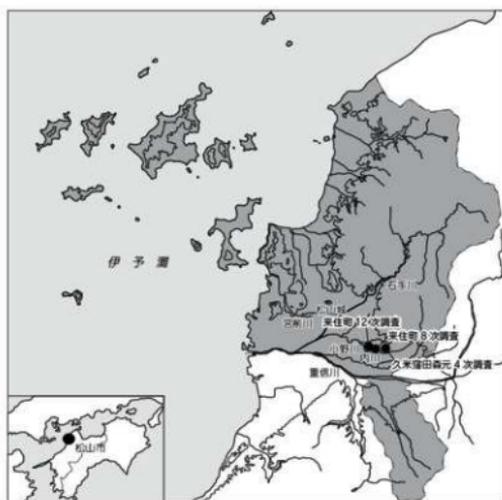


来住町遺跡 8 次調査
来住町遺跡 12 次調査
久米窪田森元遺跡 4 次調査

2013

松山市教育委員会
公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター

きしまち
来住町遺跡 8 次調査
きしまち
来住町遺跡 12 次調査
くめくぼたもりもと
久米窪田森元遺跡 4 次調査



2013

松山市教育委員会

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

序 言

本書は、松山市東部の来住・久米地区で平成9年、同10年、同13年に実施した緊急調査による発掘調査報告書です。

来住・久米地区には、全国的に知られている国史跡「久米官衙遺跡群 久米官衙遺跡 来住廃寺跡」があります。

今回報告します来住町遺跡8次調査と同12次調査では、古墳時代、古代、中世の建物跡が検出され、この官衙があった古代を含め、来住台地南方域における古墳時代後期から中世までの集落様相を解明する貴重な資料を得ることができました。また、久米窪田森元遺跡4次調査では、古代の瓦や木製品とともに、建物跡が確認され、官衙周辺施設の存在が明らかになりました。

このような成果を上げることができたのは、関係各位の埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力の賜物と心より感謝申しあげ次第です。

本書が、松山市民をはじめ多くの方々の埋蔵文化財保護意識の向上と埋蔵文化財調査の一助となり、考古学研究等にご活用いただければ幸いに存じます。

平成25年3月

松山市教育長 山本 昭弘

例 言

1. 本書は、財団法人松山市生涯学習振興財団松山市埋蔵文化財センターが平成9年～平成13年に松山市来住町、久米窪田町で実施した3遺跡についての発掘調査報告書である。
2. 整理作業及び報告書作成作業は、公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センターが行った。
3. 遺構の略号は、竪穴建物(竪穴住居):SB、土坑:SK、溝:SD、柱穴:SP、不明遺構:SX、掘立柱建物:掘立、自然流路:SRとし、遺跡ごとに通し番号を1から付記した。
4. 遺構の測量は、調査担当者の指示のもと補助員、作業員が実施した。
5. 遺物の実測及び掲載図の製図は、高尾和長、山本健一、宮内慎一の指示のもと田崎真理、矢野久子、多知川富美子、中村紫、木西嘉子、西本三枝、平岡直美、山下満佐子、篠森千里、戸川安子、岩本美保、佐伯利枝、村上真由美が行った。
6. 掲載の遺構図、遺物図は、スケール下に縮尺を表記した。
7. 掲載の遺構図の方位は真北を示す。
8. 基準点測量は、株式会社パスコに業務委託した。
9. 写真図版は、遺構撮影は調査担当者で大西朋子が、遺物の撮影は大西朋子が担当し、図版作成は報告担当者と協議のうえ大西朋子が行った。
10. 本報告書に関する資料は、松山市立埋蔵文化財センターが保管・収蔵している。
11. 本書は高尾和長、宮内慎一、山本健一が執筆し、編集は宮内、山本の協力を得て高尾が行った。

目 次

第1章	はじめに	(高尾)	1
第1節	調査に至る経緯		1
第2節	調査・刊行組織		1
第3節	立地・環境		3
第2章	来住町遺跡8次調査	(宮内)	7
第1節	調査の経過		7
第2節	層位		8
第3節	遺構と遺物		13
第4節	小 結		32
第3章	来住町遺跡12次調査	(高尾)	41
第1節	調査の経過		41
第2節	A区の調査		43
第3節	B区の調査		47
第4節	小 結		57
第4章	久米窪田森元遺跡4次調査	(山本)	63
第1節	調査の経過		63
第2節	層位		66
第3節	遺構と遺物		69
第4節	小 結		86
第5章	まとめ	(高尾)	94

挿図目次

第1章 はじめに

第1図	調査地周辺遺跡分布図 (縮尺 1/25,000)	5
第2図	来往町遺跡1次～13次調査位置図 (縮尺 1/2,000)	6

第2章 来往町遺跡8次調査

第3図	調査地測量図 (縮尺 1/1,000)	7
第4図	西壁土層図 (1) (縮尺 1/40)	10
第5図	西壁土層図 (2) (縮尺 1/40)	11
第6図	遺構配置図 (縮尺 1/300)	12
第7図	S B 1 測量図 (縮尺 1/80)	13
第8図	S B 1 出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	14
第9図	掘立1測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/3、1/80)	15
第10図	掘立2測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/3、1/80)	16
第11図	S K 1 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/4、1/80)	17
第12図	掘立4測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/3、1/80)	18
第13図	掘立5測量図 (縮尺 1/80)	19
第14図	掘立6・8・9測量図 (縮尺 1/80)	20
第15図	S D 1 出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	21
第16図	S R 1 断面図 (縮尺 1/40)	23
第17図	S R 1 下層出土遺物実測図 (1) (縮尺 1/3)	25
第18図	S R 1 下層出土遺物実測図 (2) (縮尺 1/3)	26
第19図	S R 1 下層出土遺物実測図 (3) (縮尺 1/3)	27
第20図	S R 1 上層出土遺物実測図 (1) (縮尺 1/3)	28
第21図	S R 1 上層出土遺物実測図 (2) (縮尺 1/3、1/4)	29
第22図	S R 1 地点不明出土遺物実測図 (縮尺 1/3、1/4)	29
第23図	掘立3・7測量図 (縮尺 1/80)	30
第24図	S D 4 出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	31
第25図	包含層出土遺物実測図 (縮尺 1/3、2/3)	32

第3章 来往町遺跡12次調査

第26図	調査地位置図 (縮尺 1/1,000)	42
第27図	A区・B区測量図 (縮尺 1/400)	42
第28図	A区遺構配置図・土層図 (縮尺 1/80)	43
第29図	S B 1 測量図 (縮尺 1/60)	44
第30図	S B 1 出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	44
第31図	掘立3測量図 (縮尺 1/60)	45
第32図	S X 1 測量図 (縮尺 1/30)	46

第33図	S X 1 出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	46
第34図	S X 2 測量図 (縮尺 1/30)	46
第35図	A区 S P・地点不明出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	46
第36図	B区遺構配置図 (縮尺 1/120)	47
第37図	B区北壁・西壁土層図 (縮尺 1/100)	48
第38図	掘立 1 測量図 (縮尺 1/60)	49
第39図	掘立 2 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/3、1/4、1/60)	50
第40図	S K 1 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/2、1/3、1/40)	51
第41図	S D 1 測量図 (縮尺 1/20、1/40)	52
第42図	S X 3 測量図 (縮尺 1/80)	53
第43図	S X 3 出土遺物実測図 (1) (縮尺 1/3、2/3、1/4)	54
第44図	S X 3 出土遺物実測図 (2) (縮尺 1/2)	55
第45図	S X 4 測量図 (縮尺 1/40)	56
第46図	B区地点不明出土遺物実測図 (1) (縮尺 1/3、1/4)	56
第47図	B区地点不明出土遺物実測図 (2) (縮尺 1/2、2/3)	57
第4章 久米窪田森元遺跡4次調査		
第48図	周辺調査地位置図 (縮尺 1/5,000)	63
第49図	調査地位置図 (縮尺 1/2,500)	64
第50図	遺構配置図 (縮尺 1/200)	65
第51図	1区北壁土層図 (縮尺 1/50)	67
第52図	1区東壁土層図 (縮尺 1/50)	68
第53図	S R 5 測量図 (縮尺 1/80)	70
第54図	S R 5 出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	71
第55図	掘立 1 測量図 (縮尺 1/50)	72
第56図	掘立 2 測量図 (縮尺 1/50)	73
第57図	S R 4 測量図 (縮尺 1/80)	77
第58図	S R 4 出土遺物実測図 (1) (縮尺 1/3)	78
第59図	S R 4 出土遺物実測図 (2) (縮尺 1/3)	79
第60図	S R 4 出土遺物実測図 (3) (縮尺 1/3)	80
第61図	土器溜り測量図 (縮尺 1/50)	81
第62図	土器溜り出土遺物実測図 (1) (縮尺 1/3)	82
第63図	土器溜り出土遺物実測図 (2) (縮尺 1/6)	83
第64図	中世の柱穴出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	85
第65図	IV②層出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	85
第66図	追加資料・久米窪田森元遺跡3次調査出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	85
第67図	来往町遺跡周辺調査地位置図 (縮尺 1/2,000)	95
第68図	久米窪田遺跡周辺調査地位置図 (縮尺 1/4,000)	96

表目次

第1章 はじめに

表 1 調査地一覧	4
-----------	---

第2章 来住町遺跡8次調査

表 2 検出遺構一覧	9
表 3 堅穴住居一覧	34
表 4 掘立柱建物一覧	
表 5 溝一覧	
表 6 自然流路一覧	35
表 7 土坑一覧	
表 8 柱穴一覧	
表 9 S B 1 出土遺物観察表 土製品	36
表 10 掘立 1・2 出土遺物観察表 土製品	37
表 11 S K 1 出土遺物観察表 金属製品	
表 12 掘立 4 出土遺物観察表 土製品	
表 13 S D 1 出土遺物観察表 土製品	
表 14 S R 1 下層出土遺物観察表 土製品	
表 15 S R 1 上層出土遺物観察表 土製品	39
表 16 S R 1 上層出土遺物観察表 金属製品	
表 17 S R 1 地点不明出土遺物観察表 土製品	40
表 18 S R 1 地点不明出土遺物観察表 金属製品	
表 19 S D 4 出土遺物観察表 土製品	
表 20 包含層出土遺物観察表 土製品	
表 21 包含層出土遺物観察表 石製品	

第3章 来住町遺跡12次調査

表 22 堅穴建物一覧	58
表 23 掘立柱建物一覧	
表 24 土坑一覧	
表 25 溝一覧	
表 26 性格不明遺構一覧	59
表 27 S B 1 出土遺物観察表 土製品	
表 28 S B 1 出土遺物観察表 石製品	
表 29 S X 1 出土遺物観察表 土製品	
表 30 S P 出土遺物観察表 土製品	

表 31	A区地点不明出土遺物観察表	土製品	
表 32	掘立2出土遺物観察表	土製品	60
表 33	掘立2出土遺物観察表	石製品	
表 34	SK1出土遺物観察表	土製品	
表 35	SK1出土遺物観察表	石製品	
表 36	SX3出土遺物観察表	土製品	
表 37	SX3出土遺物観察表	金属製品	61
表 38	SX3出土遺物観察表	石製品	
表 39	B区地点不明出土遺物観察表	土製品	62
表 40	地点不明出土遺物観察表	石製品	
表 41	地点不明出土遺物観察表	金属製品	

第4章 久米窪田森元遺跡4次調査

表 42	掘立柱建物址一覧		87
表 43	土坑一覧		
表 44	溝一覧		
表 45	自然流路一覧		
表 46	土器溜り一覧		
表 47	SR5出土遺物観察表	土製品	88
表 48	SR5出土遺物観察表	木製品	
表 49	SK9出土遺物観察表	木製品	
表 50	SR3出土遺物観察表	木製品	
表 51	SR4出土遺物観察表	土製品	
表 52	SR4出土遺物観察表	木製品	90
表 53	土器溜り出土遺物観察表	土製品	91
表 54	土器溜り出土遺物観察表	土製品 瓦	92
表 55	SP出土遺物観察表	土製品	
表 56	SP出土遺物観察表	石製品	
表 57	IV②層出土遺物観察表	土製品	
表 58	久米窪田森元遺跡3次調査(追加資料)	土製品	

写真図版目次

第2章 来住町遺跡8次調査

図版 1	1. 北半部遺構検出状況(南より)	2. 南半部遺構検出状況(南より)
図版 2	1. 北半部完掘状況(南より)	2. 南半部完掘状況(南より)
図版 3	1. 西壁土層(東より)	2. SB1検出状況(北より)
	3. 掘立1検出状況(北東より)	

- 図版 4 1. 掘立2検出状況(北西より) 2. SR1検出状況(東より)
3. 足跡①検出状況(西より)

図版 5 1. SR1下層出土遺物

- 図版 6 1. 出土遺物(SR1上層:55~57・70・74、SR1地点不明:75・78・86・87、
SK1:12・13、包含層:92)

第3章 来住町遺跡12次調査

- 図版 7 1. A区遺構検出状況(西より) 2. A区遺構完掘状況(西より)
3. A区遺構完掘状況(南西より)

図版 8 1. B区遺構検出状況(北より)

- 図版 9 1. B区遺構完掘状況(北より) 2. 掘立1・掘立2完掘状況(北より)

図版 10 1. SK1遺物出土状況(南より) 2. SK1完掘状況(南東より)

図版 11 1. SX3遺物出土状況(南東より) 2. SX3完掘状況(南西より)

- 図版 12 1. 出土遺物(SB1:3、SK1:14、SX3:20・26・38・40・41、
地点不明:49・52)

第4章 久米窪田森元遺跡4次調査

- 図版 13 1. 1区遺構検出状況(南東より) 2. 1区遺構検出状況(西より)

図版 14 1. 1区遺構完掘状況(西より)

- 図版 15 1. 2区遺構検出状況(南東より) 2. 2区遺構完掘状況(東より)

図版 16 1. 3区遺構検出状況(南東より) 2. 3区遺構完掘状況(南東より)

- 図版 17 1. SR5北半部完掘状況(北より) 2. 掘立1・掘立2完掘状況(東より)
3. 掘立1、P108・P109半截状況(南より)

- 図版 18 1. SK8完掘状況(東より) 2. SK9完掘状況(東より)
3. SD3・SD4完掘状況(北西より)

- 図版 19 1. SR4遺物出土状況(北東より) 2. SR4完掘状況(北東より)
3. SP117柱材出土状況(南西より)

図版 20 1. 土器溜り遺物出土状況(西より) 2. 土器溜り遺物出土状況(北より)

図版 21 1. SR5出土遺物

図版 22 1. 出土遺物(SK9:13、SR3:14~17、SR4①:26~28・34・35)

図版 23 1. SR4出土遺物②

図版 24 1. SR4出土遺物③

図版 25 1. 出土遺物(SR4④:62・63・桃核、土器溜り①:69・71・74・75・82・83)

- 図版 26 1. 出土遺物(土器溜り②:85・86・89・90、柱穴:91・92、
久米窪田森元遺跡3次:93~97)

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

平成9年～平成13年の間に、松山市来住町243番3、242番1の一部、230番の一部、237番1、240番1、久米窪田町859番1、860番1、の3ヶ所について、埋蔵文化財の確認願いが開発関係者より、松山市教育委員会文化教育課に提出された。確認願いが申請された来住町は松山市が指定する「No127 来住廃寺跡」、久米窪田町は「No129 鷹子遺物包含地2」内にあり周知の遺跡地として知られており、各申請地周辺では、現在までに数々の発掘調査が行われている。

文化教育課では、確認申請が提出された3地点について埋蔵文化財の有無と遺跡の範囲や性格を確認するため、順次試掘調査を実施した。調査の結果、申請地内には遺構や遺物が検出され、遺跡の存在が想定される状況にあった。

試掘調査の結果より、文化教育課と申請者及び関係者は発掘調査について協議を行い、弥生時代から古代の集落域やその構造を明らかにすることを目的とした調査を実施することとした。

発掘調査は、松山市立埋蔵文化財センター、財団法人生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体になり、申請者及び関係者の協議のもと、申請者および関係者の協力を受け平成9年、平成10年、平成13年に実施した。

第2節 調査・刊行組織

来住町遺跡8次調査 調査組織（平成10年4月1日時点）

松山市埋蔵文化財センター	所 長	河口 雄三
	次 長	田所 延行
	係 長	田城 武志
	主 任	栗田 正芳
	調 査 員	相原 秀仁
	調 査 員	宮内 慎一

来住町遺跡12次調査 調査組織（平成13年4月1日時点）

松山市埋蔵文化財センター	所 長	中川 隆
	専 門 監	野本 力
	次長兼調査係長	西尾 幸則
	調 査 員	高尾 和長

久米窪田森元遺跡4次調査 調査組織（平成9年4月1日時点）

松山市埋蔵文化財センター	所 長	河口 雄三
	次 長	田所 延行
	係 長	田城 武志
	主 任	栗田 正芳
	調 査 員	山本 健一

はじめに

刊行組織（平成24年度）

松山市教育委員会

教 育 長	山本 昭弘（10月2日～）
	山内 泰（前任～10月1日）
事 務 局 長	嶋 啓吾
企 画 官	渡部 満重
企 画 官	前田 昌一
課 長	駒澤 正憲
主 幹	篠原 昭二
主 査	楠 寛輝

文化財課

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

理 事 長	一色 哲昭
事 務 局 長	松澤 史夫
事務局次長	近藤 正
施設利用推進部長	玉井 弘幸

埋蔵文化財センター

所 長	田城 武志
主 査	栗田 茂敏
主 任	高尾 和長（調査担当）
調 査 員	大西 朋子（写真担当）

第3節 立地・環境 (第1図)

(1) 立地

道後平野には高縄山系に源を発し、北東から南西に流れる石手川と、四国山脈東三方が森に水源を持ち、西流する重信川の2大河川がある。この2河川はいくつかの支流を集めながら西流し、海岸から約4kmで合流し、伊予灘に注いでいる。報告を行う3遺跡は松山平野の南東部にあり、重信川、石手川の支流の小野川、堀越川、内川により形成された扇状地上に位置する。

(2) 環境

ここでは3遺跡がある来住・久米地区を中心とした遺跡について、時代別に概要を説明する。

旧石器時代

鷹子新畑遺跡の北部の丘陵上にある五郎兵衛谷古墳の調査に伴って、サヌカイト製の角錐状石器が出土している。平井町の山田池では、ナイフ形石器が表面採集されている。

縄文時代

久米窪田森元遺跡からは、土坑内から後期後葉の一括資料である貴重な土器片が40点余り出土している。晩期では、久米高畑遺跡36次調査より円形堅穴式住居址、久米高畑遺跡26次調査と同35次調査からは、土坑が確認されている。

弥生時代

弥生時代の遺跡は前期から後期まで、集落関連の遺構と遺物の検出率が急増する。特に注目されるのは、前期から中期初頭の大型の溝を複数検出した久米高畑遺跡23次調査、25次調査、28次調査、29次調査があり、環濠集落の存在が明らかになりつつある。また土坑も120基以上検出され、その中には断面形態より貯蔵穴と考えられるものがある。

中期では来住廃寺15次調査の包含層中から、凹線文期の土器片が多数出土している。久米窪田古屋敷C遺跡からは、L字状に折れ曲がる大型の溝から該期の土器が出土している。

後期では久米高畑遺跡35次調査、50次調査、59次調査、61次調査、65次調査で堅穴住居が検出されている。65次調査検出の堅穴住居には、ベッド状遺構が付設されている。床面には焼土と炭化物が確認できることから、火災により焼失したか住居廃絶時の祭祀行為として火が放たれたことを示すものと考えられる。

古墳時代

古墳時代の遺構は、来住町遺跡8次調査、久米高畑遺跡10次調査、26次調査、35次調査、60次調査、64次調査において堅穴住居、掘立柱建物、土坑、溝が検出されている。中ノ子遺跡の東にある開遺跡では方形住居、掘立柱建物が検出され、出土遺物から6世紀初頭から後半までの住居の変遷が検討されている。平井遺跡5次調査、6次調査、下苅屋3次調査、古市遺跡1次調査、2次調査、五楽遺跡2次調査では堅穴住居、掘立柱建物、土坑などの集落関連遺構が多数検出されている。出土した遺物には生焼けや焼け至みのある須恵器が含まれており、これらの遺跡や周辺地域は松山平野東部古窯址群からの須恵器運搬に伴う中継地点あるいは集積地として機能していた可能性が高いと考え

られる。古墳では平野部にタンチ山古墳、前方後円墳の二つ塚古墳と波賀部神社古墳、丘陵部に五部兵衛谷古墳がある。

古代

来住台地上には、松山市の国指定史跡久米官衙遺跡群がある。史跡内の調査は現在までに120ヶ所以上の調査が行われ、古代の回廊状遺構、評庁院、正倉院が発見され地方官衙の様相が明らかとなりつつある。

中世

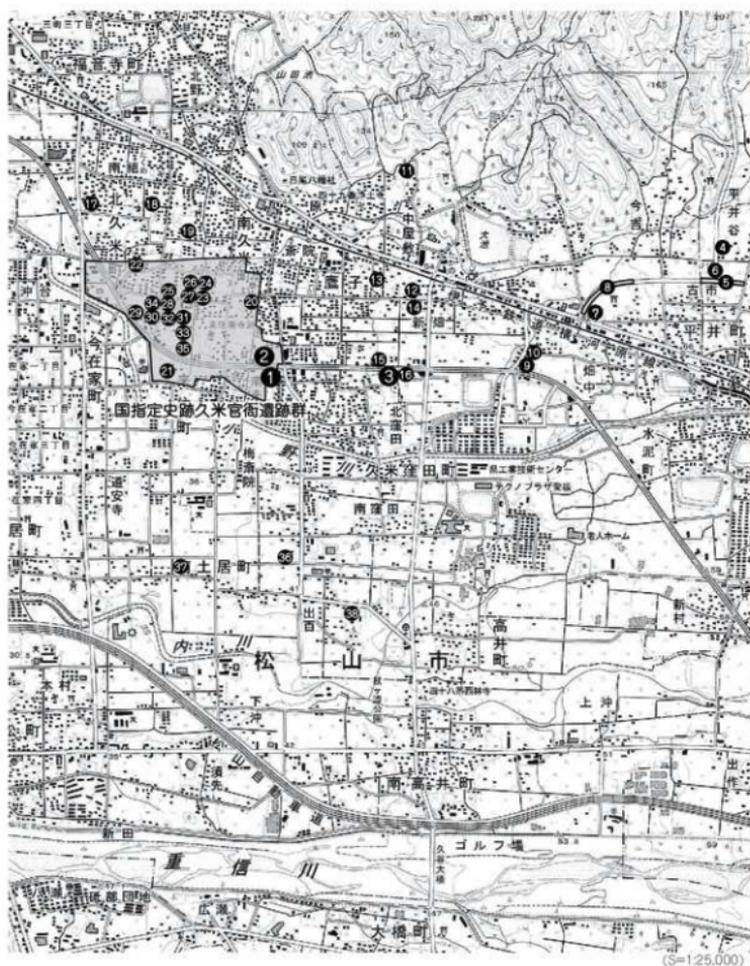
中世では鷹子新畑遺跡3次調査、北久米遺跡7次調査、来住町遺跡14次調査において掘立柱建物や井戸などの集落関連遺構を検出している。一方、来住町遺跡6次調査からは水田耕作に伴う動土などの生産関連遺構を検出している。

表1 調査地一覧

№	遺跡名	所 在	調査担当	申請面積㎡	調査期間
1	来住町遺跡8次調査	来住町242番1の一部、243番	相原秀仁 宮内慎一	1,272	H10.4.16～ H10.7.17
2	来住町遺跡12次調査	来住町230番の一部、237番1、 240番1	高尾和長	1,430.56	H13.4.9～ H13.5.25
3	久米窪田森元遺跡4次調査	久米窪田町859番1、860番1	山本健一	1,330.01	H9.12.15～ H10.3.31

【文献】

- 重松佳久 1992 「小野川水系における旧石器文化」『来住・久米地区の遺跡』
松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 栗田茂敏 1989 「久米窪田森元遺跡」松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ 松山市教育委員会
2000 「古石遺跡」「下高原遺跡」松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 相原秀仁 2001 「五楽遺跡Ⅱ次調査」松山市埋蔵文化財調査年報12
松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 小笠原善治 1998 「久米高畑遺跡36次調査」松山市埋蔵文化財調査年報Ⅹ
松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 小玉亜紀子 1997 「久米高畑遺跡26次調査」松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ
松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 河野史知 2004 「久米高畑遺跡35次調査」『来住・久米地区の遺跡Ⅴ』
松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 橋本雄一 1995 「久米高畑遺跡23次調査」松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ
松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 高尾和長 2000 「久米高畑遺跡25次調査」松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 宮内慎一 1992 「久米窪田古屋敷C遺跡」『来住・久米地区の遺跡』
松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 2000 「久米高畑遺跡27次調査」『来住・久米地区の遺跡Ⅴ』
松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 相原秀仁 1999 「来住庵寺7次調査」松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ
松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 宮内慎一 1996 「開遺跡1次調査」『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 森光晴 1986 「波賀部神社古墳」「二ツ塚」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県史編纂委員会
- 栗田茂敏 1996 「駄馬越々橋築址」『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター



- ① 来住町遺跡 8次調査 ② 来住町遺跡 12次調査 ③ 久米窪田森元遺跡 4次調査
- ④ 五葉遺跡 2次調査 ⑤ 古市遺跡 1次調査 ⑥ 古市遺跡 2次調査 ⑦ 下川屋遺跡 ⑧ 下川屋遺跡 3次調査 ⑨ 平井遺跡 5次調査
- ⑩ 平井遺跡 6次調査 ⑪ 五郎兵衛谷古墳 ⑫ 藤子新堀遺跡 ⑬ 藤子新堀遺跡 3次調査 ⑭ タンチ山古墳 ⑮ 久米窪田森元遺跡
- ⑯ 久米窪田古屋敷 C 遺跡 ⑰ 二つ塚古墳 ⑱ 北久米遺跡 7次調査 ⑲ 南久米沖台 B 遺跡 ⑳ 来住町遺跡 6次調査 ㉑ 来住町遺跡 14次調査
- ㉒ 久米高知遺跡 10次調査 ㉓ 久米高知遺跡 23次調査 ㉔ 久米高知遺跡 25次調査 ㉕ 久米高知遺跡 26次調査 ㉖ 久米高知遺跡 28次調査 ㉗ 久米高知遺跡 29次調査
- ㉘ 久米高知遺跡 35次調査 ㉙ 久米高知遺跡 50次調査 ㉚ 久米高知遺跡 59次調査 ㉛ 久米高知遺跡 60次調査 ㉜ 久米高知遺跡 61次調査 ㉝ 久米高知遺跡 64次調査
- ㉞ 久米高知遺跡 65次調査 ㉟ 来住薬寺遺跡 15次調査 ㊱ 関遺跡 ㊲ 中ノ子 1遺跡 ㊳ 道賀御神社古墳

第1図 調査地周辺遺跡分布図



第2図 来住町遺跡1次～13次調査位置図

第2章 来住町遺跡8次調査

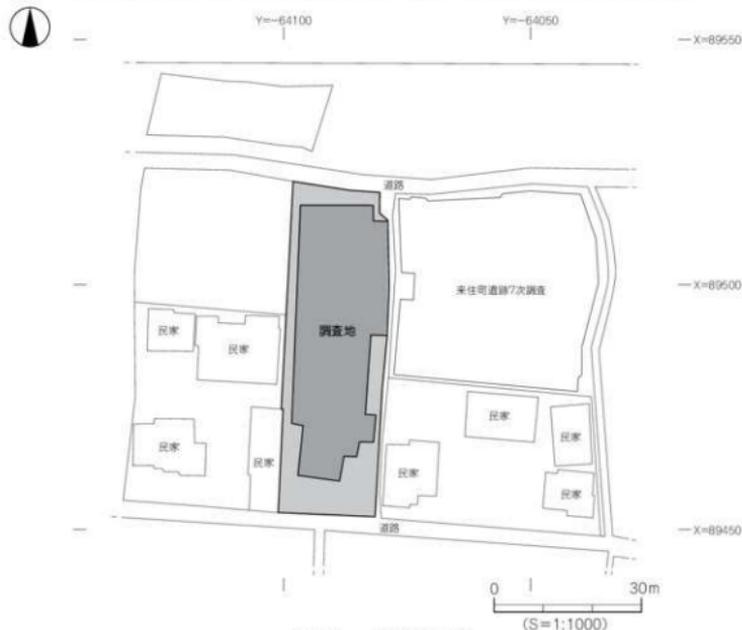
第1節 調査の経緯

(1) 調査に至る経緯

本調査は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「No.127 久米官衛遺跡群（旧来住庵寺跡）」内における宅地開発に伴う事前発掘調査である。調査地は来住台地から小野川に至る微高地上、標高約40.6m前後に立地する。平成9年現在、来住町遺跡としては、7回の発掘調査が実施され、弥生時代から中世までの集落関連遺構や遺物が数多く確認されている。特に、本調査地に隣接する来住町遺跡7次調査では、古墳時代の竪穴住居や古代の掘立柱建物のほか、自然流路が発見されている。

これらのことから、当該地における埋蔵文化財の有無を確認するため、1997（平成9）年3月に財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は試掘調査を実施した。その結果、竪穴住居や溝のほか自然流路を検出し、遺物は須恵器片や土師器片が出土した。この結果を受け、埋文センターと申請者である大西美鈴氏との間で遺跡の取り扱いについての協議が行われ、宅地開発によって消失する遺跡について記録保存のための発掘調査を実施することになった。

発掘調査は調査地や周辺地域の古墳時代や古代の集落構造解明を主目的とし、埋文センターが主体となり、申請者及び株式会社愛媛飼料の協力のもと、1998（平成10）年4月より開始した。



第3図 調査地測量図

(2) 調査の経緯

1998(平成10)年4月16日、屋外調査を開始する。排土置き場の都合上、調査は北半部と南半部とに分けて実施した。申請者の立会いのもとに調査区を設定し、北半部から重機の使用により表土掘削を行う。5月8日より遺構検出作業を開始し、掘立柱建物や溝、自然流路、足跡を検出する。5月22日より遺構の掘り下げや測量作業を行い、6月17日、北半部の調査を終了する。引き続き、6月23日より、南半部の調査を開始する。南半部では、堅穴住居や掘立柱建物、土坑を検出する。7月2日より遺構の掘り下げや測量作業を行い、7月10日、完掘状況写真を撮影する。重機の使用により埋め戻し作業を行い、7月17日、屋外調査を終了する。

(3) 調査組織

所在地：松山市来住町242番1の一部、243番

調査期間：1998(平成10)年4月16日～同年7月17日

調査面積：1,272㎡

調査協力：大西 美鈴

株式会社 愛媛飼料

調査主体：財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

調査担当：相原 秀仁・宮内 慎一

第2節 層位

調査地は標高約40.6m前後に立地し、調査以前は水田として利用されていた。調査地の基本層位は、以下の六層である。(第4・5図、図版3)

第Ⅰ層：近現代の水田耕作に伴う耕土〔灰オリーブ色土(5Y5/4)〕で、層厚5～22cmを測る。

第Ⅱ層：近世～近現代の水田耕作に伴う耕土で、土色の違いにより五種類に分層される。

第Ⅱ①層－灰白色土(10YR8/2)で調査区全域にみられ、層厚2～8cmを測る。

第Ⅱ②層－黄褐色土(10YR5/6)で調査区全域にみられ、層厚2～5cmを測る。

第Ⅱ③層－褐灰色土(10YR6/1)で調査区南半部にみられ、層厚2～6cmを測る。

第Ⅱ④層－灰黄褐色土(10YR5/2)で調査区全域にみられ、層厚3～15cmを測る。本層中からは、江戸時代の陶磁器片や土師器片が少量出土した。

第Ⅱ⑤層－灰黄褐色土(10YR4/2)で調査区全域にみられ、層厚3～10cmを測る。

第Ⅲ層：黒褐色(10YR3/1)を呈する粘質土で、調査区北半部に堆積がみられ、層厚5～30cmを測る。本層下面にて、自然流路や溝等を検出した。

第Ⅳ層：黒褐色(2.5Y3/1)を呈するシルト質の土壌で、調査区北東部と南西部に堆積がみられ、層厚5～40cmを測る。本層下面にて、掘立柱建物や足跡を検出した。

第Ⅴ層：黒褐色(10YR3/1)を呈する粘質土に、黄色シルト(2.5Y7/8)がブロック状に混入する土

層で、調査区ほぼ全域に堆積がみられ、層厚5～15cmを測る。本層下面にて、掘立柱建物を検出した。

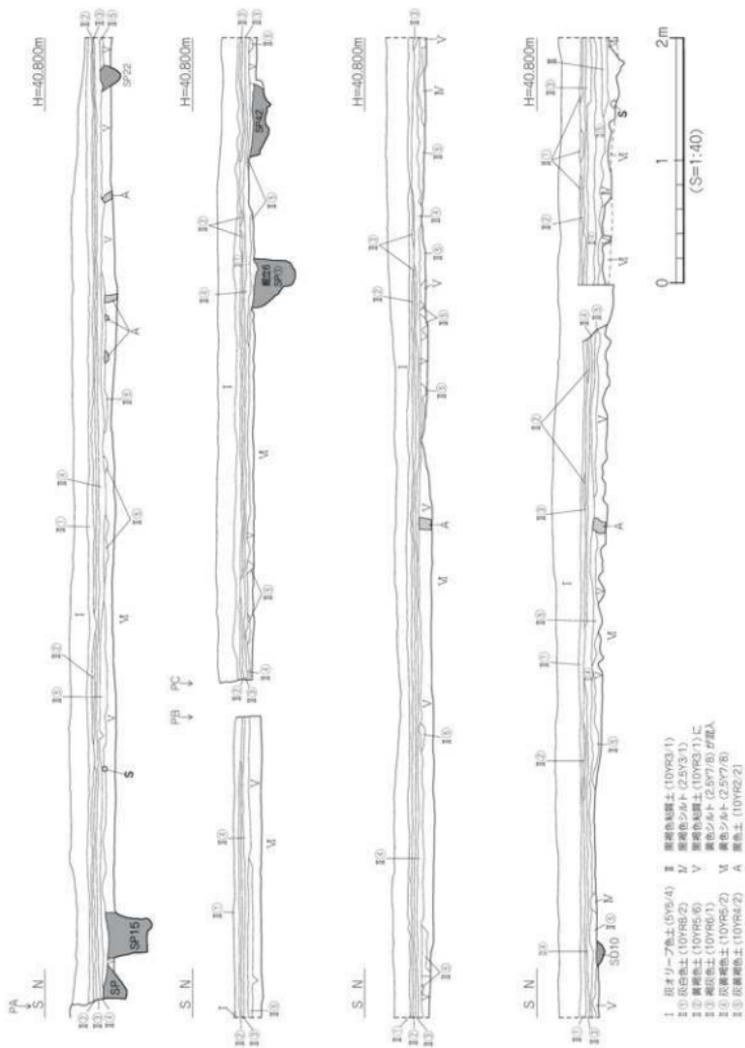
第Ⅵ層：黄色シルト（25Y7/8）で、来住台地上で検出される地山と呼ばれる土壌である。調査では本層上面にて、すべての遺構を検出した。本層上面の標高を測量すると、調査区南東部が最も高く、北西部に向けて緩やかな傾斜をなす（比高差15cm）。

検出遺構や出土遺物等より、第Ⅴ層は古墳時代、第Ⅲ層・Ⅳ層は古代までに堆積した土層と考えられる。なお、調査にあたり調査区内を5m四方のグリッドに分けた（第6図）。

今回の調査では、竪穴住居1棟、掘立柱建物9棟、溝10条、自然流路1条、土坑1基、柱穴122基及び足跡を検出した。遺物は弥生土器や土師器、須恵器、瓦器のほか、石器が数点出土した。なお、遺物の出土量は遺物収納用箱（44×60×14cm）約10箱分である。検出した遺構は、表2に記す。

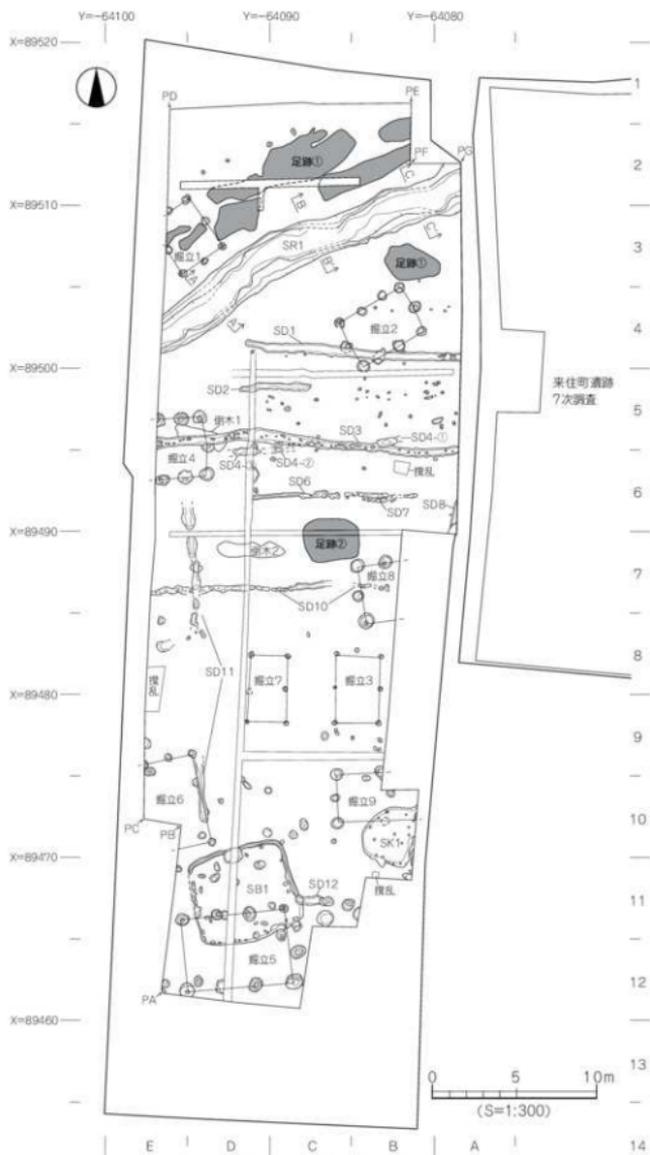
表2 検出遺構一覧

時 期	検 出 遺 構					
	竪穴住居	掘立柱建物	溝	自然流路	土 坑	足 跡
古墳時代後期	SB1	掘立1 掘立2	SD12	SR1	SK1	
7世紀前半		掘立4 掘立5 掘立6 掘立8 掘立9		SR1		
7世紀中葉			SD1 SD2 SD3 SD6 SD7 SD10 SD11	SR1		足跡①
7世紀後半				SR1		
中 世		掘立3 掘立7	SD4 SD8			足跡②



第4図 西郷土層図(1)

来住町遺跡 8 次調査



第 6 図 遺構配置図

第3節 遺構と遺物

本調査では、古墳時代から中世までの遺構を検出した。

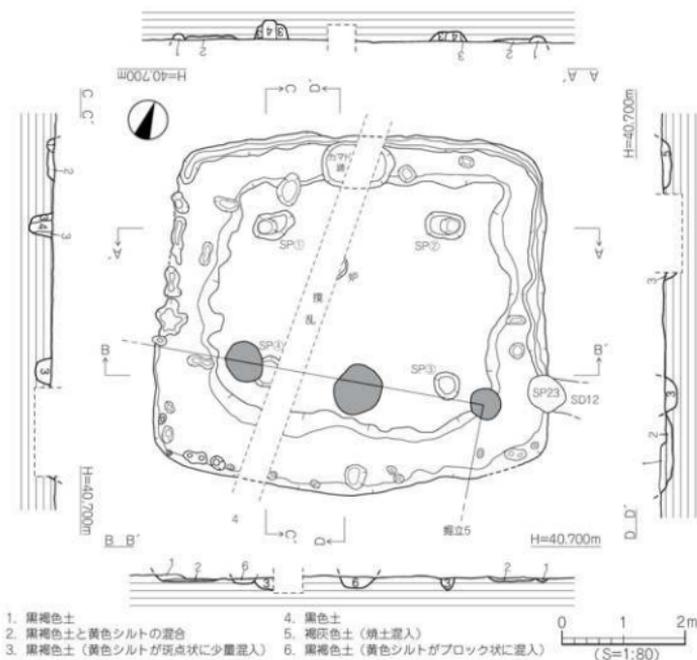
(1) 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、竪穴住居1棟、掘立柱建物2棟、溝1条、土坑1基である。

1) 竪穴住居 (SB)

SB1 (第7・8図、図版3)

調査区南半部、C10～D12区に位置する方形竪穴住居であるが、第V層掘り下げ時に平面プランが不明確であったため、第VI層上面まで掘り下げた結果、壁体は大半が消失し、住居床面にて柱穴や周壁溝のみを検出した。SB1南側は掘立5柱穴に削平され、住居東側壁体はSP23に一部削平されている。住居中央部には、北東-南西方向の攪乱が存在する。東西長6.15m、南北長5.90m、壁高8cmを測る住居で、埋土は黒褐色土単層である。住居床面にて10数基の柱穴を検出した。このうち、SP①・②・③・④の4本は支柱穴と考えられ、規模は径60～70cm、深さ18～35cmを測る。柱穴



第7図 SB1測量図

掘り方埋土は、黒褐色土に黄色シルトが斑点状に少量混入するものである。なお、柱痕はSP①・②で検出され、径25cmを測り、柱痕埋土は黒色土である。このほか、住居床面に周壁溝を検出した。周壁溝はほぼ全周するが、住居南壁で一部途切れる箇所がある。また、住居南壁と西壁側では小ピットが列をなす。

住居床面中央部の凹凸部分には、貼床を施した痕跡が認められた。貼床は黒褐色土と黄色シルトの混合土を使用し、6～8cm程度の厚みで施されている。

住居北側壁体中央部にて、カマド跡と思われる焼土塊を検出した。また、住居中央部には径35～40cm、深さ8cmを測る炉址を検出した。炉址内からは、少量ではあるが焼土を検出した。

遺物は住居埋土中より、須恵器や土師器が出土した。

出土遺物 (1～9)

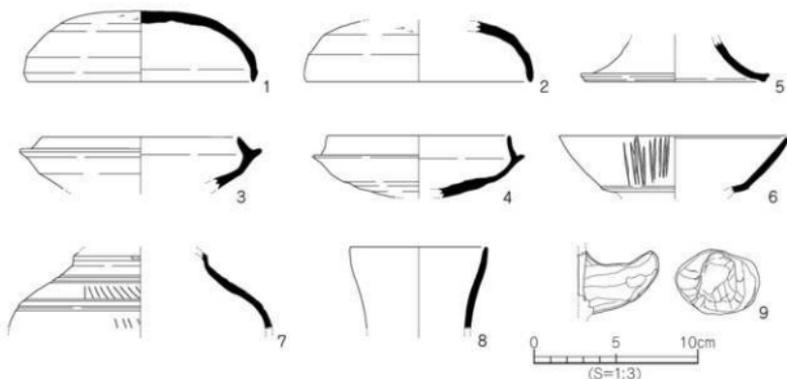
1・2は須恵器坏蓋。天井部は扁平で、口縁端部は尖り気味に仕上げる。3・4は須恵器坏身。3のたちあがりは低く内傾し、端部は尖る。4のたちあがり端部は尖り気味に丸く仕上げ、受部端に沈線状の凹みが巡る。5は高坏の脚部で、脚端部は上下方に肥厚し、脚端面はナデ凹む。6は甕の口縁部片で、口縁端部は内傾し、口縁部外面には斜線文を施す。7は短頸壺で、肩部に沈線と列点文を施す。8は提瓶の口縁部で、口縁端部は尖り気味に仕上げる。9は土師器甌の把手部で、断面形態は舌状を呈する。

時期：出土した須恵器の特徴より、SB1の廃棄・埋没時期は6世紀後半とする。

2) 掘立柱建物 (掘立)

掘立1 (第9図、図版3)

調査区北西部、D2～E3区で検出した建物で、建物上面は第V層が覆う。2間×2間の南北棟で、桁行長3.56m、梁行長3.02mを測る。各柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径36～56cm、深さ5～24cmを測る。柱穴掘り方埋土は、黒褐色土に黄色シルトがブロック状に混入するも



第8図 SB1出土遺物実測図

のである。柱痕は4基の柱穴で検出され、柱痕径14～20cmを測る。柱痕埋土は、黒色土である。遺物はSP⑤内より須恵器坏蓋が出土したほか、各柱穴内より須恵器片や土師器片が少量出土した。

出土遺物 (10)

10はSP⑤出土の須恵器坏蓋。天井部は扁平で、口縁端部は尖り気味に仕上げる。天井部1/3の範囲に、回転ヘラケズリ調整を施す。

時期：出土した須恵器の特徴より掘立1は古墳時代後期、6世紀後半以降の建物と考えられる。

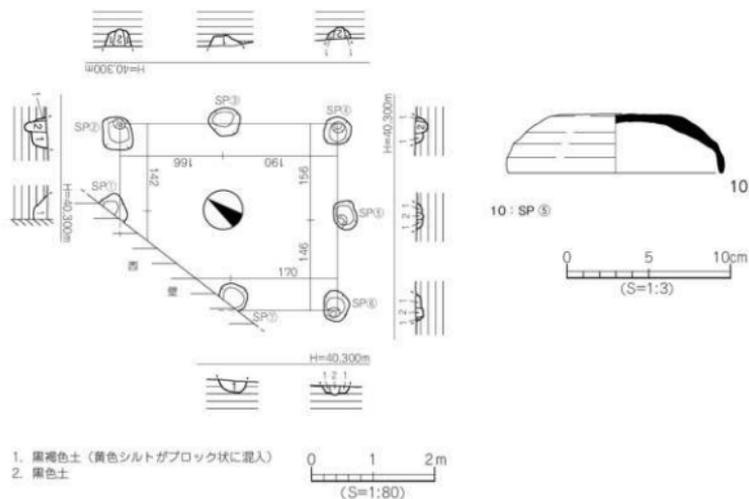
掘立2 (第10図、図版4)

調査区北東部、B3～C5区で検出した建物で、建物上面は第V層が覆う。また、建物柱穴は溝SD1により一部削平されている。3間×2間の東西棟で、桁行長4.24m、梁行長2.99mを測る。各柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径50～80cm、深さ20～44cmを測る。柱穴掘り方埋土は二層あり、1層は黒褐色土(黄色シルトがブロック状に混入)、2層は暗褐色土(黄色シルトがブロック状に混入)である。柱痕は4基の柱穴で検出され、径25～30cmを測る。柱痕埋土は、黒色土である。遺物は、柱穴掘り方埋土中より須恵器や土師器の小片が数点出土した。図化する遺物を1点掲載した。

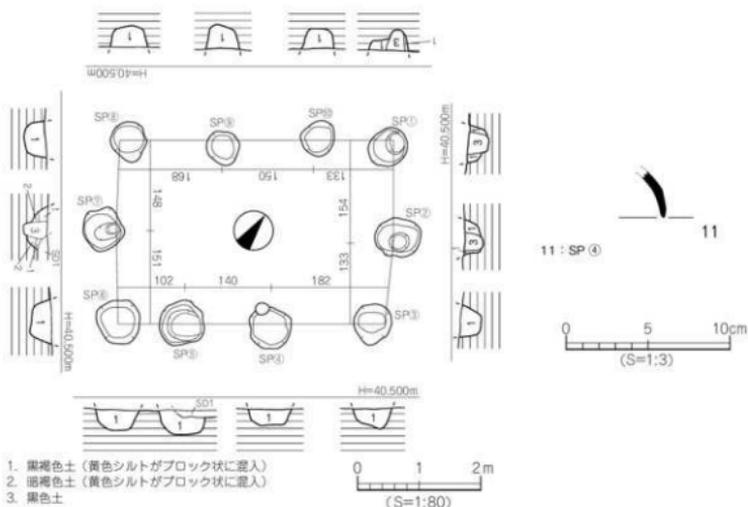
出土遺物 (11)

11はSP④出土の須恵器坏蓋片で、口縁端部は尖り気味に仕上げる。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、柱穴埋土が掘立1と酷似することから、掘立2は概ね古墳時代後期、6世紀後半以降の建物と考える。



第9図 掘立1 測量図・出土遺物実測図



3) 溝 (SD)

SD 12 (第6図)

調査区南東部、C11区で検出した東西方向の短い溝で、溝西端はSB1に切られている。幅0.49m、検出長0.88m、深さ15cmを測り、埋土はSB1と同様の黒褐色土単層である。断面形態は皿状を呈する。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、SB1に先行することから、古墳時代後期、6世紀後半以前の遺構とする。

4) 土坑 (SK)

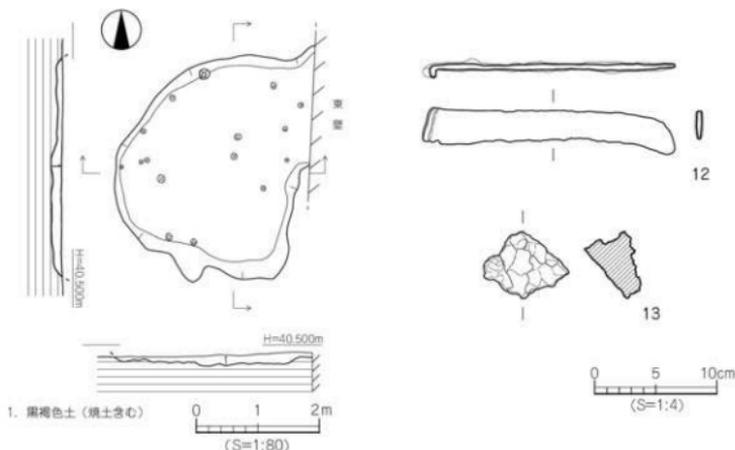
SK 1 (第11図、図版6)

調査区南東部、B10・11区に位置する土坑で、土坑東側は調査区外に続き、土坑上面は第V層が覆う。平面形態は不整形円形を呈するものと思われ、規模は南北検出長3.56m、東西長3.14m、深さ18cmを測る。断面形態は緩やかな逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。土坑基底面はわずかに北側から南側に向けて緩傾斜をなし、基底面からは径3～5cm、深さ2～6cmを測る小ピットを10数基検出した。遺物は埋土中より、土師器片や須恵器片が数点出土したほか、鉄器が出土した。

出土遺物 (12・13)

12は鉄製の鎌で、長さ20.5cm、幅2.9cm、厚さ0.7cmを測る。全面は、錆ぶくれにより覆われている。重量85.49g。13は鉄滓で、重量123.25gを測る。表面には、無数の気泡が看取される。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、土坑上面を第V層が覆うことや埋土がSB1や掘立1・2柱穴と類似することから、SK1は概ね古墳時代後期、6世紀後半の遺構とする。



第 11 図 SK 1 測量図・出土遺物実測図

(2) 古代の遺構と遺物

古代の遺構は掘立柱建物 5 棟、溝 7 条、自然流路 1 条及び足跡である。

1) 掘立柱建物（掘立）

掘立 4（第 12 図）

調査区中央部北西寄り、D5～E6 区で検出した建物で、建物中央部は溝 SD3 に削平され、建物西側は調査区外に続く。建物上面は第Ⅳ層、及び足跡を形成する水田層が覆う。東西 2 間以上、南北 2 間の東西棟で、桁行検出長 3.00 m、梁行長 3.68 m を測る。各柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径 0.65～0.98 m、深さ 25～55cm を測る。柱穴掘り方埋土は黒褐色土（黄色シルトがブロック状に混入）を基調とするが、一部の柱穴下部には暗褐色土（黄色シルトがブロック状に混入）が見られる。柱痕は 5 基の柱穴で検出され、径 18～23cm を測る。柱痕埋土は、黒色土である。遺物は柱穴掘り方埋土中より、土師器片や須恵器片が少量出土した。

出土遺物（14・15）

14 は SP ⑦出土の須恵器坏身。たちあがりは内傾し、端部は尖り気味に仕上げる。15 は SP ⑩出土の須恵器壺の肩部片で、外面に平行叩き、内面には円弧叩きを施す。

時期：出土遺物の特徴より、掘立 4 は 7 世紀前半の建物とする。

掘立5 (第13図)

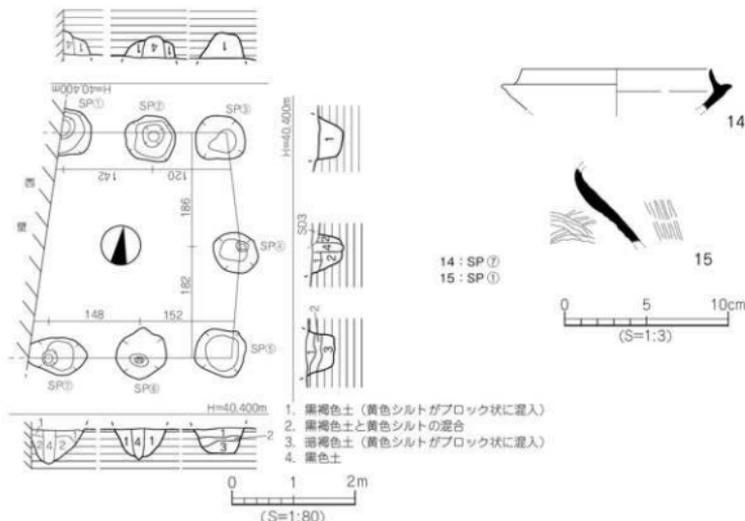
調査区南端、C11～E12区で検出した建物でSB1より後出し、建物中央部には南北方向の擾乱が存在する。東西3間、南北1間の東西棟で、桁行長6.42m、梁行長4.60mを測る。各柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、径0.40～0.96m、深さ10～44cmを測る。柱穴掘り方埋土は、黒褐色土（黄色シルトがブロック状に混入）である。柱痕は6基の柱穴で検出され、径14～24cmを測り、柱痕埋土は黒色土である。遺物は柱穴掘り方埋土中より土師器片が数点出土したが、図化するものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、柱穴埋土が掘立4に酷似することから、掘立5は概ね7世紀前半頃の建物とする。

掘立6 (第14図)

調査区南西部、D9～E9区で検出した建物で、建物東側は溝SD11に削平され、建物西側は調査区外に続く。東西1間以上、南北3間の南北棟で、桁行検出長2.89m、梁行長5.36mを測る。各柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径0.40～0.50m、深さ15～30cmを測る。柱穴掘り方埋土は、黒褐色土（黄色シルトがブロック状に混入）である。柱痕は2基の柱穴で検出され、径12cmを測り、柱痕埋土は黒色土である。遺物は、柱穴掘り方埋土中より土師器片が数点出土したが、図化するものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、柱穴埋土が掘立4と酷似することから、掘立6は概ね7世紀前半頃の建物とする。



第12図 掘立4 測量図・出土遺物実測図

掘立 8 (第 14 図)

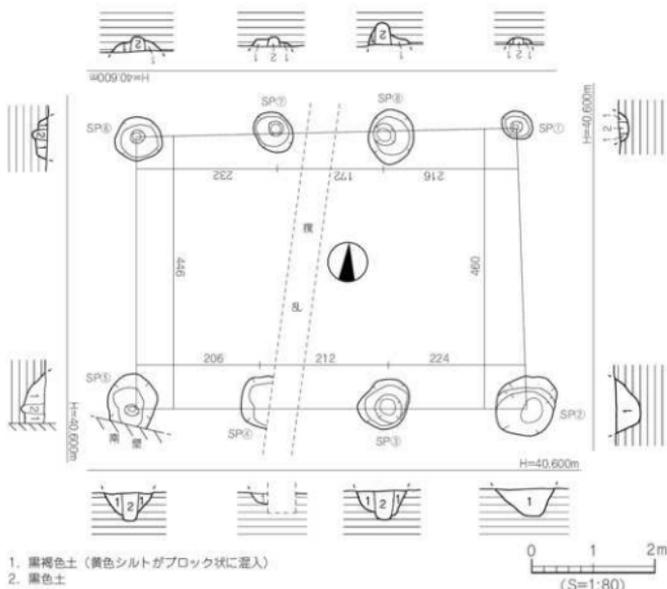
調査区中央部東寄り、B7・8区で検出した建物で、建物東側は調査区外に続く。東西1間以上、南北2間の東西棟で、桁行検出長1.68m、梁行長3.44mを測る。各柱穴の平面形態は円形を呈し、径0.70～0.96m、深さ26～32cmを測る。柱穴掘り方埋土は、黒褐色土（黄色シルトがブロック状に混入）である。柱痕は3基の柱穴で検出され、径26～28cmを測り、柱痕埋土は黒色土である。遺物は柱穴掘り方埋土中より土師器片が数点出土したが、図化する遺物はない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、柱穴埋土が掘立4と酷似することから、掘立8は概ね7世紀前半頃の建物とする。

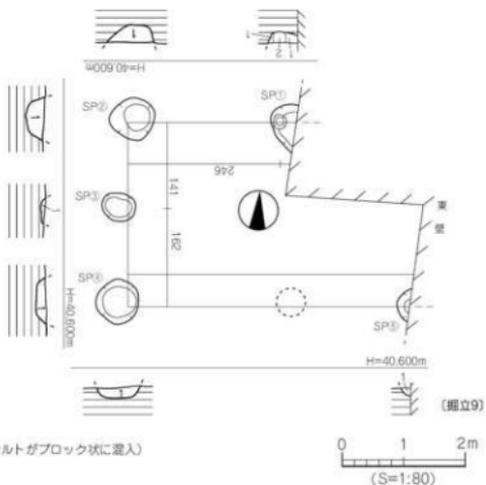
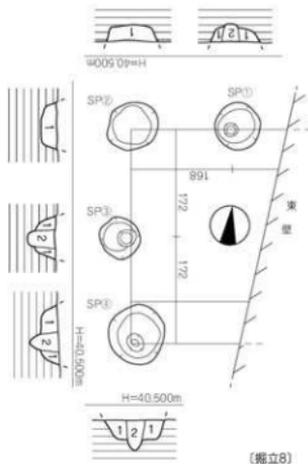
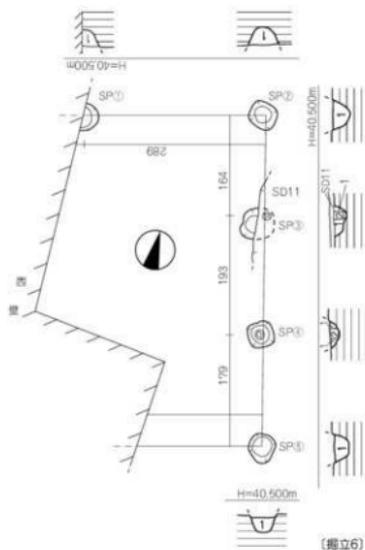
掘立 9 (第 14 図)

調査区南東部、B9～C10区で検出した建物で土坑SK1より後出し、建物東側は調査区外に続く。東西2間以上、南北2間の東西棟で、桁行検出長4.61m、梁行長3.03mを測る。各柱穴の平面形態は円形を呈し、径0.42～0.72m、深さ8～28cmを測る。柱穴掘り方埋土は、黒褐色土（黄色シルトがブロック状に混入）である。柱痕はSP①で検出され、径18cmを測り、柱痕埋土は黒色土である。遺物は柱穴掘り方埋土中より土師器片や須恵器片が数点出土したが、図化するものはない。

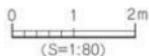
時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、柱穴埋土が掘立4と酷似することから、掘立9は概ね7世紀前半頃の建物とする。



第 13 図 掘立 5 測量図



1. 黒褐色土 (黄色シルトがブロック状に混入)
2. 黒色土



第14図 掘立6・8・9測量図

2) 溝 (SD)

SD 1 (第6・15図)

調査区北部、A4～D4区で検出した東西方向の溝で、溝中央部は掘立2柱穴を削平し、溝東側は調査区外に続く。検出長12.70m、幅0.56～0.62m、深さ17～21cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。溝基底面はほぼ平坦で、凹凸は見られない。遺物は埋土中より、土師器片や須恵器片が少量出土した。

出土遺物 (16～18)

16は須恵器坏蓋で、天井部と口縁部との境界には凹線状の凹みが巡る。17は須恵器坏身片で、たちあがりは短く内傾し、端部は丸く仕上げ上げる。18は移動式カマドの口縁部片で、外面にはハケメ調整を施す。

時期：出土遺物の特徴より、SD1は7世紀中葉の溝とする。

SD 2 (第6図)

調査区中央部北寄り、C5～D5区で検出した東西方向の溝で、溝両端は消滅している。検出長4.20m、幅46～50cm、深さ18～21cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。溝基底面はほぼ平坦で、凹凸は見られない。遺物は埋土中より土師器や須恵器の小片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、溝埋土がSD1と酷似することから、SD2は概ね7世紀中葉頃の溝とする。

SD 3 (第6図)

調査区中央部やや北寄り、A5～E5区で検出した東西方向の溝で、溝西側は掘立4柱穴を削平し、溝両端は調査区外に続く。第VI層上面での検出であるが、調査壁の土層観察より本来は第IV層上面より掘削された遺構であることが判明している。検出長17.90m、幅56～73cm、深さ17～20cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。溝基底面はほぼ平坦であるが、径5～10cm、深さ5cm程度の小ピットが数多く点在する。遺物は埋土中より土師器や須恵器の小破片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、掘立4より後出することや柱穴埋土がSD1などと酷似することから、SD3は概ね7世紀中葉頃の溝とする。



第15図 SD 1出土遺物実測図

SD6 (第6図)

調査区中央部、B6～D6区で検出した東西方向の溝で、溝両端は消失している。検出長11.00m、幅30～38cm、深さ10～14cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。溝基底面はほぼ平坦であるが、溝東半部には径5～10cm、深さ5cm程度の小ピットが点在する。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土がSD1と酷似することから、SD6は概ね7世紀中葉頃の溝とする。

SD7 (第6図)

調査区中央部、B6区で検出した東西方向の短い溝で、溝両端は消失している。検出長4.19m、幅40～54cm、深さ6～8cmを測る。溝基底面には径10～15cm、深さ6cm程度の小ピットが列をなしており、断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。溝内からは土師器の小破片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、埋土がSD1と酷似することから、SD7は概ね7世紀中葉頃の溝とする。

SD10 (第6図)

調査区中央部、B7～E7区で検出した東西方向の溝で、溝西側はSD11と重複し、溝東側は消失している。検出長10.10m、幅40～49cm、深さ10～15cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。溝基底面はほぼ平坦であるが、径5～15cm、深さ10cm程度の小ピットが数多く点在する。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土がSD1やSD2と酷似することから、SD10は概ね7世紀中葉頃の溝とする。

SD11 (第6図)

調査区西側、D・E6～D10区で検出した南北方向の溝で、溝南側は掘立6柱穴を削平し、溝中央部はSD10と重複し、溝両端は消失している。検出長16.00m、幅60～72cm、深さ20～25cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。溝基底面はほぼ平坦であるが、凹凸は見られない。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土がSD1などと酷似することから、SD11は概ね7世紀中葉頃の溝とする。

3) 自然流路 (SR)

SR1 (第16～22図、図版4～6)

調査区北部、A2～E4区で検出した北東-南西方向の流路で、流路壁体下面には足跡①を伴った水田層が存在する。第VI層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により本来は第V層上面から掘削された遺構であることが判明している。検出長20.80m、幅2.40～2.90m、深さは最深部で90cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、部分的ではあるが幅50cm程度のテラス状施設が溝両側に

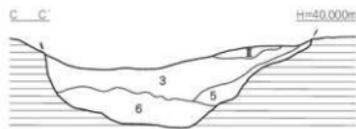
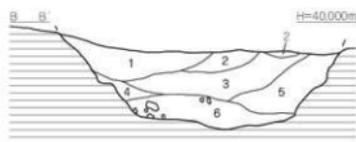
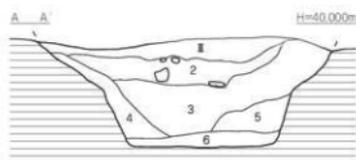
見られる。埋土は六種類に分層され、流路上位から1層：灰黄褐色土、2層：暗褐色土、3層：灰黄色細砂、4層：褐灰色土（灰白色微砂が縞状に混入）、5層：褐灰色土となり、溝基底面付近には灰色砂礫（6層）が堆積する。堆積状況から、4層や5層が堆積後に流路は再掘削されたと推測される。流路基底面に凸凹はみられないが、北東から南西に向けて傾斜をなす（比高差13cm）。

発掘調査時は、流路の掘り下げや遺物の取り上げを、下層（4～6層）と上層（1～3層）に分けて行った。ここでは、各層から出土した遺物を「下層出土遺物」、「上層出土遺物」として掲載したが、それ以外に調査に先行して設定したトレンチからの出土品や出土地点が不明な遺物があるため、それらは「地点不明遺物」として掲載している。

SR1 下層出土遺物（第17～19図、図版5）

須臾器（19～40）

19～22は坏壺。19は口径13.5cm、器高4.3cmを測る復元完形品で、口縁端部は尖り気味に仕上げる。天井部外面には回転ヘラ切り痕を残す。22は断面三角形の鋭い稜を持ち、口縁端部は内傾する凹面をなす。23～29は坏身。23～27のたちあがりは短く内傾し、端部は尖り気味に仕上げる。26・27は、たちあがり径11.9～12.0cm、受部径14.1cm、器高3.6～3.8cmを測る復元完形品で、底部外面には回転ヘラ切り痕を残す。28のたちあがりは内傾し、端部は丸く仕上げる。色調は灰黄色を呈し、底部外面にはヘラ状工具による線刻（ヘラ記号?）を施す。29のたちあがり端部は内傾し、端部に沈線状の凹みが巡る。30は無蓋高坏の坏部で、下位に凸線2条を施す。31～33は高坏の脚部。31は長方形の透かしを3方向に看取する。33は長方形の透かしを3方向に穿ち、柱部には回転カキメ調整を施す。34～36は壺。34・35は短頸壺で、34の肩部には沈線2条を施す。35は頸部に沈線1条、肩部にはヘラ状工具による線刻、胴部には平行叩き後、回転カキメ調整を施す。36は赤焼け土器で、肩部に凹線2条、底部下位には回転ヘラケズリ調整を施す。37は提瓶の胴部片で、ボタン状の把手をもつ。38～40は甕。38・39の口縁端部は珠玉状に仕上げ、39の外面は平行叩き、内面には円弧叩きを施す。40の口縁端部は下方に肥厚し、頸部には回転カキメ調整、胴部外面には平行叩きを施す。



1. 灰黄褐色土
2. 暗褐色土
3. 灰黄色細砂
4. 褐灰色土（灰白色微砂が縞状に混入）
5. 褐灰色土
6. 灰色砂礫（2～5cm大の円礫含む）

0 1m
(S=1:40)

第16図 SR1 断面図

土師器 (41～53)

41～45は甕。41の口縁部下位には稜をもち、口縁端部は内傾する。42の口縁端部は「コ」字状を呈し、口縁部内面には稜をもつ。43～45は外反口縁で、口縁端部は丸く仕上げる。46・47は椀。46は体部が内湾し、口縁端部は丸く仕上げる。47は口径11.0cm、器高5.2cmを測り、口縁端部は尖る。48は高坏の脚部片で、柱裾部内面には明瞭な稜をもつ。49・50は甌。50の口縁部はやや外反し、口縁端部は内方に肥厚する。51は移動式カマドの庇部である。52・53は土製の紡錘車で、52は断面形態が台形状を呈し、中央部に径1.6cm大の孔を穿つ。53は直径6.7cm、厚さ2.1cmを測る円盤状の紡錘車で、中央部に径0.7cm大の孔を穿ち、周囲には径0.6～0.7cm大の竹管文15ケを施す。

SR1 上層出土遺物 (第20・21図、図版6)

須恵器 (54～65)

54・55は坏蓋。天井部は丸みをもち、口縁端部は尖り気味に仕上げる。55は口径10.4cm、器高3.7cmを測る復元完形品で、天井部1/3の範囲に回転ヘラケズリ調整を施す。56は復元完形品の坏身で、たちあがり径11.8cm、受部径13.7cm、器高3.5cmを測る。内面は灰色を呈するが、外面は赤褐色を呈する。57～59は坏。57は完形品で、口径9.1cm、器高4.1cmを測る。57・58は体部が直線的に立ち上がり、底部外面には回転ヘラ切り痕を残す。59は口縁部がやや外反し、口縁端部内面には沈線状の凹みが巡り、体部下半部には凹線状の凹みが巡る。60は椀。口縁部は短く外反し、底部は平底をなす。61は高坏の脚部で、脚端部は下方に肥厚する。62は壺の口頸部片で、口縁端部は上内方に肥厚する。63は脚付壺の脚部で、中位に凸線1条、上位には長方形の透かしを穿つ。64・65は甕。64の口縁部は長方形に肥厚し、口縁端部は上方につまみ上げられている。65は長く外反する口頸部をもち、口縁端部は下方に垂下する。

土師器 (66～73)

66～68は甕。66・67の口縁部内面は上方に肥厚し、口縁端部は「コ」字状を呈する。68の口縁部は外反し、口縁端部は丸く仕上げる。69・70は椀。体部は内湾し、口縁端部は丸く仕上げる。71・72は高坏の脚部で、72の坏脚部接合は指し込み技法による。73は甌の把手部で、舌状を呈する。

金属製品 (74)

74は鉄滓で、重量25.12gを測る。表面には、わずかに気泡が残る。

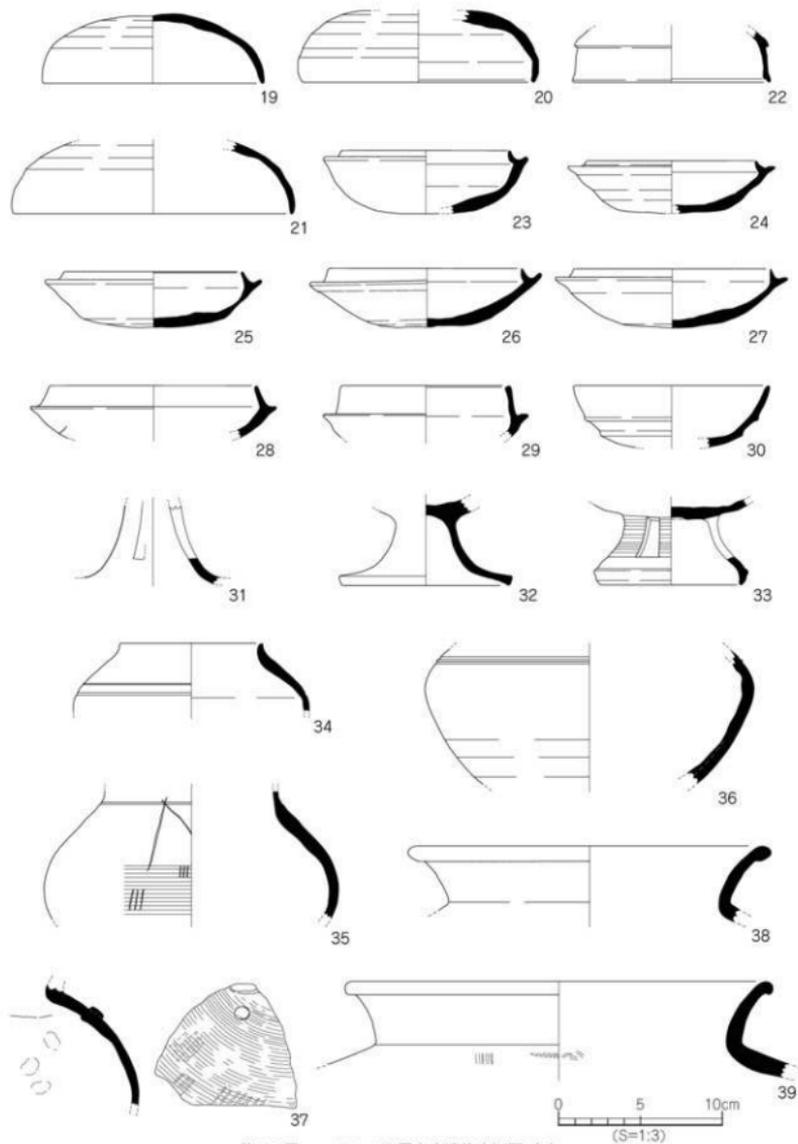
SR1 地点不明出土遺物 (第22図、図版6)

須恵器 (75～78)

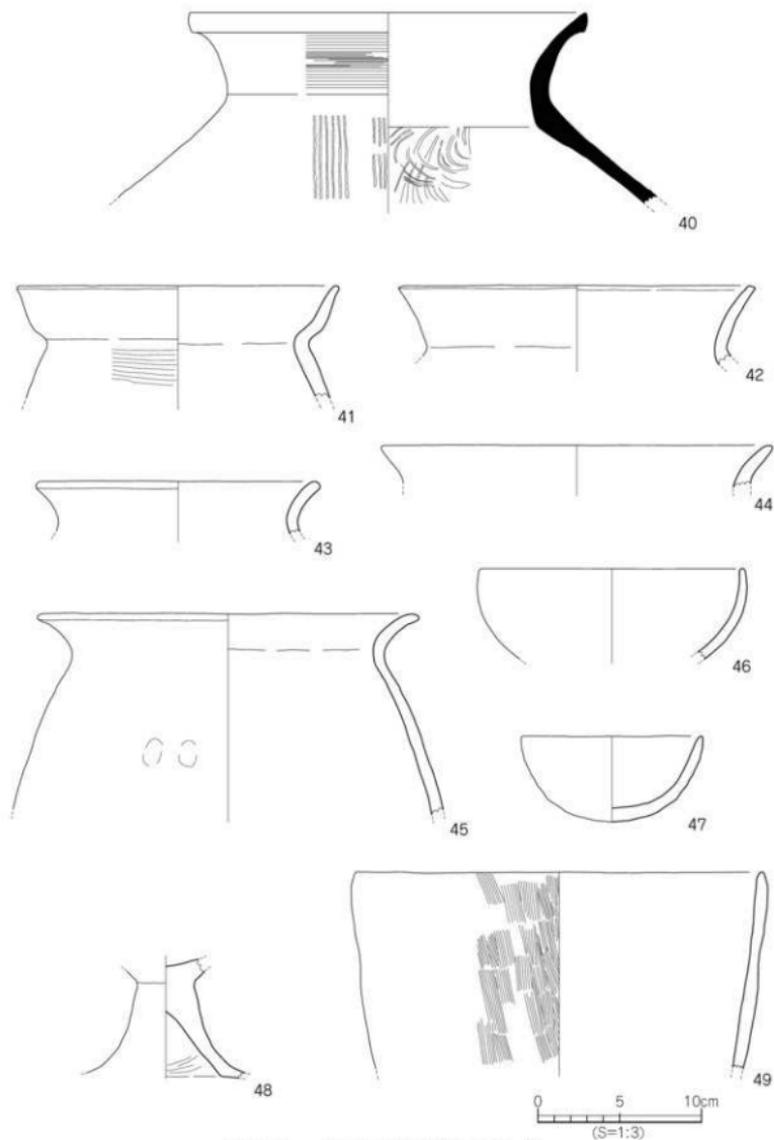
75はたちあがり径13.0cm、受部径15.3cm、器高3.7cmを測る完形の坏身。たちあがり端部は丸く、底部外面には1/2の範囲に回転ヘラケズリ調整を施す。76は甌の口縁部で、凸線の上下に波状文を施す。77は高坏の脚部片で、脚端部は上下方に拡張する。78は甌で口縁端部は内傾する面をもち、体部には3条の沈線を施す。

土師器 (79～86)

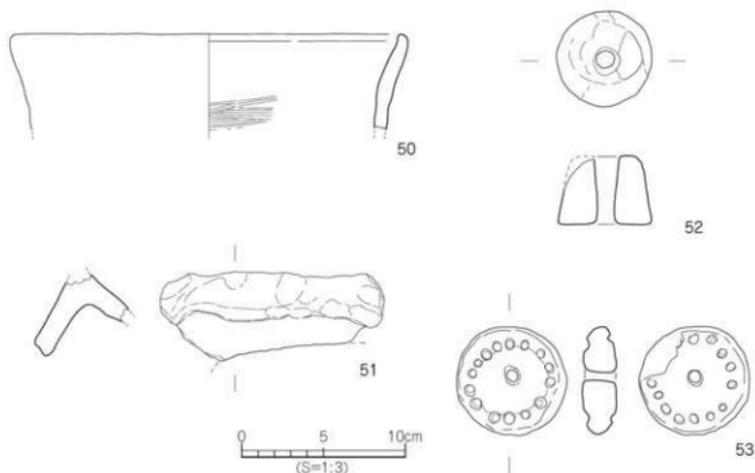
79は甕で、口縁部はわずかに内湾し、頸部内面には明瞭な稜をもつ。80は椀で、体部内面に細かなハケメ調整を施す。81・82は坏。色調は81が褐色、82は赤褐色を呈し、体部内面に格子目状の暗文を施す。83・84は高坏の脚部片、85は甌の把手部である。86は土製の紡錘車で、断面形態は台形状を呈し、中央部に径0.8cm大の孔を穿つ。



第17図 SR1下層出土遺物実測図(1)



第18図 SR1下層出土遺物実測図(2)



第19図 SR1下層出土遺物実測図(3)

金属製品 (87)

87は鉄滓で、重量37.14gを測る。表面には、気泡と錆が付着している。

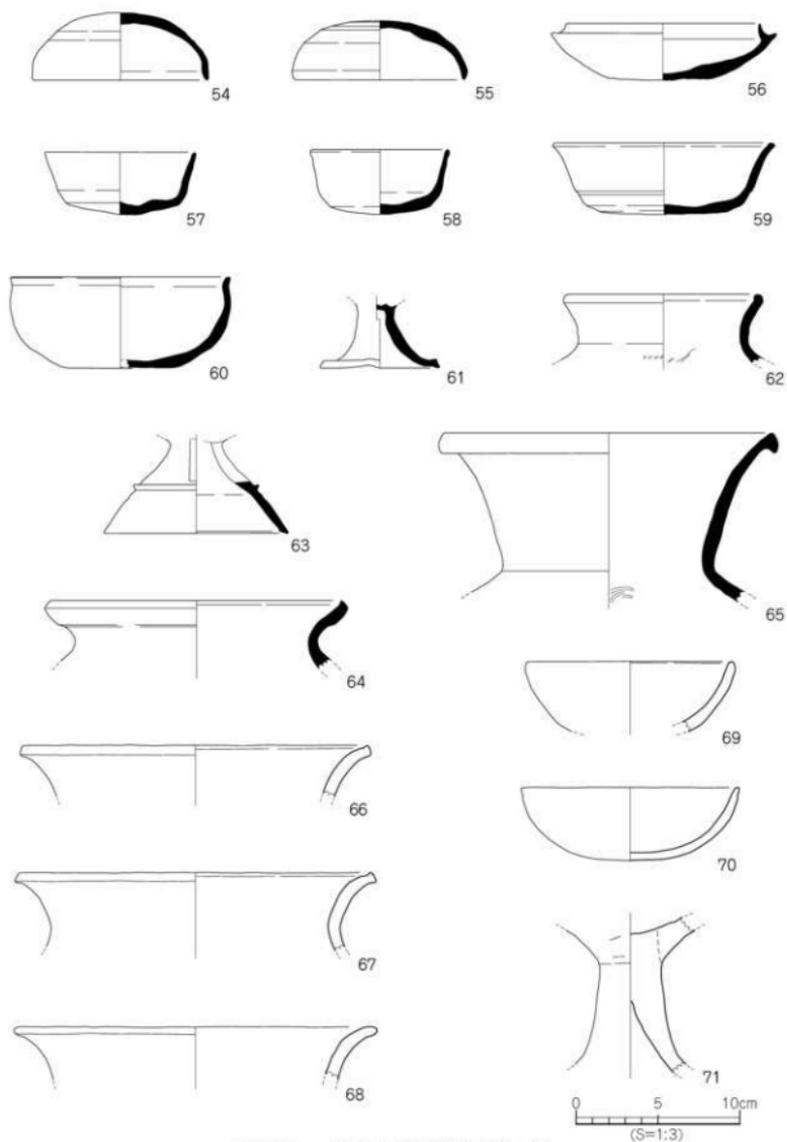
時期：出土遺物を見ると、下層出土品は古墳時代後期、6世紀後半に時期比定されるものが主体をなし、上層出土品は7世紀代の遺物が主体をなす。よって、SR1の掘削時期は6世紀後半頃であり、埋没時期を7世紀後半とする。

4) 足跡

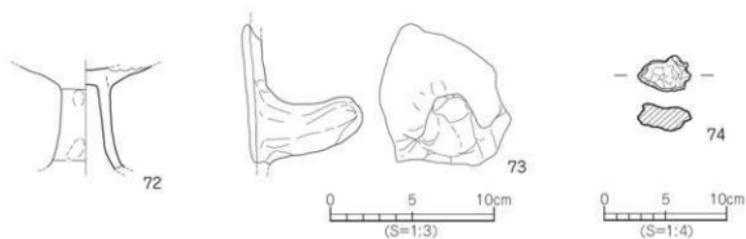
足跡① (第6図、図版4)

調査区北部で検出した無数の足跡で、水田耕作に伴う遺構と考えられる。SR1 両側で検出され、足跡上面は第IV層が覆う。なお、足跡埋土は第IV層と同様の黒褐色土である。足跡の規模は、径10～20cm、深さ3～8cmを測る。足跡内からは、遺物の出土はない。

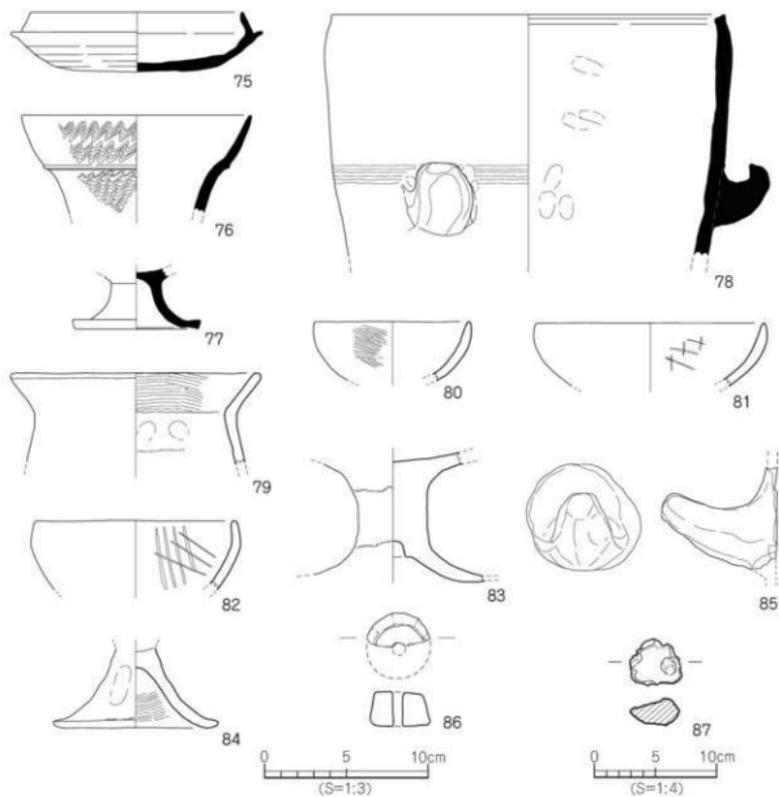
時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、第IV層が覆うことや埋土等から、足跡①は溝SD1やSD2と同様、7世紀中葉頃の遺構と考えられる。



第20図 SR1上層出土遺物実測図(1)



第 21 図 S R 1 上層出土遺物実測図 (2)



第 22 図 S R 1 地点不明出土遺物実測図

(3) 中世の遺構と遺物

中世の遺構は、掘立柱建物2棟、溝2条及び足跡である。

1) 掘立柱建物(掘立)

掘立3(第23図)

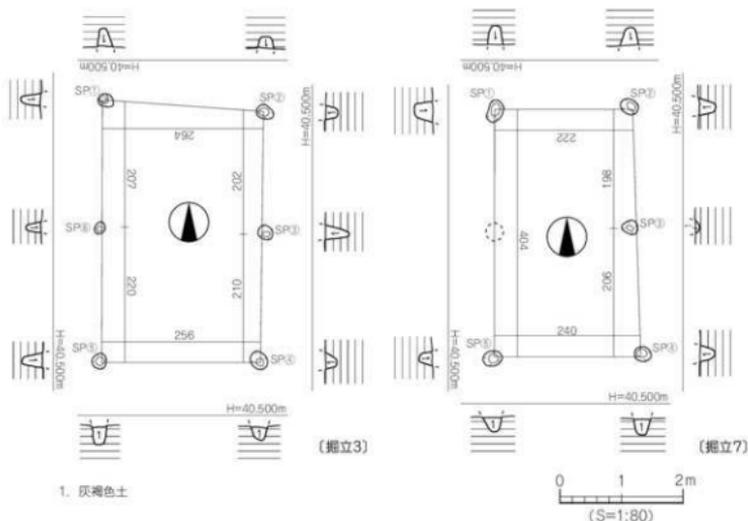
調査区中央部南寄り、B8～C9区で検出した建物で、東西1間、南北2間の南北棟である。桁行長4.27m、梁行長2.64mを測り、建物方位をほぼ真北にとる。各柱穴は円形を呈し、径0.15～0.30m、深さ18～35cmを測る。柱穴掘り方埋土は、灰褐色土単層である。遺物は土師器小片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、埋土が中世の溝SD4やSD8と酷似することから、掘立3は概ね中世段階の建物とする。

掘立7(第23図)

調査区中央部南寄り、C8～D9区で検出した建物で、東西1間、南北2間の南北棟である。桁行長4.04m、梁行長2.40mを測り、建物方位をほぼ真北方向にとる。各柱穴は円形または楕円形を呈し、径0.20～0.24m、深さ8～30cmを測る。柱穴掘り方埋土は、灰褐色土単層である。遺物は土師器小片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、埋土が掘立3や溝SD4などと酷似することから、掘立7は概ね中世段階の建物とする。

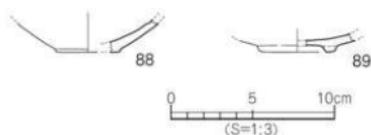


第23図 掘立3・7測量図

2) 溝 (SD)

SD 4 (第 6・24 図)

調査区中央部北寄り、B5～D6区で検出した東西方向の溝で、溝SD3より後出し、溝両端は消失している。検出長10.00m、幅30～36cm、深さ22～29cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰褐色土単層である。溝基底面は平坦であるが、凹凸は見られない。溝からは土師器坏の底部片のほか、瓦器碗の底部片などが出土している。



第 24 図 SD 4 出土遺物実測図

出土遺物 (88・89)

88は土師器坏の底部で、円盤高台状を呈する。89は瓦器碗で、断面方形の高台が付く。

時期：出土遺物の特徴より、SD4は中世、13世紀代の遺構とする。

SD 8 (第 6 図)

調査区中央部東端、A6区で検出した南北方向の短い溝で、検出長1.60m、検出幅37cm、深さ8cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰褐色土単層である。溝内からは土師器や須恵器の小破片が数点出土したが、図化しうものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、埋土がSD4と酷似することから、SD8は概ね中世段階の溝とする。

3) 足跡

足跡② (第 6 図)

調査区中央部、B6～C7区で検出した足跡で、2×3.5mの範囲に50個以上の足跡を発見した。足跡の規模は径10～15cm、深さ3～6cmを測り、埋土は灰褐色土である。足跡からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は難しいが、埋土がSD4や掘立3などと酷似することから、足跡②は概ね中世段階の遺構とする。

(4) その他の遺構と遺物

調査では、122基の柱穴と倒木址を検出した。

1) 柱穴

柱穴は、122基を検出した。このうち、57基は掘立柱建物柱穴である。掘立柱穴を除く柱穴65基は、埋土で分類すると三種類に分かれる。柱穴内からは、弥生土器や土師器、須恵器の破片が出土した。

埋土①：黒色土 ……13基

埋土②：黒褐色土 ……44基

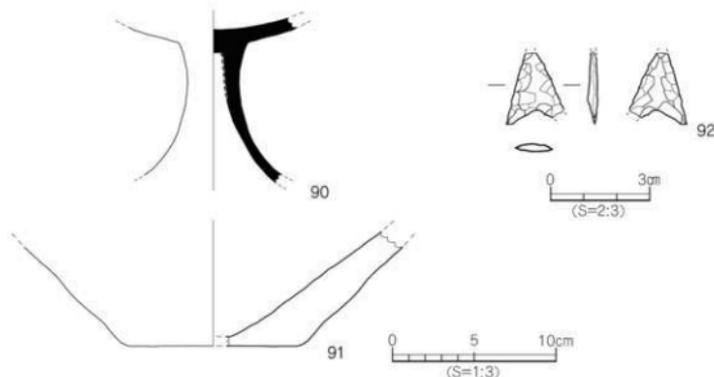
埋土③：黒色土 (黄色土がブロック状に混入) ……8基

2) 倒木址 (第6図)

調査では、2基の倒木址(倒木1・2)を検出した。埋土は、褐色(10YR4/4)を呈する粘性土である。

3) 包含層出土遺物(第25図、図版6)(90～92)

90は須恵器高坏、91は弥生時代後期の壺形土器の底部である。92は凹基無蓋式の打製石鏃で、石材はサヌカイトを使用している。



第25図 包含層出土遺物実測図

第4節 小 結

今回の調査では、弥生時代から中世までの遺構や遺物を検出した。弥生時代の遺構は未検出であるが、古墳時代後期から中世までの集落遺構や生産遺構を検出した。ここでは、遺跡の変遷についてまとめを行う。

古墳時代

古墳時代後期後半、6世紀後半に調査区北側には自然流路SR1が存在し、その両側には2棟の掘立柱建物(掘立1・2)が構築される。一方、調査区南側では堅穴住居(SB1)と土坑(SK1)が造られる。掘立1・2は2×2間、2×3間規模の比較的小規模な掘立柱構造の建物で、建物方位を北東-南西方向にとる。また、SB1は一辺6m前後の方形住居で、住居北側壁体にはカマドが付設されている。このほか、SK1は径3m程度の土坑で、土坑内からは焼土のほか基底面付近より鉄器や鉄片が出土しており、工房的な性格をもつ遺構の可能性が有る。

古 代

飛鳥時代前半、7世紀前半には調査区中央部から南側に5棟の掘立柱建物（掘立4・5・6・8・9）が構築される。2×2間、2×3間規模の建物で、古墳時代の建物2棟にくらべ、建物方位はやや真北方向に近づく。なお、切り合いより、これらの建物が構築された段階にはSB1やSK1は廃絶されている。なお、この間に調査区北側に流路SR1は引き続き存在している。

飛鳥時代中葉、7世紀中頃になると、前述した7棟の掘立柱建物は廃絶され、代わって調査区中央部から南側には東西方向や南北方向の溝7条（SD1・2・3・6・7・10・11）が掘削される。これらの溝は、検出状況から水田または畠耕作に伴う鋤溝や水路と考えられる。なお、調査区北側ではSR1の両側にて水田（足跡①）が営まれることになる。おそらく、その際にSR1は掘り直しが施されたものと推測される。その後、概ね7世紀後半まで水田と流路SR1は存続する。

中 世

確実な時期は不明であるが、中世段階になり調査区中央部付近に2棟の掘立柱建物（掘立3・7）が構築され、調査区北側には溝（SD4・8）や水田（足跡②）が営まれることになる。2棟の建物は1×2間の小規模な建物であり、建物方位をほぼ真北方向にとる。

今回の調査では、古墳時代後期から終末期において調査地一帯は堅穴住居や掘立柱建物が存在する居住域として土地利用されていたことが分かる。その後、飛鳥時代、7世紀中葉以降は水田や畠を営む生産域として利用されるが、数百年の断絶期の後、中世段階になり再び生産域として土地利用されることになる。

今回の調査では東住台地南方域における集落様相や変遷を、一部ではあるが解明することができた。今後、調査地周辺域における調査成果を整理し、各時代における詳細な集落解明が必要となろう。

遺構一覧・遺物観察表 — 凡例 —

(1) 以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺物観察表の各掲載について。

法量欄 (): 推定復元値

調整欄 土製品の各部位名称を略記した。

例) 口→口縁部、天→天井部、た→たちあがり、肩→肩部、坏→坏部、胴→胴部、
胴上→胴部上位、胴下→胴部下位、脚→脚部、底→底部。

胎土欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、密→精製土。

() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長 (1~3) →「1~3mm 大の石英・長石を含む」である。

焼成欄 焼成欄の略記について。◎→良好、○→良。

表3 竪穴住居一覧

竪穴 (SB)	時期	平面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	床面積 (㎡)	主柱穴 (本)	内部施設			周壁溝	備考
						高床	土坑	炉 カマド		
1	古墳後半後半	方形	6.15 × 5.90 × 0.08	36.28	4			○ ○	○	掘立5に切られる。

表4 掘立柱建物一覧

掘立柱	規模 (間)	方向	桁行		梁行		方位	床面積 (㎡)	時期	備考
			実長 (m)	柱間寸法 (m)	実長 (m)	柱間寸法 (m)				
1	2 × 2	南北	3.56	1.66-1.90	3.02	1.46-1.56	N-40°-W	10.75	6世紀後半以降	
2	3 × 2	東西	4.24	1.02-1.40-1.82	2.99	1.48-1.51	N-54°-E	12.67	6世紀後半以降	SD1に切られる。
3	1 × 2	南北	4.27	2.07-2.20	2.64	2.64	真北	11.27	中世	
4	2+ a × 2	東西	(3.00)	1.48-1.52	3.68	1.82-1.86	N-2°-E (10.41)		7世紀前半	SD3に切られる。
5	3 × 1	東西	6.42	2.06-2.12-2.24	4.60	4.60	N-4°-W	29.53	7世紀前半	SB1を切る。
6	1+ a × 3	南北	(2.89)	2.89	5.36	1.64-1.79-1.93	N-15°-W (15.49)		7世紀前半	SD11に切られる。
7	1 × 2	南北	4.04	1.98-2.06	2.40	2.40	N-2°-W	9.74	中世	
8	1+ a × 2	東西	(1.68)	(1.68)	3.44	1.72-1.72	N-8°-W (5.79)		7世紀前半	
9	2+ a × 2	東西	(4.61)	2.64-1.97	3.03	1.41-1.62	N-2°-W (13.96)		7世紀前半	SK1を切る。

表5 溝一覧

(1)

溝 (SD)	地区	方向	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
2	C5~D5	東西	皿状	4.20 × 0.50 × 0.21	黒褐色土	土師・埴恵	7世紀中葉	
3	A5~E5	東西	皿状	17.90 × 0.73 × 0.20	黒褐色土	土師・埴恵	7世紀中葉	掘立4を切る。
4	B5~D6	東西	皿状	(10.00) × 0.36 × 0.29	灰褐色土	土師・瓦器	13世紀	SD3を切る。
6	B6~D6	東西	皿状	11.00 × 0.38 × 0.14	黒褐色土	—	7世紀中葉	

溝一覧

(2)

溝 (S D)	地区	方向	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
7	B6	東西	皿状	4.19 × 0.54 × 0.08	黒褐色土	土師	7世紀中葉	
8	A6	南北	皿状	1.60 × 0.37 × 0.08	灰褐色土	土師・須恵	中世	
10	B7 ~ E7	東西	皿状	10.10 × 0.49 × 0.15	黒褐色土	—	7世紀中葉	SD11と重複。
11	D・E6 ~ D10	南北	皿状	16.00 × 0.72 × 0.25	黒褐色土	—	7世紀中葉	SD10と重複。 掘立6を切る。 SBIに切られる。
12	C11	東西	皿状	0.88 × 0.49 × 0.15	黒褐色土	—	6世紀後半以前	

表6 自然流路一覧

流路 (S R)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	方向	埋土	出土遺物	時期	備考
1	A2 ~ E4	逆台形状	20.80 × 2.90 × 0.90	北東 - 南西	灰黄褐色土	土師・須恵 ・鉄師車	7世紀後半	

表7 土坑一覧

土坑 (S K)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	B10・11	不整形円形	逆台形状	(3.56) × 3.14 × 0.18	黒褐色土	土師・須恵 ・鉄	6世紀後半	掘立身に切られる。

表8 柱穴一覧

(1)

柱穴 (S P)	地区	平面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	備考
1	D2	楕円形	0.22 × 0.13 × 0.08	黒褐色土		
2	C・D2	楕円形	0.32 × 0.25 × 0.12	黒色土		
3	C2	楕円形	0.35 × 0.23 × 0.20	黒褐色土		
4	B4	円形	0.65 × 0.60 × 0.40	黒褐色土	弥生・土師	
5	B4	円形	0.17 × 0.17 × 0.12	黒褐色土		
6	B4	楕円形	(0.32) × 0.30 × 0.14	黒褐色土		
7	D6	円形	0.34 × (0.25) × 0.14	黒色土 + 黄色土		
8	D6	楕円形	0.30 × 0.18 × 0.12	黒色土 + 黄色土		
9	E12	円形	0.53 × 0.54 × 0.35	黒色土	弥生・土師	
10	D12	楕円形	0.62 × 0.53 × 0.34	黒色土	土師・須恵	
11	C12	楕円形	0.96 × 0.70 × 0.31	黒色土		
12	C11	円形	0.55 × 0.55 × 0.23	黒色土		
13	C10	円形	0.27 × 0.27 × 0.23	黒色土		
14	C10	円形	0.70 × 0.70 × 0.20	黒色土		
15	C11	円形	0.98 × 0.98 × 0.45	黒色土 + 黄色土	土師・須恵	
16	C11	楕円形	0.83 × 0.54 × 0.38	黒色土 + 黄色土		
17	C11	円形	0.67 × 0.67 × 0.17	黒色土		
18	B・C11	円形	0.79 × (0.40) × 0.42	黒色土	土師・須恵	
19	C10	円形	0.50 × 0.50 × 0.41	黒色土		
20	C10	楕円形	0.68 × 0.45 × 0.18	黒色土		
21	C・D10	円形	0.53 × 0.53 × 0.28	黒色土	須恵	
22	C10	円形	0.26 × 0.24 × 0.19	黒褐色土		
23	C・D10	円形	0.44 × 0.41 × 0.22	黒褐色土		
24	C10	楕円形	0.44 × 0.34 × 0.06	黒褐色土		
25	C11	円形	0.60 × (0.50) × 0.03	黒褐色土		
26	E9	円形	0.68 × (0.40) × 0.10	黒褐色土		

来住町遺跡8次調査

柱穴一覧

(2)

柱穴 (SP)	地区	平面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	備考
27	C11	楕円形	0.30 × 0.15 × 0.43	黒褐色土	弥生・土師・須恵	
28	B10	円形	φ0.52 × φ0.12 × 0.12	黒色土 + 黄色土		
29	B10・11	楕円形	1.15 × (φ0.22) × 0.11	黒色土 + 黄色土		
30	B9・10	楕円形	(φ0.80) × (φ0.50) × 0.34	黒褐色土	石	
31	D11・12	楕円形	(φ0.40) × 0.32 × 0.11	黒褐色土		
32	B11	楕円形	φ0.18 × φ0.12 × 0.13	黒褐色土		
33	B11	楕円形	(φ0.50) × 0.34 × 0.11	黒褐色土		
34	B10	円形	0.47 × (φ0.40) × 0.17	黒褐色土	弥生	
35	B10	楕円形	0.46 × 0.34 × 0.14	黒褐色土		
36	C9・10	円形	0.70 × 0.66 × 0.29	黒色土 + 黄色土		
37	B9	楕円形	0.30 × 0.23 × 0.35	黒褐色土	土師	
38	D10	楕円形	0.65 × 0.25 × 0.08	黒褐色土		
39	D10	楕円形	0.30 × 0.20 × 0.20	黒褐色土		
40	C9	楕円形	0.47 × 0.39 × 0.08	黒褐色土		
41	C9	楕円形	0.26 × 0.10 × 0.10	黒褐色土		
42	C9	円形	0.10 × 0.10 × 0.16	黒褐色土	土師	
43	D9	楕円形	0.30 × 0.24 × 0.30	黒褐色土	土師	
44	C9	楕円形	0.13 × 0.10 × 0.08	黒褐色土		
45	B9	円形	0.18 × 0.18 × 0.07	黒褐色土		
46	B・C9	楕円形	0.23 × 0.20 × 0.15	黒褐色土		
47	B・C7	円形	0.68 × 0.66 × 0.50	黒色土 + 黄色土	弥生・土師・須恵	
48	E8	楕円形	0.60 × 0.58 × 0.09	黒褐色土		
49	E8	楕円形	0.53 × 0.40 × 0.11	黒褐色土		
50	D・E8	楕円形	0.29 × 0.20 × 0.20	黒褐色土		
51	B10	円形	(φ0.25) × (φ0.20) × 0.05	黒褐色土		
52	E7	円形	0.33 × 0.30 × 0.08	黒褐色土		
53	B8	円形	0.25 × 0.24 × 0.05	黒褐色土		
54	C8	楕円形	0.28 × 0.10 × 0.09	黒褐色土		
55	D7	楕円形	0.15 × 0.10 × 0.08	黒褐色土		
56	D7	楕円形	0.30 × φ0.22 × 0.13	黒褐色土		
57	C7	円形	0.25 × 0.24 × 0.08	黒褐色土		
58	C7	楕円形	0.40 × 0.30 × 0.12	黒褐色土		
59	C12	円形	0.30 × (φ0.13) × 0.54	黒色土	土師・須恵	
60	C10	楕円形	0.55 × 0.44 × 0.08	黒褐色土		
61	D11	円形	0.50 × (φ0.30) × 0.22	黒褐色土	須恵	
62	B9	円形	0.18 × 0.18 × 0.05	黒褐色土		
63	D10	円形	0.25 × 0.25 × 0.18	黒褐色土		
64	E9	楕円形	0.60 × 0.47 × 0.13	黒褐色土		
65	C8	円形	0.25 × 0.25 × 0.07	黒褐色土		

表9 S B 1出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	坏蓋	口径 (13.5) 器高 4.4	扁平な天井部。口縁部は尖り気味。 1/4の残存。	① 凹面→フラスコ口 ② 回転ナデ	① ナデ(タテキ) ② 回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		
2	坏蓋	口径 (13.8) 残高 3.7	口縁部は尖り気味。1/6の残存。	① 凹面→フラスコ口 ② 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		

出土遺物観察表

SB1 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
3	坏身 ① 口径 (11.9) ② 底部径 (14.7) ③ 残高 3.2	たちあがりは狭く内傾し、肩部は尖り気味。	① 回転ナデ ② 回転ナデ ③ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○			
4	坏身 ① 口径 (11.1) ② 底部径 (12.9) ③ 残高 3.8	たちあがり肩部は尖り気味に丸い。受部端に沈線状の凹みあり。	① 回転ナデ ② 回転ナデ ③ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○			
5	高坏 口径 (10.8) 残高 2.4	頸部は上下方へわずかに肥厚し、頸部面はナデ目。	回転ナデ	回転ナデ	灰黄色 灰黄色	密 (長 2)			
6	壺 口径 (14.1) 残高 3.6	口縁部は内傾し、口縁部外面に斜線文を施す。小片。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	密 ○			
7	壺 残高 4.9	沈線 2 条 + 列点文 2 段。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○			
8	瓶 口径 (8.2) 残高 5.0	口縁部は尖り気味。小片。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰黄色	密 (長 1)			
9	瓶 残高 4.0	把手部。舌状。	ナデ	ナデ	褐色 褐色	密 ○			

表 10 掘立 1・2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
10	坏蓋 口径 (13.0) 器高 3.7	扁平な天井部。口縁部は尖り気味に丸い。1/2 の残存。	① 回転ナデ ② 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長 (1~3)		掘立 1 SP ⑤	
11	坏蓋 残高 2.9	口縁部は尖り気味。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		掘立 2 SP ④	

表 11 SK1 出土遺物観察表 金属製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
12	鉄鎌	ほぼ全形	鉄	20.50	2.90	0.70	85.49	全面に錆ぶくれあり	6
13	鉄洋	一	鉄	6.95	5.50	4.55	123.25		6

表 12 掘立 4 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
14	坏身 ① 口径 (11.9) ② 底部径 (14.9) ③ 残高 2.6	たちあがりは内傾し、肩部は尖り気味。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		SP ⑦	
15	壺 残高 4.6	肩部小片。	平行叩き	円弧叩き	灰黄色 灰黄色	密 ○		SP ①	

表 13 SD1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
16	坏蓋 口径 (14.0) 器高 3.6	天井部と口縁部の境界には、凹線状の凹みあり。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰白色	密 ○			
17	坏身 ① 口径 (11.5) ② 底部径 (13.7) ③ 残高 2.6	たちあがりは短く内傾し、肩部は丸い。小片。	① 回転ナデ ② 回転ナデ ③ 回転ナデ	回転ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~2)			
18	コマド 残高 4.3	移動式コマドの口縁部片。	ナデ→ハケ	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1~3) ○			

表 14 SR1 下層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
19	坏蓋 口径 13.5 器高 4.3	丸味のある天井部。口縁部は尖り気味。復元完形品。	① 回転ナデ ② 回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長 (1) ○			5
20	坏蓋 口径 (14.1) 残高 4.4	口縁部は内湾し、口縁部は尖り気味に丸い。1/4 の残存。	① 回転ナデ ② 回転ナデ ③ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○			
21	坏蓋 口径 (16.9) 残高 3.4	口縁部は尖り気味に丸い。1/6 の残存。	① 回転ナデ ② 回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 青灰色	密 ○			
22	坏蓋 口径 (11.9) 残高 3.2	断面三角形の鋭い稜をもち、口縁部は内傾する凹面をなす。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○			

来住町遺跡8次調査

SR1下層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
23	坏身	全径径 0.02 (12.2) 器高 3.9	たちあがりは短く内傾し、端部は尖り気味。底部は平底風。1/3の残存。	㊦ 回転ナデ ㊧ 凹ヘラツクリガ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		
24	坏身	全径径 0.02 (12.6) 器高 3.2	たちあがりは短く内傾し、端部は尖る。底部は平底風。1/4の残存。	㊦ 回転ナデ ㊧ 凹ヘラツクリガ	回転ナデ	灰黄色 青灰色	密 ○		自然焼
25	坏身	全径径 0.09 3.4 器高 14.1	たちあがりは短く内傾し、端部は尖る。底部は平底風。1/3の残存。	㊦ 回転ナデ ㊧ 凹ヘラツクリガ	㊦ 回転ナデ ㊨ 同心円叩き	灰黄色 灰色	長(1~2) ○		
26	坏身	全径径 1.19 14.1 器高 3.8	たちあがりは短く内傾し、端部は尖る。底部外面に凹ヘラ切り痕を残す。復元完成品。	㊦ 回転ナデ ㊧ 凹ヘラツクリガ	回転ナデ	灰黄色 灰黄色	密 ○		5
27	坏身	全径径 1.20 14.1 器高 3.6	たちあがりは短く内傾し、端部は尖る。底部外面に凹ヘラ切り痕を残す。完成品。	㊦ 回転ナデ ㊧ 凹ヘラツクリガ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		5
28	坏身	全径径 0.25 (15.0) 残高 3.2	たちあがりは内傾し、端部は丸い。底部外面にヘラ記号あり。1/4の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰黄色 灰黄色	長(1~4) ○		
29	坏身	全径径 0.03 (12.5) 残高 3.2	たちあがり端部は内傾し、端部に沈線状の凹みがある。1/4の残存。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1~2) ○		
30	高坏	口径 (11.7) 残高 3.9	無蓋高坏の坏部。坏下位に2条の凸線がある。1/4の残存。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ○		
31	高坏	残高 4.8	長方形の透かし3ヶ所あり。小片。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 青灰色	密 ○		
32	高坏	口径 (10.0) 残高 5.3	脚端部は下方に肥厚。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		
33	高坏	口径 (8.5) 残高 5.2	有蓋高坏の脚部。長方形の透かし3ヶ所あり。1/2の残存。	㊦ 凹ヘラツクリガ ㊧ 凹ヘラツクリガ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石(1~3) ○		
34	甕	口径 (8.8) 残高 4.2	短頸甕。肩部に沈線2条あり。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰黄色 灰色	密 ○		
35	甕	残高 7.9	頸部に沈線1条、肩部にヘラ状工具による縦刻あり。1/4の残存。	㊦ 回転ナデ ㊧ 平行叩き	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		5
36	甕	残高 8.3	肩部に凹線2条あり。1/4の残存。未焼け土器。	㊦ 回転ナデ ㊧ 凹ヘラツクリガ	回転ナデ	赤褐色 赤褐色	密 ○		
37	提篋	残高 7.6	体部片。ボタン状の把手あり。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ○		
38	甕	口径 (21.0) 残高 4.7	口縁部は外反し、口縁端部は珠玉状に仕上げる。1/4の残存。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰黄色	密 ○		
39	甕	口径 (25.0) 残高 5.9	口縁部は外反し、口縁端部は珠玉状に仕上げる。1/8の残存。	㊦ 回転ナデ ㊧ 平行叩き	㊦ 回転ナデ ㊨ 円弧叩き	暗灰色 青灰色	密 ○		
40	甕	口径 (24.0) 残高 11.8	口縁部は外反し、口縁端部は下方に肥厚。肩部に凹線カキメと横線を施す。1/4の残存。	㊦ 回転ナデ ㊧ 平行叩き	㊦ 回転ナデ ㊨ 円弧叩き	青灰色 青灰色	長(1~5) ○		5
41	甕	口径 (19.6) 残高 6.9	口縁部下位に稜をもち、口縁端部はわずかに内傾する。1/3の残存。	㊦ ナデ ㊧ ハケ→ナデ	ナデ	褐色 褐色	石・長(1~4) ○		
42	甕	口径 (21.8) 残高 4.8	口縁端部は「コ」字状を呈し、口縁部内面に稜をもつ。小片。	マメツ	マメツ	赤褐色 赤褐色	石・長(1~4) ○		
43	甕	口径 (17.2) 残高 2.9	外反する口縁部。口縁端部は丸い。小片。	マメツ	マメツ	黒褐色 黒褐色	石・長(1~5) ○		
44	甕	口径 (23.8) 残高 2.6	外反する口縁部。口縁端部は丸い。小片。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長(1~2) ○		
45	甕	口径 (23.0) 残高 12.7	大きく外反する口縁部。口縁端部は尖り気味に丸い。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長(1~3) ○		
46	甕	口径 (16.0) 残高 5.6	体部は内湾し、口縁端部は丸い。小片。	ナデ	ナデ	褐色 褐色	密 ○		
47	甕	口径 (11.0) 器高 5.2	口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は尖る。3/4の残存。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長(1~4) ○		黒炭 5
48	高坏	残高 7.3	脚部内面に明瞭な稜あり。3/4の残存。	マメツ	ハケ	褐色 褐色	密 ○		
49	甕	口径 (25.0) 残高 12.1	直立する口縁部。口縁端部は尖り気味に丸い。1/3の残存。	㊦ ヨコナデ ㊧ ハケ→9cm (cm)	マメツ	褐色 褐色	石・長(1~5) ○		
50	甕	口径 (23.5) 残高 5.9	外傾する口縁部。口縁部内面に稜あり。小片。	ヨコナデ	㊦ 板ナデ ㊧ ハケ→ナデ	赤褐色 赤褐色	密 ○		

出土遺物観察表

S R 1 下層出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
51	カマド	残高 5.5	移動式カマドの底部。	ナデ	ナデ	褐色 灰黄色	石・長(1-3) ○		5
52	紡錘車	長さ 幅 厚さ 5.8 7.7 4.2	径1.6cmの大孔あり。ほぼ完形品。	ナデ	ナデ	灰黄色	石・長(1-2) ○		5
53	紡錘車	長さ 幅 厚さ 6.7 6.7 2.1	土製。中央部に径0.7cmの大孔を穿ち、表面裏面には15×の竹管文を施す。ほぼ完形品。	ナデ	ナデ	暗灰色 灰黄色	石・長(1-3) ○		5

表 15 S R 1 上層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
54	坏蓋	口径 器高 10.7 4.1	丸味のある天井部。口縁端部は尖り気味。2/3の残存。	① 回転ナデ ② 回転ナデ	① 回転ナデ	灰黄色 灰黄色	密		
55	坏蓋	口径 器高 10.4 3.7	丸味のある天井部。口縁端部は尖り気味。復元完形品。	① 回転ナデ ② 回転ナデ	① 回転ナデ ② 回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1-2) ○		6
56	坏身	口径 器高 (11.8) 13.7 3.5	たちあがりは短く内傾し、端部は尖る。復元完形品。赤焼け土器。	① 回転ナデ ② 回転ナデ	① 回転ナデ	赤褐色 赤褐色	密	自然熱	6
57	坏	口径 器高 9.1 4.1	直立する口縁部。口縁端部は丸い。底部外面に回転へう切り痕あり。ほぼ完形品。	① 回転ナデ ② 回転ナデ	① 回転ナデ ② 回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1-2) ○		6
58	坏	口径 器高 (8.4) 4.0	直立する口縁部。口縁端部は丸い。底部外面に回転へう切り痕あり。1/2の残存。	① 回転ナデ ② 回転ナデ	① 回転ナデ	青灰色 青灰色	密		
59	坏	口径 器高 (13.3) 7.8 4.4	口縁部は外反し、口縁部内面に残あり。底部下に内縁1条が露る。1/4の残存。	① 回転ナデ ② 回転ナデ	① 回転ナデ ② 回転ナデ	青灰色 青灰色	密	自然熱	
60	椀	口径 器高 1.32 5.6	口縁部は短く外反し、端部は丸い。底部は平底。1/3の残存。	マメツ	回転ナデ	灰黄色 灰黄色	密		
61	高坏	口径 器高 7.2 3.9	脚縁部は下方に肥厚。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密		
62	壺	口径 器高 (15.0) 4.2	外反する口縁部。口縁端部は上内方に肥厚。1/3の残存。	① 回転ナデ ② 平行叩き	① 回転ナデ ② 円弧叩き	灰色 灰色	密		
63	壺	口径 器高 (11.1) 5.7	脚付壺。脚上位に長方形の透かし、中に凸線が露る。脚縁部は内傾する面をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密		
64	壺	口径 器高 (17.6) 4.2	短く外反する口縁部。口縁部は長方形に肥厚し、口縁端部は上方につまみ上げる。	回転ナデ	回転ナデ	灰黄色 灰黄色	密		
65	壺	口径 器高 (19.9) 10.4	長く外反する口縁部。口縁端部は下方に垂下する。	回転ナデ	① 回転ナデ ② 円弧叩き	暗灰色 暗灰色	密	自然熱	
66	壺	口径 器高 (21.0) 3.1	外反口縁。口縁部内面は上方に肥厚。小片。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	石・長(1-4) ○		
67	壺	口径 器高 (22.0) 4.7	外反口縁。口縁部内面は上方に肥厚。小片。	マメツ	マメツ	灰黄色 灰黄色	石・長(1-3) ○		
68	壺	口径 器高 (22.0) 3.2	外反口縁。口縁端部は丸い。小片。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長(1-3) ○		
69	椀	口径 器高 (12.6) 4.3	体部は内湾し、口縁端部は丸い。小片。	マメツ	ナデ	褐色 褐色	密		
70	椀	口径 器高 (13.2) 4.5	体部は内湾し、口縁端部は丸い。3/4の残存。	マメツ	マメツ	赤褐色 赤褐色	石・長(1-4) ○		6
71	高坏	残高 9.5	脚部残片。2/3の残存。	マメツ	① マメツ ② ケズリ	褐色 褐色	石・長(1-3) ○		
72	高坏	残高 6.3	脚部残片は指込技法による。1/2の残存。	マメツ	マメツ	灰黄色 灰黄色	石・長(1-2) ○		
73	瓶	残高 8.7	把手部。舌状。	ナデ	ナデ	褐色 褐色	石・長(1-3) ○		

表 16 S R 1 上層出土遺物観察表 金属製品

番号	器種	残存	材質	法量			備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)		
74	鉄滓	—	鉄	2.95	4.30	1.80	25.12	6

表 17 S R 1 地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
75	杯身 全径13.0 全高15.3 底径3.7	13.0 15.3 3.7	たちあがりは内傾し、肩部は丸い、受部端に沈線状の凹みがある。完形品。	㊦回転ナデ ㊦回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1~5) ○		6
76	皿	口径(14.0) 残高 6.0	波状文5条(2段)+凸線1条+波状文9条。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色 灰褐色	密 ○		
77	高杯	底径 7.6 残高 3.7	脚部部はわずかに上下方に肥厚。底部完形品。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ○		
78	瓶	口径(24.0) 残高 14.9	口縁端部に沈線状の凹み、体部に沈線3条あり。1/3の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長(1~2) ○		6
79	壺	口径(15.0) 残高 5.7	内湾口縁。口縁端部は丸い、頸部内面に明瞭な稜あり。小片。	マメツ	㊦ハケ ㊦マメツ	暗褐色 褐色	石・長(1~5) ○		
80	碗	口径(9.5) 残高 3.6	体部は内湾し、口縁端部は尖る。小片。	ナデ→ハケ	ハケ→ナデ	黒色 褐色	密 ○		
81	杯	口径(14.2) 残高 3.8	体部は内湾し、口縁端部は尖る。体部内面に施文あり。小片。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長(1~3) ○		
82	杯	口径(11.8) 残高 4.4	体部は内湾し、口縁端部は丸い。体部内面に施文あり。小片。	マメツ	マメツ	赤褐色 赤褐色	石・長(1~2) ○		黒底
83	高杯	残高 7.9	脚柱部。中央。2/3の残存。	ナデ	㊦ナデ ㊦ケズリ→ナデ	赤褐色 赤褐色	密 ○		
84	高杯	底径(10.0) 残高 4.7	脚部完形品。	マメツ	ハケズリ→ハケ	灰黄色 赤褐色	石・長(1~3) ○		
85	瓶	残高 0.5	把手部。舌状。	ナデ	ナデ	褐色 褐色	石・長(1~3) ○		
86	紡錘車	長さ 4.0 幅 4.0 厚さ 1.9	径0.8cm大の孔あり。台形状。1/2の残存。	ナデ	ナデ	褐色	密 ○		6

表 18 S R 1 地点不明出土遺物観察表 金属製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
87	鉄滓	—	鉄	3.80	4.25	2.20	37.14		6

表 19 S D 4 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
88	杯	底径(3.8) 残高 2.0	円盤高台状の底部。平底。小片。	ナデ	ナデ	灰白色 灰褐色	密 ○		
89	碗	底径(4.5) 残高 1.1	瓦器碗。断面方形状の高台をもつ。1/4の残存。	ナデ	ナデ	黒色 黒色	密 ○		

表 20 包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
90	高杯	残高 11.2	脚部片。中空。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		
91	壺	底径(10.5) 残高 7.0	弥生土器。平底。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長(1~5) ○		

表 21 包含層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
92	石鏃	ほぼ完形	サヌカイト	2.20	1.70	0.30	0.81	円基無茎式	6

第3章 来住町遺跡12次調査

第1節 調査の経過（第26・27図）

（1）調査に至る経緯

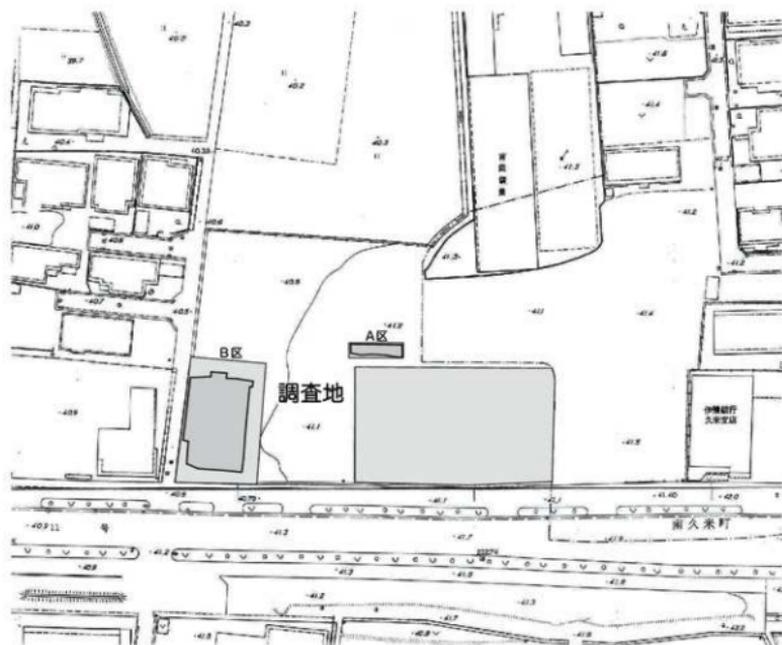
平成13年1月29日、松山ニューグランドホテルより立体駐車場建設と浄化槽設置に伴う埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。確認願いが提出された松山市来住町230番の一部、237番1、240番1は、松山市の指定する松山市文化財包蔵地「No. 127 来住廃寺跡」内にあり、周知の包蔵地として知られている。申請地周辺にはこれまでに数多くの調査が行われ、弥生時代～古代の集落関連遺構が確認され松山平野の主要な遺跡地帯として知られている。

文化教育課では、確認願いが申請された地点についての遺跡の有無と、さらにはその範囲や性格を確認するために、平成13年2月16日に試掘調査を行うこととなった。試掘調査の結果、申請地には遺構、遺物が検出され、弥生時代～古代の集落関連の遺跡があることを確認した。この結果を受け申請者と文化教育課、財団法人生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）の三者は発掘調査について協議を行い、建設予定地について本格調査を実施することとなった。調査は埋文センターが主体となり、弥生時代～古代の集落構造の解明と範囲確認を主目的とし、平成13年4月9日～平成13年5月25日の間に屋外調査を実施した。

（2）調査の経過

平成13年4月9日、調査区（A区浄化槽、B区立体駐車場）に災害防止用のフェンスと赤色防犯灯を設置する。4月10日、重機による表土剥ぎをA区から開始する。B区は掘削した排土を場外に搬出した。4月11日にA区遺構検出状況の撮影を行い遺構の掘り下げを行う。4月12日より遺構の測量を行う。4月16日にはA区の遺構完掘と測量が終了する。4月17日にA区の遺構完掘状況とB区の遺構検出状況の写真撮影を行いA区の埋戻しを行いA区の調査を終了する。4月17日よりB区の遺構掘削を開始し調査壁の測量を行う。北側と西側は部分的に調査壁と遺構が重複したため調査区の拡張を行った。5月18日に遺構の掘削を終了し高所作業車を使用して遺構完掘状況の写真撮影を行う。5月21日から遺構測量と埋戻しを行い、5月25日に調査区内の水抜き、災害防止フェンス、赤色防犯灯の撤去、発掘機材を搬出し、屋外調査を終了する。

なお、B区は国土座標に沿って4m四方のグリッドを設定し西から東にA・B・C・D、北から南に1・2・3・4・5と番号を付した。A区は仮ポイントを設定し、後から仮ポイントの座標測量を行った。



第 26 図 調査地位置図

■ は、申請地を表す。
(S=1:1,000)

Y=64160

Y=64150

Y=64140

Y=64130

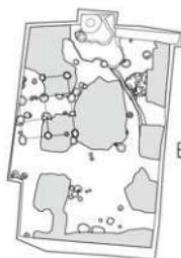
Y=64120

Y=64110



A 区

X=89580



B 区

■ は、石積代机

X=89570

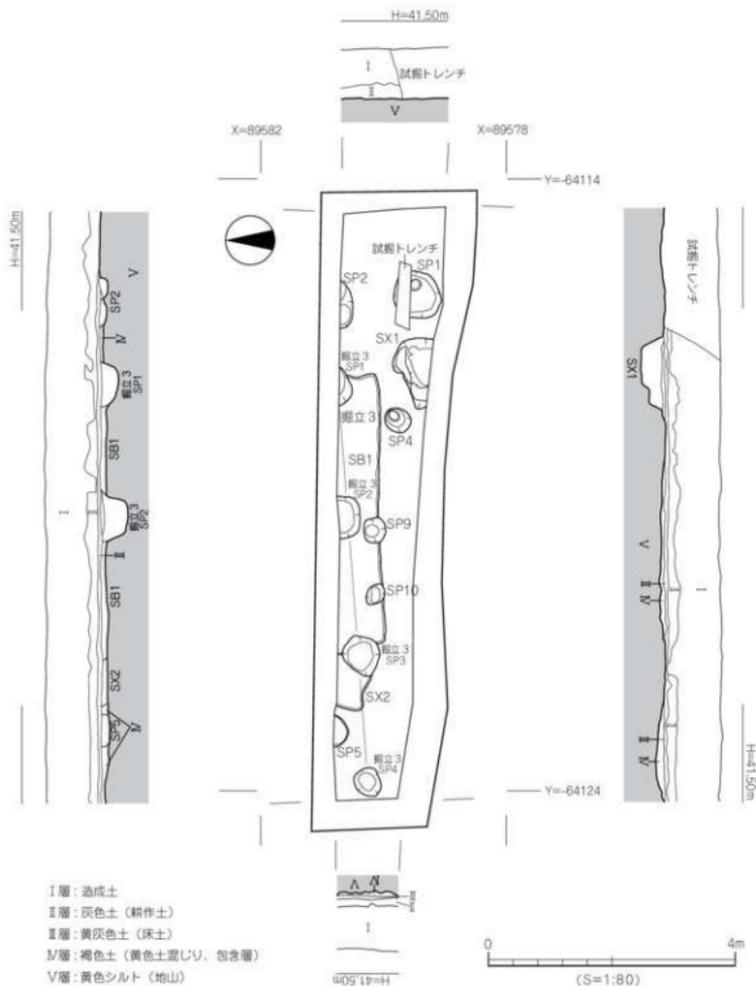
X=89560

第 27 図 A 区・B 区測量図



第2節 A区の調査 (第28図、図版7)

A区は浄化槽の設置個所の調査である。現状は駐車場として使用されておりアスファルトの切断を4.2m×12.6m範囲行った。調査区は幅2～2.5m、長さ10.4mを重機により掘削を行った。



第28図 A区遺構配置図・土層図

検出した遺構は竪穴建物 1 棟、掘立柱建物 1 棟、性格不明遺構 2 基、柱穴 6 基である。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、石器がある。

(1) 層位 (第 28 図)

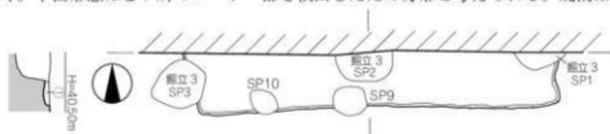
基本層位は I 層：造成土 (厚さ 70cm)、II 層：耕作土 (厚さ 12cm)、III 層：床土 (厚さ 4cm)、IV 層：褐色土に黄色土混じり (包含層厚さ 5cm)、V 層：黄色シルト (地山) である。V 層上面で遺構検出を行った。

(2) 遺構と遺物

1) 竪穴建物 (SB)

SB 1 (第 29・30 図、図版 7)

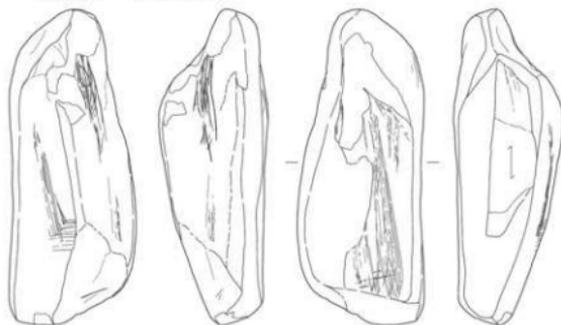
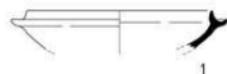
SB 1 は調査区中央に位置し、SX 2 を切り掘立 3 の柱穴 3 基と SP 9・10 に切れ、北側は調査区外に続く。平面形態は 2 ヶ所のコーナー部を検出したため方形と考えられる。規模は東西 4.



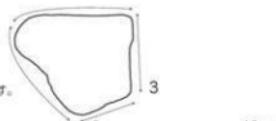
①層：黄色土ブロック (粥褐色土混じり)



第 29 図 SB 1 測量図



→ は、使用面を示す。



第 30 図 SB 1 出土遺物実測図

5.7m、南北検出長0.75m、壁高11cmを測る。内部施設は検出されていない。埋土は黄色土ブロックに暗褐色土混じりで住居の貼り床のように硬く締まっている。出土遺物は須恵器、土師器、石製品がある。

出土遺物 (1～3)

1は須恵器の坏身。たちあがりは直立し端部は尖り気味に丸い、受け部は短く外上方に伸び端部は丸い。2は土師器の甕。外傾する短い口縁部の端部は丸い。3は砥石。金属を研いだ細い鋭角な溝がみられ、よく使いこまれている。

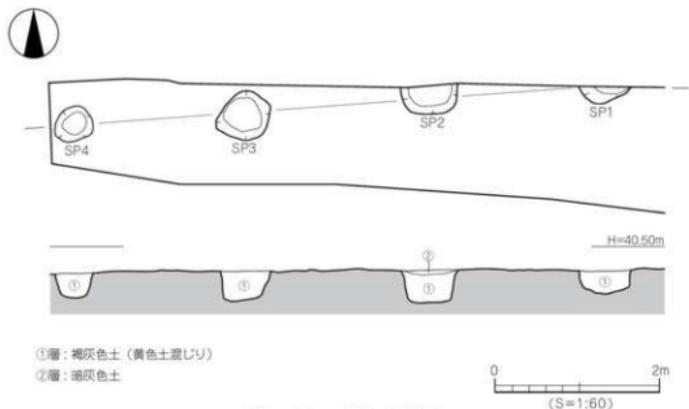
時期：出土遺物の須恵器からSB1の廃棄埋没時期は古墳時代後期末とする。

2) 掘立柱建物 (掘立)

掘立3 (第31図、図版7)

掘立3は調査区北部に位置しSB1とSX2を切り、柱穴2基の北側は調査区外に続く。規模は東西3間の柱穴4基を検出し検出長6.60mを測る。SP1はSB1と第IV層を切り、北側は調査区外に続く。平面形態は円形と思われる。規模は検出長6.3cm、深さ2.8cmを測る。断面形態は船底状で、埋土は褐色灰色土に黄色土混じりである。SP2はSB1を切り北側は調査区外に続く。平面形態は円形で、規模は検出長6.8cm、深さ4.0cmを測る。断面形態は逆台形状で、埋土は2層に分かれ褐色灰色土に黄色土混じりと暗灰色土である。SP3はSB1とSX2を切る。平面形態は楕円形で、規模は長径7.0cm、短径5.5cm、深さ3.6cmを測る。断面形態は逆台形状で、埋土は褐色灰色土に黄色土混じりである。SP4は第IV層を切る。平面形態は円形で、規模は4.5cm、深さ3.0cmを測る。断面形態は「U」字状で、埋土は褐色灰色土に黄色土混じりである。出土遺物は土師器、須恵器の小片がある。

時期：遺物が細片のため明確な時期は不明であるが、SB1を切ることから掘立3の廃棄埋没時期は古墳時代後期末以降とする。



第31図 掘立3測量図

3) 性格不明遺構 (SX)

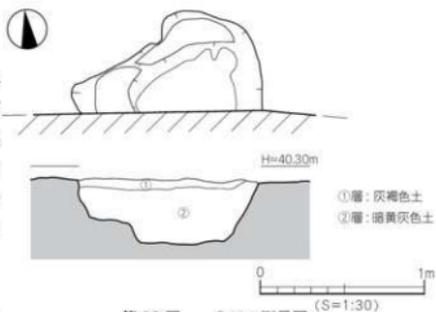
SX1 (第32・33図、図版7)

SX1は調査区東部に位置し南側は調査区外に続く。平面形態は不整形である。規模は東西1.18m、南北検出長0.62m、深さ36cmを測る。断面形態は2段掘りになり逆台形状である。埋土は①層灰褐色土、②層暗黄灰色土である。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器の小片がある。

出土遺物 (4・5)

4は須恵器の壺。肩部にナデによる沈線が巡る。5は土師器の甕。外傾する口縁部の口端部は丸い。

時期：出土遺物からSX1の埋没時期は古墳時代後期末以降とする。



第32図 SX1測量図

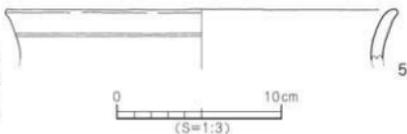


4

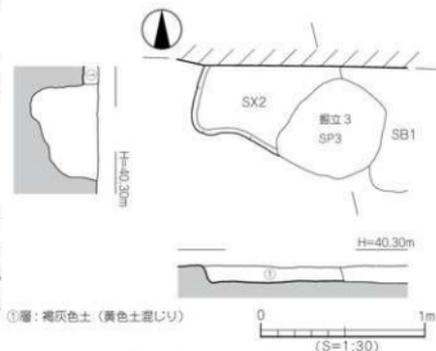
SX2 (第34図、図版7)

SX2は調査区西部に位置し、SB1と掘立3のSP3に切れ北側は調査区外に続く。平面形態は不整形である。規模は東西検出長0.9m、南北検出長0.54m、深さ5.0cmを測る。断面形態は皿状である。埋土は褐灰色土に黄色土が混じる。出土遺物はない。

時期：出土遺物がないため時期決定は難しいがSB1より先出することから古墳時代後期末以前とする。



第33図 SX1出土遺物実測図



第34図 SX2測量図

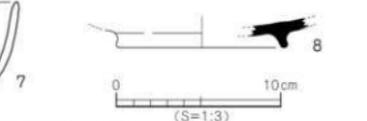
4) SP出土遺物・地点不明遺物 (第35図)

6はSP2出土の須恵器の坏蓋、口縁端部は尖り気味に丸い。7はSP4出土の土師器碗、直立気味の口縁部の端部は尖り気味である。8は地点不明出土遺物。須恵器高台付坏。高台部は「ハ」の字状に開き端部は丸い。



6: SP 2

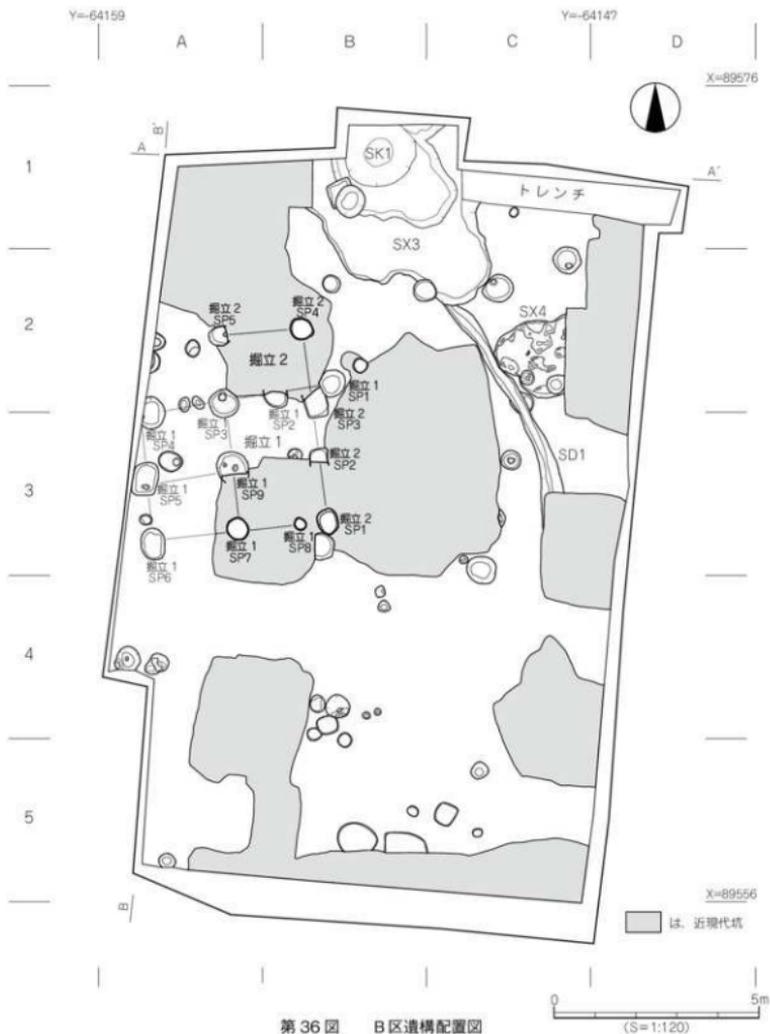
7: SP 4



第35図 A区SP・地点不明出土遺物実測図

第3節 B区の調査 (第36・37図)

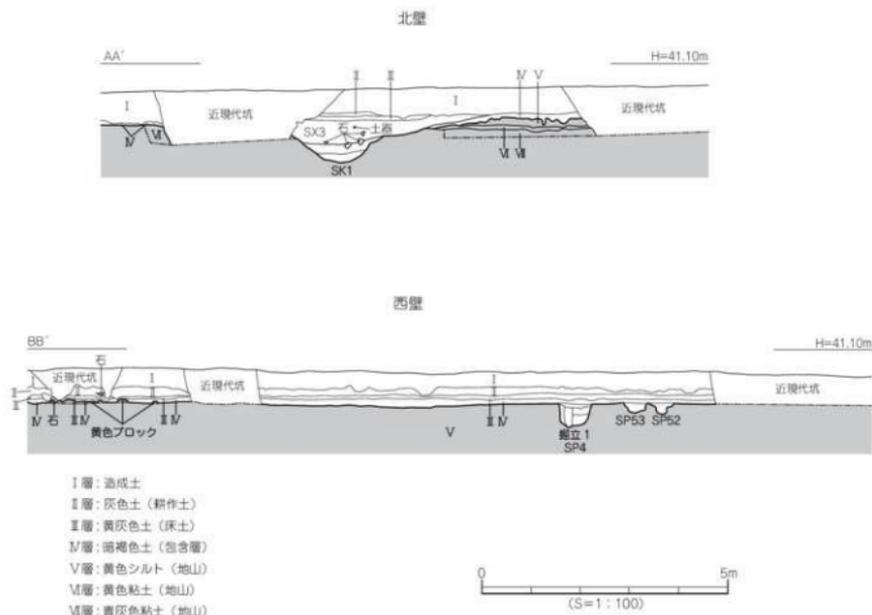
検出した遺構は、掘立柱建物2棟、土坑1基、溝1条、性格不明遺構2基、柱穴48基である。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、石器、鉄器がある。



第36図 B区遺構配置図

(1) 層位 (第 37 図)

基本層位は 7 層に分かれ、第 I 層：造成土、調査区全域で厚さ 30～60cm を測る。第 II 層：灰色土（耕作土）調査区の北壁と西壁で層厚 8～20cm を測る。第 III 層：黄灰色土（床土）調査区西壁で層厚 6～12cm を測る。第 IV 層：暗褐色土（包含層）調査区北壁と西壁で層厚 8～18cm を測る。第 V 層：黄色シルト（地山）北壁トレンチで層厚 16cm を測る。第 VI 層：黄色粘土（地山）北壁トレンチで層厚 10cm を測る。第 VII 層：青灰色粘土（地山）北壁トレンチで検出した。B 区は旧建物の建設、解体により大部分が近現代の掘削を受けており、堆積状況が確認できたのは西壁と北壁の一部だけである。遺構検出は第 V 層上面で行った。



第 37 図 B 区北壁・西壁土層図

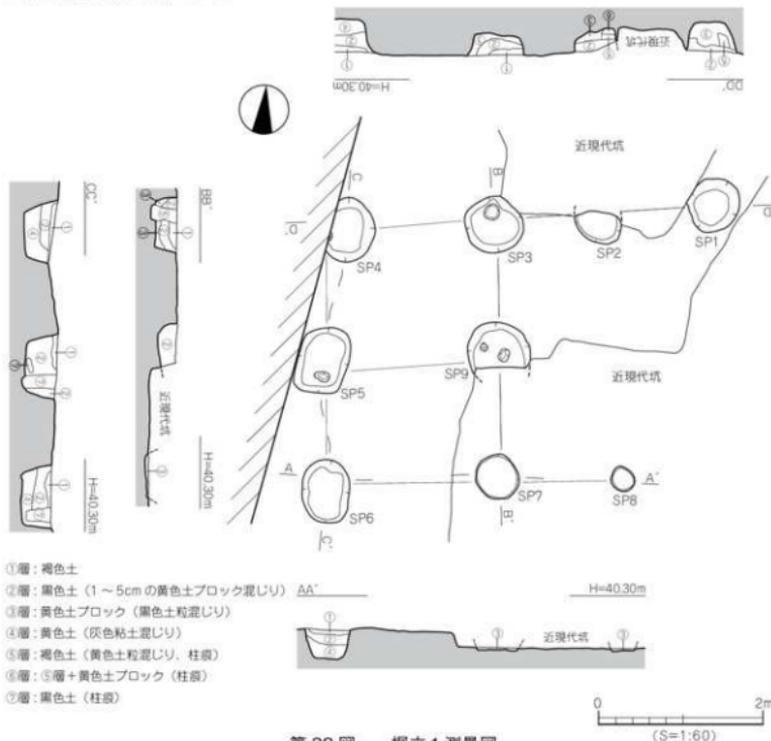
(2) 遺構と遺物

1) 掘立柱建物 (掘立)

掘立1 (第38図、図版8・9)

掘立1は調査区中央西のA3～B2区に位置し、掘立2を切り近現代坑に切られる。規模は南北2間、東西3間の柱穴9基を検出し、南北検出長3.00m、東西検出長4.80mを測る。柱穴の平面形態は円形と楕円形を呈する。規模は楕円形が短軸60cm、長軸80cm、深さ45cm、円形が径60cm～75cm、深さ25cm～35cmを測る。断面形態は「U」字状である。埋土は7層に分かれ①層：褐色土、②層：黒色土に黄色ブロック1～5cmが混じる。③層：黄色土ブロックに黒色土粒混じり。④層：黄色土に灰色粘土混じり。⑤層：褐色土に黄色土粒混じり。⑥層：⑤層に黄色土ブロック混じり。⑦層：黒色土である。出土遺物は弥生土器の小片がSP1に7点、SP2に8点、SP3に4点、SP4に1点、SP6に1点、SP7に1点、SP9に4点あるが実測可能な遺物はない。

時期：遺物が出土していないため明確な時期は不明であるが、埋土がA区掘立3と類似することから古墳時代後期末以降とする。



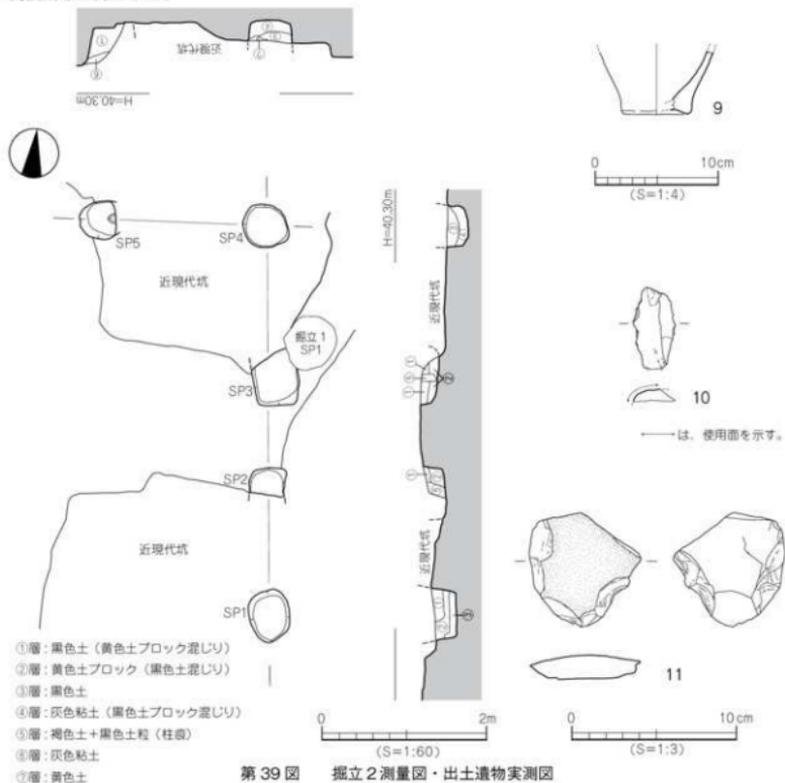
掘立 2 (第 39 図、図版 8・9)

掘立 2 は調査区中央西の A 2 ~ B 3 区に位置し、掘立 1 と近現代坑に切られる。規模は東西 1 間、南北 3 間の柱穴 5 基を検出し、東西検出長 1.85 m、南北検出長 4.80 m を測る。柱穴の平面形態は円形と隅丸方形を呈する。規模は径 50 ~ 60 cm、深さ 25 ~ 45 cm を測る。断面形態は「U」字状である。埋土は 7 層に分かれ①層：黒色土に黄色土ブロック混じり、②層：黄色土ブロックに黒色土混じり、③層：黒色土、④層：灰色粘土に黒色土ブロック混じり、⑤層：褐色土に黒色土粒混じり、⑥層：灰色粘土、⑦層：黄色土である。出土遺物は弥生土器の小片 6 点と石器がある。実測可能な遺物は弥生土器 1 点と石器 2 点である。9 の出土状況は近現代坑との境から出土しているため時期決定から除外する。

出土遺物 (9 ~ 11)

9 は弥生土器の甕、上げ底の底部片。10、11 は石器。10 は滑らかな面を持ち砥石と思われる。11 はサヌカイトの刃器。

時期：遺物が細片のため明確な時期は不明であるが、埋土が A 区掘立 3 と類似することから古墳時代後期末以降とする。



2) 土坑 (SK)

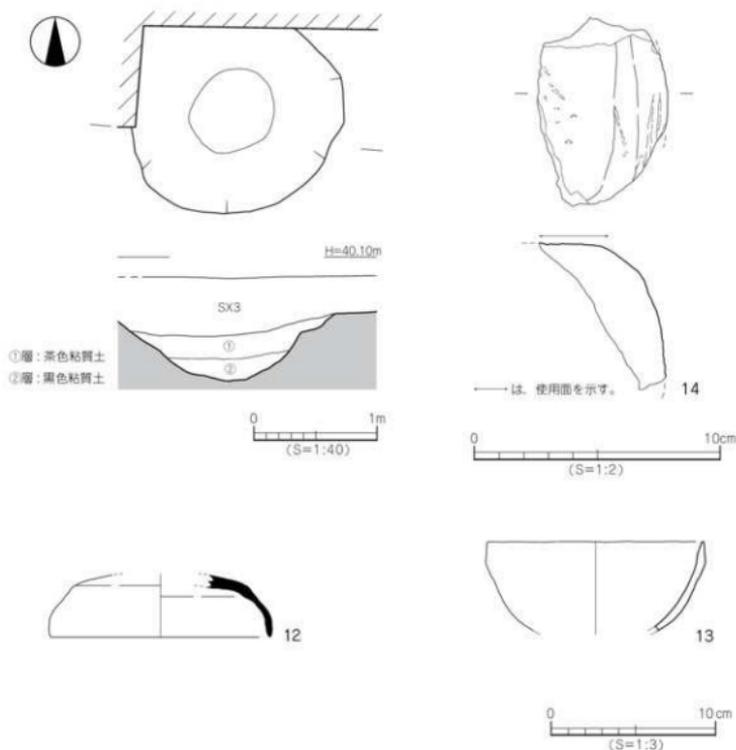
SK 1 (第40図、図版10)

SK 1は調査区北部のB 1区に位置し、SX 3が上面を覆い北側は調査区外に続く。平面形態は円形を呈し規模は径1.8m、深さ0.55mを測る。断面形態は漏斗状である。埋土は2層に分かれ①層：茶色粘質土、②層：黒色粘質土である。東側第①層から20～40cmの河原石が集中して出土した。出土遺物は須恵器、土師器、石器がある。

出土遺物 (12～14)

12は須恵器の坏蓋。直立気味に接地する口縁端部は尖り気味に丸い。13は土師器の坏。口縁端部は尖り気味である。14は砥石。1面の砥面があり使用痕が顕著である。

時期：出土遺物12、13の形態よりSK 1の埋没時期は古墳時代後期後半とする。



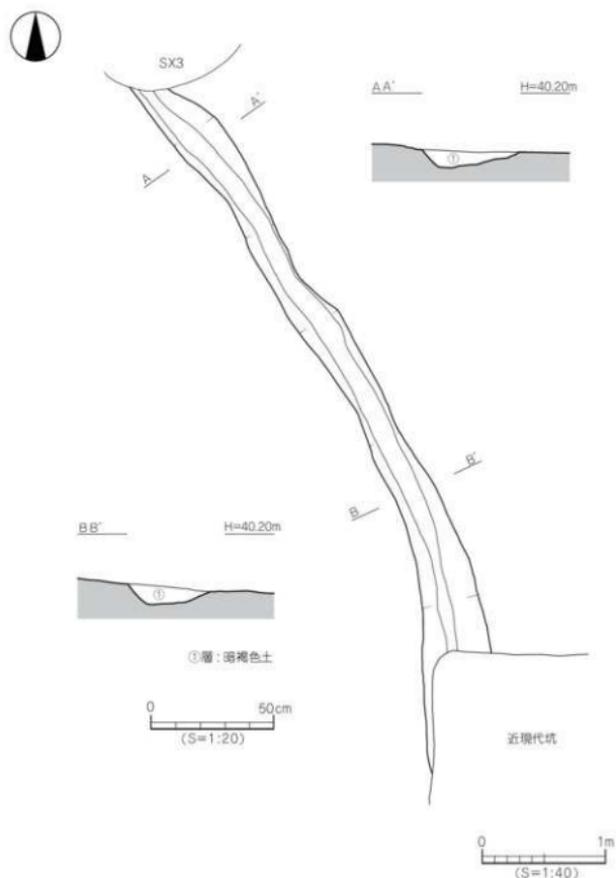
第40図 SK 1測量図・出土遺物実測図

3) 溝 (SD)

SD1 (第41図、図版8)

SD1は調査区北東部のC2・3区に位置し、SP41を切りSX3と近現代坑に切られる。規模は検出長6.3m、幅26~55cm、深さ14cmを測る。断面形態はレンズ状で、埋土は暗褐色土である。出土遺物は弥生土器の細片がある。

時期：弥生土器が出土しているが、遺物が細片のため明確な遺物から時期決定は困難であるが、SX3に切られるため古代以前とする。

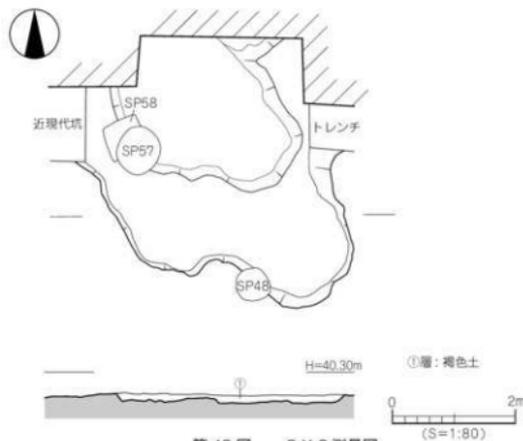


第41図 SD1測量図

4) 性格不明遺構 (SX)

SX3 (第42～44図、図版11・12)

SX3は調査区北部のB1～C2区に位置し、SD1を切りSP48・57・58、近現代坑に切られる。北側は調査区外に続く。平面形態は不整形である。規模は東西3.8m、南北検出長4.2m、深さ5～15cmを測る。断面形態は皿状で底面は凹凸がある。埋土は褐色土の単層である。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、鉄器、石器がある。

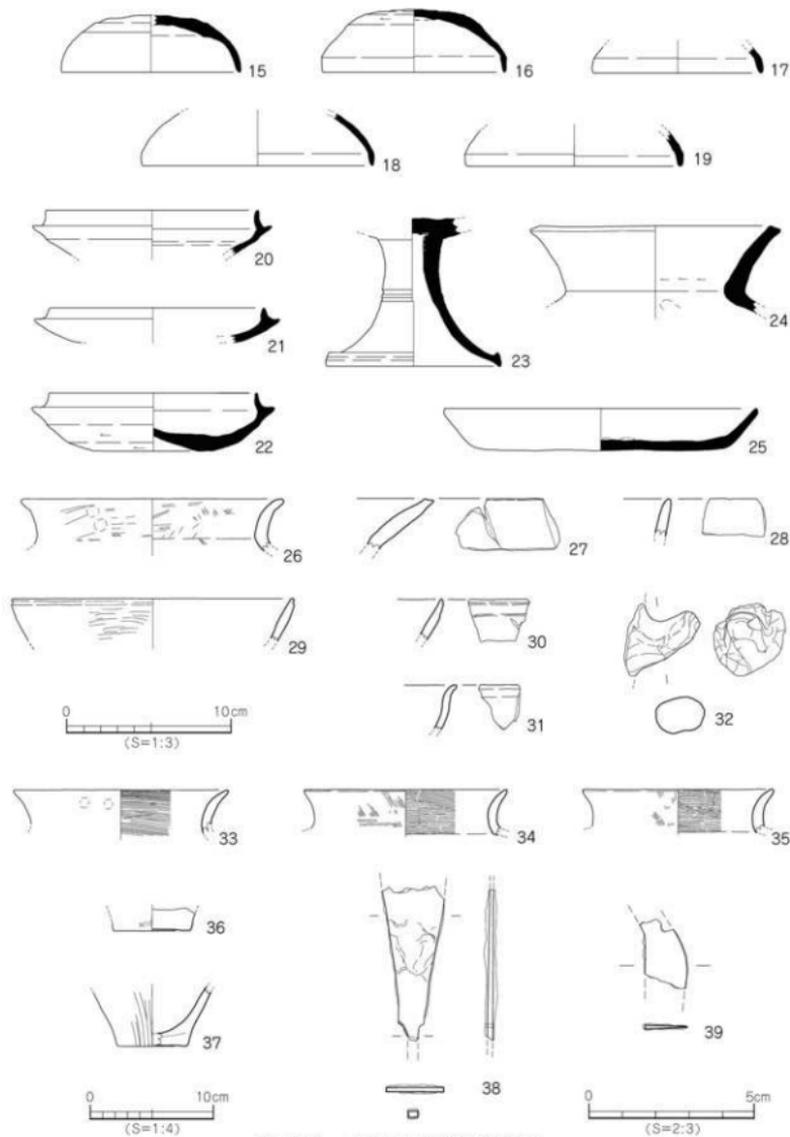


第42図 SX3測量図

出土遺物 (15～43)

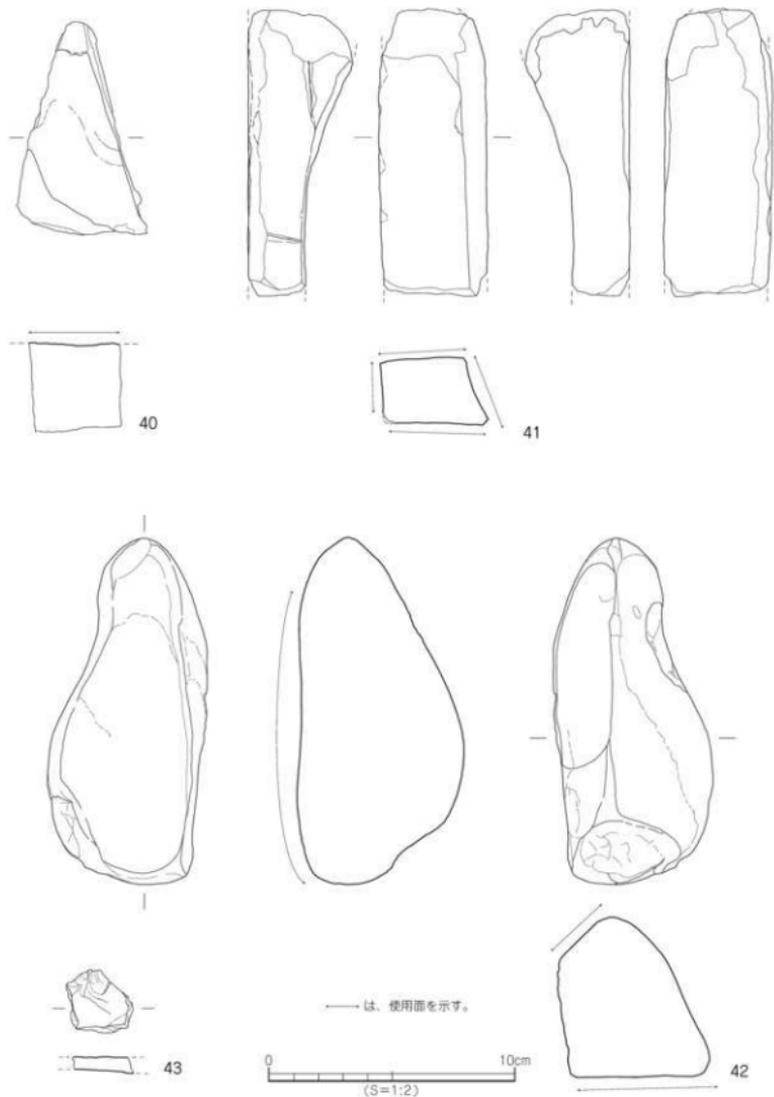
15～24は須恵器。15～19は坏蓋、15の口縁端部は丸みを持つ。16は直立気味に接地する口縁部の端部は先細りで丸い。17は口縁端部は丸い。18の口縁端部は尖り気味に丸い。19は口縁端部は丸みを持つ。20～22は坏身。20は水平に伸びる受部の端部は尖り気味で、立ち上がりの端部は丸い。21は短く水平に伸びる受部に直立する短い立ち上がりの端部は丸い。13は立ち上がりは直立気味で端部は先細りで丸い。23は高坏形土器の脚部。「ハ」の字状に開く脚部の端部は上下に肥厚される。柱部中央に2条の沈線が巡る。24は壺。外傾する口縁部の口端面はナデにより僅かに窪む。25は瓦質土器の皿。短く外傾する口縁部。26～32は土師器。26は外反する口縁部片。27、28は甕の口縁部片。27は口縁部端面がナデにより窪む。29は土師器の甕。口縁部外面にナデによる沈線がある。30、31は坏口縁部。30は外面に強いナデにより2本の沈線がある。31は口端部手で僅かに外反し端部は丸い。32は甕の把手。断面は楕円形である。33～37は弥生土器。33～35は口縁部片。外反する口縁部の端部は尖り気味である。36、37は甕底部。36は底部中央が僅かに窪む。37は平底の底部。38、39は鉄製品。38は平根鎌である。先端部と茎部を欠損している。関は短くななめ関である。関から先端部にかけて湾曲している。39は器種不明の鉄片である。僅かに湾曲している。40～43は石製品。40は砥石。1面の砥面が残る。41は砥石4面の砥面を持つ。よく使いこまれている。42は砥石。43はサヌカイト剥片。

時期：出土遺物の24、25の形態から8世紀の遺構とする。



第 43 図 S X 3 出土遺物実測図 (1)

遺構と遺物

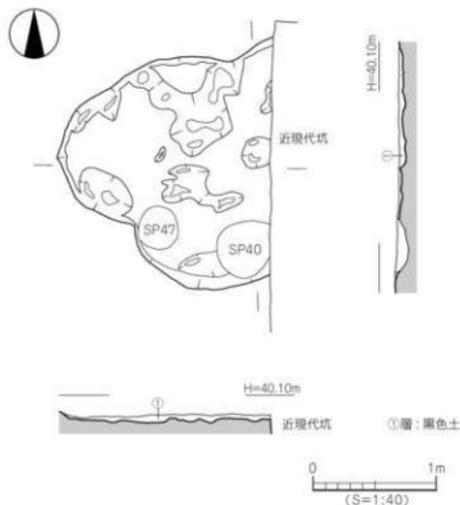


第 44 図 S X 3 出土遺物実測図 (2)

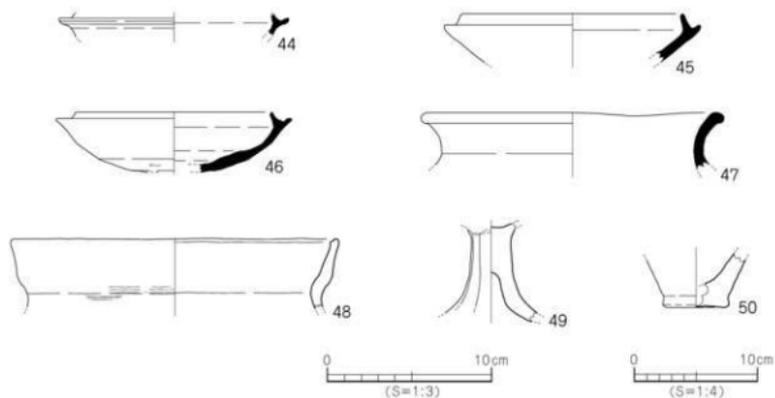
S X 4 (第 45 図)

S X 4 は調査区北東部の C 2 区に位置し SP 4 0、SP 4 7 と近現代坑に切られる。平面形態は不整形である。規模は東西検出長 1.7 m、南北 1.9 m、深さ 5 ~ 15 cm を測る。断面形態は皿状で底面には凹凸が顕著に見られる。埋土は黒色土の単層である。出土遺物は弥生土器の細片がある。

時期：出土遺物が細片であり時期決定は困難である。



第 45 図 S X 4 測量図



第 46 図 B 区地点不明出土遺物実測図 (1)

5) 地点不明出土遺物 (第46・47図、図版12)

44～52

44～46は須恵器の坏身。44のたちあがりは短く内傾し受部は短く外上方に伸びる。45のたちあがりは内傾し端部は丸い、受部は短く外上方に伸び端部は丸い。46のたちあがりは内傾し端部は尖り気味に丸い。受部は短く外上方に伸びる。47は須恵器の壺口縁部。短く外反する口縁部の口端部は肥厚される。焼け重あり。48は土師器の甕口縁部。屈曲して外傾する口縁部、口縁部端部は内傾する面を持つ。49は土師器の高坏の柱部。柱部外面は9面の面を持つ。50は弥生土器の甕、僅かに上げ底の底部。51は砥石4面の砥面を持つ。52は鋳造品の鋤先。



第47図 B区地点不明出土遺物実測図(2)

第4節 小 結

今回の調査では、古墳時代の竪穴建物1棟、掘立柱建物3棟、土坑1基、古代の性格不明遺構1基を検出した。

古墳時代

古墳時代後期後半～古墳時代後期末には、A区に竪穴建物(SB)が存在し、B区北側に土坑(SK)、古墳時代後期末以降にA区、B区北側に掘立柱建物が存在し、2×3間、1×3間の小規模の建物である。竪穴建物、掘立柱建物、土坑を検出したことにより調査区北側は古墳時代後期末には居住区として土地利用されていたことが判明した。

古代

B区北側に位置する性格不明遺構SX3からは、弥生時代から古代の遺物が出土した。その出土遺物には、砥石3点、剥片1点と鉄製品2点が出土しており、周辺には工房的な遺構が存在する可能性が考えられる。

今回の調査からは、来住台地南東域の集落の様相がわずかに解明できた。今後は来住台地上の調査成果を整理し集落の変遷を解明する必要がある。

遺構・遺物一覧 — 凡例 —

- (1) 以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
 (2) 遺物観察表の各掲載について

法量欄 (): 推定復元値

調整欄 土製品の各部名称を略記した。

例) □→□縁部、頸→頸部、胴→胴部、底→底部、天→天井部、坏→坏部、
 肩→肩部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウモン、赤→赤色土粒、黒→黒色土粒、密
 →精製土。

() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長 (1~4) →「1~4mm 大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良。

表 22 竪穴建物一覧

竪穴 (SB)	地区	平面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	内部施設	出土遺物	時期	備考
1	A区	方形	4.57m × (0.75m) × 0.11m	黄色土ブロック 暗褐色土混じり		土師器 石製品	古墳時代 後期末	掘立3、SP9・ 10に切られ SX2を切る。

表 23 掘立柱建物一覧

掘立	地区	方位	規模(間)	桁行長 (m)	梁行長 (m)	床面積 (㎡)	柱穴埋土	出土遺物	時期	備考
1	B区 A2~E3	東西	2×3	4.8	3.0	14.4	褐色土 黒色土に黄色土混 黄色土ブロックに 黒色土粒混 黄色土に3%赤土混	弥生土器	古墳時代 後期末以降	掘立2を切る。
2	B区 A2~E3	南北	1×3	4.8	1.85	8.88	黒色土に黄色土 ブロック混 黄色土ブロックに 黒色土混 黒色土 灰色粘土に黒色土 ブロック混 灰色粘土、黄色土	弥生土器 石器	古墳時代 後期末以降	掘立1に切られる。
3	A区	東西	3	6.6			脚灰色土に黄色土 混じり、暗灰色土	土師器 須恵器	古墳時代 後期末以降	SB1、SX2を 切る。

表 24 土坑一覧

土坑 (SK)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	B区 B1	円形	鐘鉢状	1.80 × (1.50) × 0.55	茶色粘質土 黒色粘質土	土師器 須恵器 石器	古墳時代 後後半	SX3が上面 を覆う。

表 25 溝一覧

溝 (SD)	地区	方向	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	B区 C2~3	北西~南	皿状	6.30 × 0.24 ~ 0.55 × 0.14	暗褐色土	弥生土器	古代以前	SP41を切り SX3に切られる。

出土遺物観察表

表 26 性格不明遺構一覧

性格不明遺構 (S X)	地区	平面形	断面形	規模		埋土	出土遺物	時期	備考
				長さ (長径) × 幅 (短径) × 深さ (m)					
1	A区	不整形	逆台形状	1.18 × (0.62) × 0.36		灰褐色土 暗黄灰色土	弥生土器 土師器 須恵器	古墳時代 後期末	
2	A区	不整形	皿状	(0.9) × (0.54) × 0.05		褐灰色土に 黄色土混じり		古墳時代 後期末以前	SB1と掘立3に切られる。
3	B区 B1～C2	不整形	皿状 底面凸凹	(4.2) × 3.8 × 0.05～0.15		褐色土	弥生、土師 須恵、瓦質 鉄器、石器	古代	SK1・SD1を切り、 SP48・57・58に切られる。
4	B区 C2	不整形	皿状 底面凸凹	1.9 × (1.7) × 0.05～0.15		黒色土	弥生土器	不明	SP40・47に切られる。

表 27 SB1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	坏身	口径 (11.3) 残高 2.4	たちあがりは直立し端部は尖り気味に丸い。受部は短く外上方に伸びる端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		
2	甕	残高 2.7	外傾する短い口縁部の端部は丸い。	マメツ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長 (1) 金 ○		

表 28 SB1 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
3	砥石	完形		19.4	7.5	6.4	110.18		12

表 29 SX1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
4	壺	残高 2.4	肩部にナデによる沈線が流る。	回転ナデ カキメ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		
5	甕	口径 (23.6) 残高 3.0	外傾する口縁部、口縁端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳橙色 乳橙色	密 ○		

表 30 SP 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
6	坏蓋	残高 3.1	口縁端部は尖り気味に丸い。	回転ナデ	回転ナデ	乳灰色 乳灰色	密 ○	SP2	
7	埴	口径 (13.2) 残高 4.7	直立気味の口縁部の端部は尖り気味である。	マメツ	マメツ (指面取)	橙色 淡黄色	石・長 (1) ○	SP4	

表 31 A区地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
8	高台付 坏	底径 (10.2) 残高 1.8	高台は「ハ」の字状に開き端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	淡褐色 淡褐色	密 ○		

表 32 掘立 2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
9	甕	口径 (5.0) 残高 5.2	上げ底の底部。	マメツ	マメツ	明赤褐色 にぶい褐色	石・長 (1~2) ○		

表 33 掘立 2 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
10	砥石			4.9	2.6	0.8	12.38	SP4	
11	刃器		サヌカイト	7.0	6.8	1.5	84.78	SP4	

表 34 SK 1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
12	坏蓋	口径 (13.4) 残高 3.8	直立気味に接地する口縁端部は尖り 気味に丸い。	㊦ 回転ヘラケズリ ㊧ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 暗青灰色	長 (1) ○		
13	坏	口径 (13.3) 残高 5.5	口縁端部は尖り気味である。	㊦ ヨコナデ マメツ	マメツ	浅黄褐色	密 ○		

表 35 SK 1 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
14	砥石			7.6	5.3	2.7	169.86		12

表 36 SX 3 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
15	坏蓋	口径 (10.8) 残高 3.5	口縁端部は丸みを持つ。	㊦ 回転ヘラケズリ ㊧ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石 (1) 密 ○		
16	坏蓋	口径 (11.2) 残高 3.9	口縁部は直立気味に接地し、口縁部 は先細りで丸い。	㊦ 回転ヘラケズリ ㊧ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長 (1) 密 ○		
17	坏蓋	口径 (10.2) 残高 1.6	口縁部の小片。口縁部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長 (1) 密 ○		
18	坏蓋	口径 (14.1) 残高 3.2	口縁部片。口縁端部は尖り気味に丸 い。	㊦ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	石・長 (1) ○		
19	坏蓋	口径 (13.0) 残高 1.9	口縁部の小片。口縁端部は丸みを持 つ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長 (1~2) ○		
20	坏身	口径 (12.8) 残高 2.7	水平に伸びる受部の端部は尖り気味 で、たちあがりは直立し端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	紫灰色 青灰色	石・長 (1) 密 ○ 自然釉		12
21	坏身	口径 (13.1) 残高 2.2	短く水平に伸びる受部に直立する短 いたちあがりの端部は丸い。	回転ナデ マメツ	回転ナデ	灰褐色・灰褐色 灰黄褐色	石・長 (1) 赤 ○		
22	坏身	口径 (12.6) 残高 3.6	たちあがりは直立気味で端部は先細り で丸い。受部は短く水平に伸び丸い。	㊦ 回転ナデ ㊧ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	乳灰色 灰色	密 ○ 自然釉・98±		
23	高坏	底径 (10.5) 残高 9.1	「ハ」の字状に開く脚部の端部は上下に 肥厚され、柱部中央に 2 条の沈線が走る。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長 (1) 密 ○		

出土遺物観察表

SX3 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
24	壺	口径 (140) 残高 5.4	外転する口縁部の口縁面はナデにより僅かに窪む。	回転ナデ	回転ナデ ナデ	灰黄色 灰黄色	密 ○		
25	皿	口径 (100) 底径 (148) 残高 2.6	短く外転する口縁部。口縁部は丸い。	ヨコナデ マメツ	ヨコナデ ナデ 指頭痕	灰白色 灰白色	石・長 (1~2) ○		
26	甕	口径 (159) 残高 3.2	外反する口縁部端部は丸い。	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	浅黄褐色 浅黄褐色	石・長 (1~2) 赤 ○		12
27	甕	残高 3.1	口縁部片。口縁部端部はナデにより窪む。	マメツ	マメツ	淡黄色 橙色	長 (1) ○		
28	甕	残高 2.3	口縁部の小片。端部は丸い。	マメツ	ヨコナデ	明赤褐色 橙色	石・長 (1) ○ 黒斑		
29	坏	口径 (17.1) 部高 2.6	口縁部外面にナデによる沈線あり。	◎ヨコナデ ハラムミガキ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	密 ○		
30	坏	残高 2.5	口縁部の小片。外面に強いナデによる2本の沈線あり。	ナデ→ミガキ	ヨコナデ	赤褐色 赤褐色	密 ○		
31	坏	残高 2.7	口縁部の小片。口縁部手前わずかに外反し端部は丸い。	ヨコナデ マメツ	マメツ	赤褐色 赤褐色	密 ○		
32	瓶	残高 4.5	把手。断面楕円形。	ナデ	ナデ	橙色 褐色	石・長 (1~3) 金 ○		
33	甕	口径 (174) 残高 3.7	外反する口縁部の端部は尖り気味である。	ナデ	ハケ※~9本/cm	褐灰色 褐灰色・灰褐色	石・長 (1) 金 ○		
34	甕	口径 (162) 残高 3.7	外反する口縁部の端部は尖り気味に丸い。	ハケ※~9本/cm ヨコナデ	ハケ※~9本/cm	にぶい橙色 灰黄色・褐灰色	石・長 (1~2) 金 ○		
35	甕	口径 (153) 残高 3.6	外反する口縁部の端部は丸い。	ハケ→ナデ	ハケ※~9本/cm	にぶい橙色 灰黄色・褐灰色	石・長 (1~2) 金 ○		
36	甕	底径 (62) 残高 1.8	平底の底部中央部が僅かに窪む。	ハケ→ナデ	欠損	にぶい橙色 浅黄褐色	石・長 (1~3) ○		
37	甕	底径 (56) 残高 4.8	平底の底部。	マメツ 一部ミガキ	ナデ	茶褐色 灰黄褐色	石・長 (1~3) ○		

表 37 SX3 出土遺物観察表 金属製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
38	鉄鏝 (平根鏝)	ほぼ完形 (先端欠)	鉄	(4.7)	(1.9)	0.35	6.32		12
39	鉄片 (不明)		鉄	(2.1)	(1.5)	0.2	1.50		

表 38 SX3 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
40	砥石			8.7	5.0	4.4	222.81		12
41	砥石	完形	石英粗面岩?	11.7	4.3	4.3	241.11		12
42	砥石	完形		14.2	6.15	6.7	664.81		
43	剥片		サヌカイト	2.6	2.5	0.75	6.56		

表 39 B 区地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
44	坏身	残高 1.4	小片。たちあがりは短く内傾する。受部は短く外上方に伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○ 自然釉		
45	坏身	口径 (13.4) 残高 3.0	たちあがりは内傾し端部は丸い。受部は短く外上方に伸び端部は丸い。	① 回転ナデ	回転ナデ	淡灰黄色 淡灰黄色	石・長 (1~2) ○		
46	坏身	口径 (11.9) 残高 1.7	たちあがりは内傾し端部は突り気味に丸い。受部は外上方に短く伸びる。	② 回転ナデ ③ 回転ハツケズリ	回転ナデ ナデ	灰色 灰色	長 (1) 密 ○		
47	密	口径 (17.6) 残高 3.5	短く外反する口縁部、口縁端部は肥厚される。焼け歪あり。	回転ナデ	回転ナデ	暗青灰色 暗青灰色	密 ○ 焼け歪		
48	甕	口径 (19.7) 残高 4.3	屈曲し外傾する口縁部、口縁端部は内傾する面を持つ。	ハケ マメフ	④ ココナデ マメフ	橙褐色 明褐色	石・長 (1~2) 金 ○		
49	高坏	残高 6.0	土脚、基部径 2.7cm。柱部外面は 9 面の面を持つ。	ケズリ→ナデ	ナデ	明赤褐色 にぶい橙色	石・長 (1) ○		12
50	甕	底径 (4.6) 残高 4.4	僅かに上げ底の底部。	マメフ ⑤ ナデ	マメフ	明赤褐色 褐色	石・長 (1~3) ○		

表 40 地点不明出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
51	砥石			8.0	4.0	3.9	151.00		

表 41 地点不明出土遺物観察表 金属製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
52	鋤先		鉄	(2.4)	(2.8)	1.0	9.29	鋳造品	12

第4章 久米窪田森元遺跡4次調査

第1節 調査の経過

(1) 調査に至る経緯(第48図)

平成元年9月、松山市久米窪田859-1外における店舗建設に先立って、当該地が松山市の周知の埋蔵文化財包蔵地「№129 鷹ノ子遺物包含地②」内に位置することから、埋蔵文化財確認願及び文化財保護法第57条の2第1項の届出書(以下、届出書)が松山市教育委員会(以下、市教委)に提出された。これを受け、市教委は資料と遺跡分布調査を実施し、結果、遺跡が展開することを推測するに至った。その後、この結果と届出書を受けた愛媛県教育委員会より発掘調査の指示が下りたため、申請者及び関係者と協議し、発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、市教委文化教育課及び松山市埋蔵文化財センターが主体となり、平成9年12月15日より着手した。

なお、申請地周辺では、久米窪田Ⅰ～Ⅴ遺跡、久米窪田森元遺跡、久米窪田森元遺跡2・3次調査、久米窪田古屋敷遺跡、久米窪田古屋敷C遺跡など縄文時代～中世までの集落関連遺構が確認されている。特に円面硯、墨書土器、瓦、人形代、木筒等の遺物は郡衙関連のものとして注目される重要な地域である。

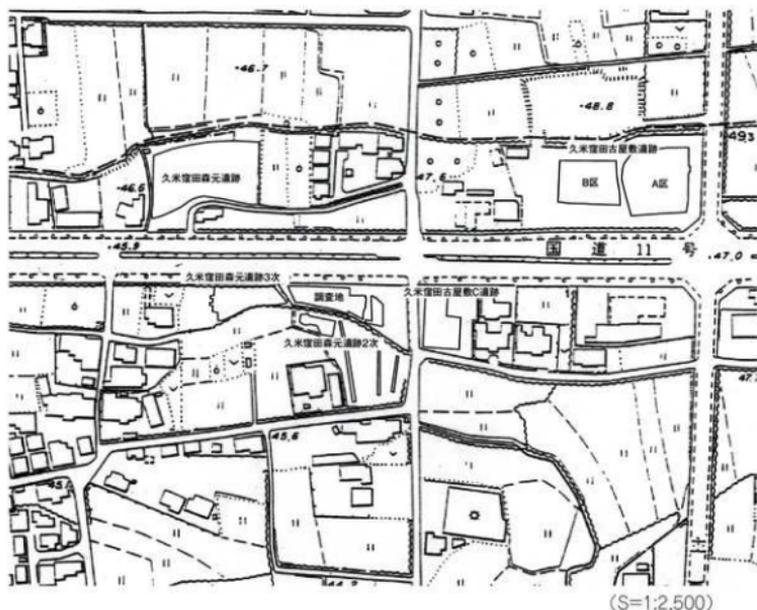


- 久米窪田森元遺跡4次調査
- ① 久米窪田Ⅰ遺跡
- ② 久米窪田Ⅱ遺跡
- ③ 久米窪田Ⅲ遺跡
- ④ 久米窪田Ⅳ遺跡
- ⑤ 久米窪田Ⅴ遺跡
- ⑥ 久米窪田古屋敷遺跡A区
- ⑦ 久米窪田古屋敷遺跡B区
- ⑧ 久米窪田古屋敷C遺跡
- ⑨ 久米窪田森元遺跡
- ⑩ 久米窪田森元遺跡2次調査
- ⑪ 久米窪田森元遺跡3次調査

第48図 周辺調査地位置図

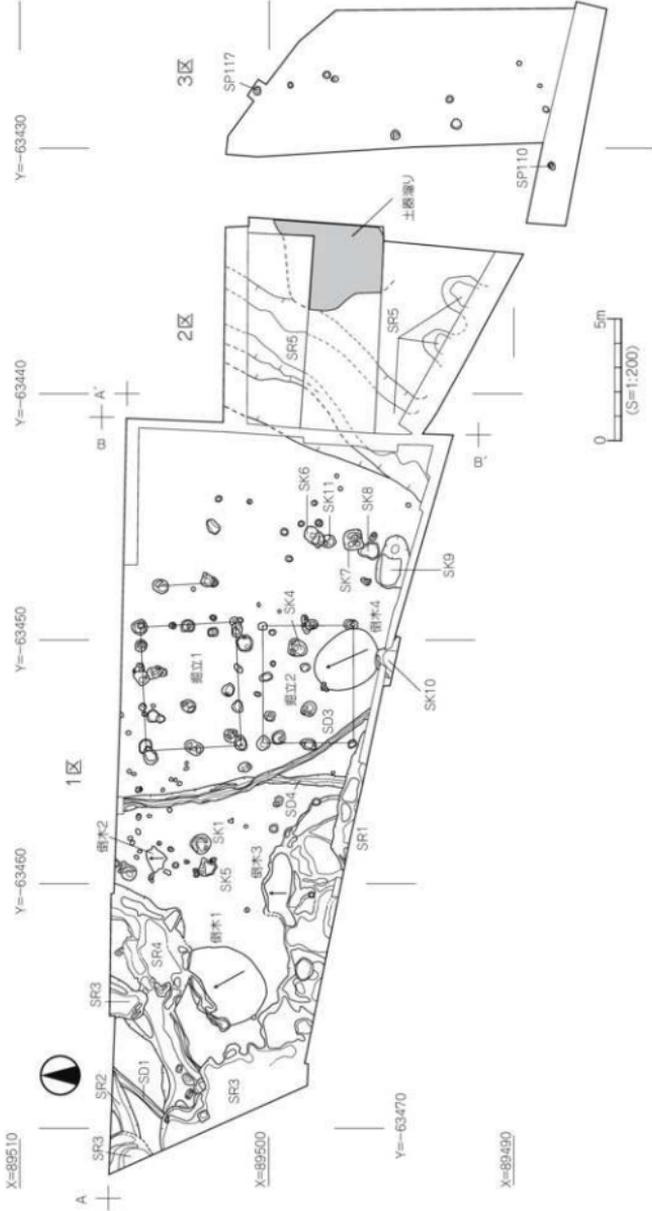
(2) 調査の経緯 (第49図)

調査地は約70cmの造成土で覆土されていたため、排土置き場の確保等から、まず調査対象地の西半部より調査を開始した。重機により遺構検出面までを掘削し、その後遺構検出作業を行い、掘立柱建物址、土坑、溝、柱穴を検出した。検出状況の写真撮影、順次遺構の掘り下げ、測量、完掘状況の写真撮影を行い、西半部の調査を終了する。平成10年3月3日より西半部を拡張する形で、既に調査が終了している西半部へ排土を移動し掘削を開始する。土器溜りと流路を検出し、順次掘り下げ、写真撮影、測量を行う。この拡張部分より西側を再度掘削し、柱穴11基を確認、掘り下げ、写真撮影、測量を行い、平成10年3月31日に屋外調査を終了する。



第49図 調査地位置図

調査の経過



第 50 図 遺構配置図

第2節 層位 (第51・52図)

調査地は、耕作土上に造成土を被覆した造成地であった。地表面は標高47m前後を測る。基本層位は土色の違いにより5層に分層し、各層は土色・土質の違いにより細分した。

I層：造成土である。調査区全域で層厚60～80cmを測る。

II層：灰色を基本とした農耕に伴う客土で、僅かな色の違いにより3層に分層した。

II①層：灰色土（耕作土）。調査区全域で層厚10～25cmを測る。

II②層：灰白色土（耕作土）。ほぼ調査区全域で確認されるが調査地中央の一部では欠除する。層厚5～10cmを測る。

II③層：灰橙色土（耕作土）。床土で調査区全域にて確認される。層厚5～10cmを測る。

III層：明灰褐色土（やや細砂質）。調査地中央部より南西方向へ堆積し、層厚5～20cmを測る。本層中からは、須恵器片、土師器片の小片が少量出土している。

IV層：褐色土を基本とした包含層で僅かな土色の違いにより4層に分層した。

IV①層：明褐色土（やや粘性）。調査地1区北西隅及び1区中央北側の一部で欠除するが、ほぼ全域に堆積する。層厚6～40cmを測る。本層中からは、須恵器片、土師器片、陶磁器片等が少量出土した。また、本層中では2区に於いて土器溜りを検出した。

IV②層：茶褐色粘性土（やや灰色おびる）。1区中央部から2区南西部に堆積する。層厚6～20cmを測る。本層中からは、須恵器片、土師器片、布目瓦片等の破片が出土した。

IV③層：暗灰褐色土（やや粘性）。1区中央から3区に堆積する。層厚6～20cmを測る。2区SR5の部分の堆積が厚い。本層中からは、須恵器片、土師器片陶磁器片等が少量出土した。

IV④層：IV③層＋白色シルト。1区と2区の境界B-B'の土層壁にてみられ、この部分のみ堆積する。遺物の出土はない。

V層：地山である。土色、土質の違いにより11層に分層した。なお、V層上面が最終遺構検出面である。

V①層：明黄白色シルト

V②層：白色シルト（やや粘性）

V③層：乳白色シルト

V④層：明灰色砂（細砂よりやや大きい）

V⑤層：白色粘性土（オレンジかかる）

V⑥層：明灰色シルト（やや粘性）

V⑦層：白色砂礫（シルト質で小角礫）

V⑧層：橙色砂礫（円礫で10～20cm大）

V⑨層：灰白色シルト

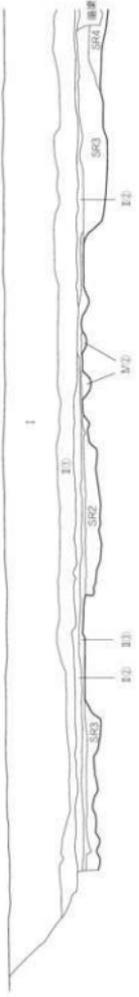
V⑩層：明青灰色砂礫（粗砂、小角礫）

V⑪層：灰色砂礫（細砂、円礫で10～20cm大）

検出状況や出土遺物からIV層は中世、III層は中世以降に堆積したものと考えられる。

遺構は掘立柱建物址2棟、土坑9基、溝3条、自然流路5条、柱穴72基、土器溜り1基を検出した。遺物は遺構や包含層掘削時に出土したもので、弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器、瓦、土製品、石製品、有機質遺物（木製品片、柱材、自然木、種子）などがある。

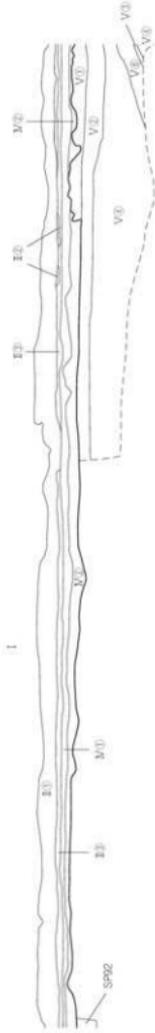
H=47.20m



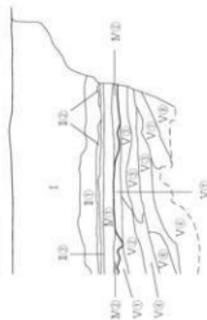
H=47.20m



H=47.20m



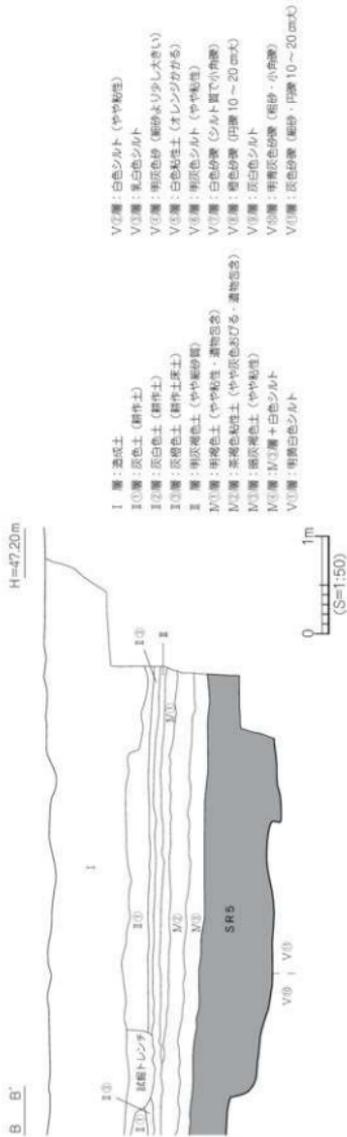
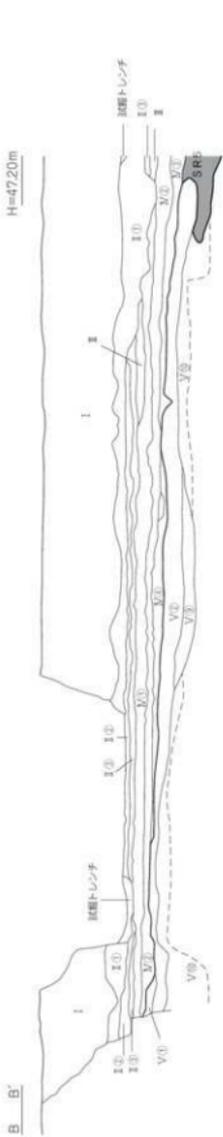
H=47.20m



- | | | |
|--|---|---|
| <p>I 層：油成土
 I1層：灰色土（耕作土）
 I2層：灰白色土（耕作土）
 I3層：灰白色土（耕作土）
 II 層：明褐色土（竹や藁腐葉）
 M2層：明褐色土（竹や藁生・遺物包含）
 M3層：茶褐色粘土（竹や灰色腐びる・遺物包含）</p> | <p>M3層：明褐色土（竹や藁生）
 M2層：M3層 + 白色シルト
 V1層：明褐色シルト
 V2層：白色シルト（竹や藁腐葉）
 V3層：乳白色シルト
 V4層：明褐色土（腐びより少し大きい）
 V5層：明褐色土（オレシクシ付）</p> | <p>V1層：明褐色シルト（竹や藁生）
 V2層：白色砂礫（シルト質で小角礫）
 V3層：褐色砂礫（厚層 10～20 cm）
 V4層：灰白色シルト
 V5層：明褐色砂礫（腐び・小角礫）
 V6層：灰色砂礫（厚砂・厚層 10～20 cm）</p> |
|--|---|---|



第 51 図 1 区北壁土層図



- I 層：赤城土
- I ①層：灰色土 (耕作土)
- I ②層：灰白色土 (耕作土)
- I ③層：灰褐色土 (耕作土)
- I ④層：明灰褐色土 (耕作土)
- II 層：明灰褐色土 (中砂質性)
- III 層：明灰褐色土 (中砂質性・遺物包含)
- IV ①層：茶褐色粘性土 (中砂質性)
- IV ②層：茶褐色粘性土 (中砂質性)
- IV ③層：IV ②層 + 白色シルト
- V ①層：明灰白色シルト
- V ②層：白色シルト (中砂質性)
- V ③層：乳白色シルト
- V ④層：明灰白色シルト (中砂質性)
- V ⑤層：明灰白色シルト (中砂質性)
- V ⑥層：明灰白色シルト (中砂質性)
- V ⑦層：明灰白色シルト (中砂質性)
- V ⑧層：明灰白色シルト (中砂質性)
- V ⑨層：明灰白色シルト (中砂質性)
- V ⑩層：明灰白色シルト (中砂質性)

第 52 図 1 区東端土層図

第3節 遺構と遺物

(1) 弥生時代

検出した遺構は、自然流路1条である。

自然流路 (SR)

SR5 (第53・54図、図版17・21)

SR5は調査地1区東端から2区、3区南端中央部に位置し、南側は調査区外に続く。西側河岸は確認できたが、東側河岸は未確認である。検出長南北9.8m、東西19m、最深部は0.95mを測る。埋土は16層に細分できる。埋土の堆積状況から、流路西側は滞筋、この部分より2区及び3区南端部分はト口場であった流れと考えられる。出土遺物は弥生土器、木製遺物がある。弥生土器は⑬、⑮層から、木製遺物は⑦層からの出土が目立つ。

出土遺物 (1～12)

1～8は弥生土器である。1～6は甕形土器で、1～3は口縁部片。ともに「く」の字状を呈するが1は逆「L」字状に近い。2は頸部に刻目突帯が巡る。口縁端部は面を持つ。3の口縁端部は下方へ拡張され2条の凹線文、頸部には刻目文が巡る。4～6は底部片。4・6はくびれを持つ上げ底で、4の外側面はミガキ調整される。5はくびれを持たないやや上げ底である。7は甕形土器で胴部から肩部にかけて直線的に整形されている。ほぼ完形。8は高坏形土器の底部片で柱部には5条の沈線が巡る。9～12は木製遺物である。9は焼焦けてはいるがほぼ完形に近く楔形を呈し建築部材と考えられる。10は破片ではあるが、1面は凹ませていて、もう片面は凹ませのラインと平行に削り出している。匙形製品の破片と考える。11・12は芯持ち材で作られた杭で、11の先端は削られ尖る。12の先端は2方向から削り尖らせてはいるが扁平である。その他、薪が5点出土している。

時期：出土した弥生土器の形態より、SR5の埋没時期は弥生時代中期の後葉とする。

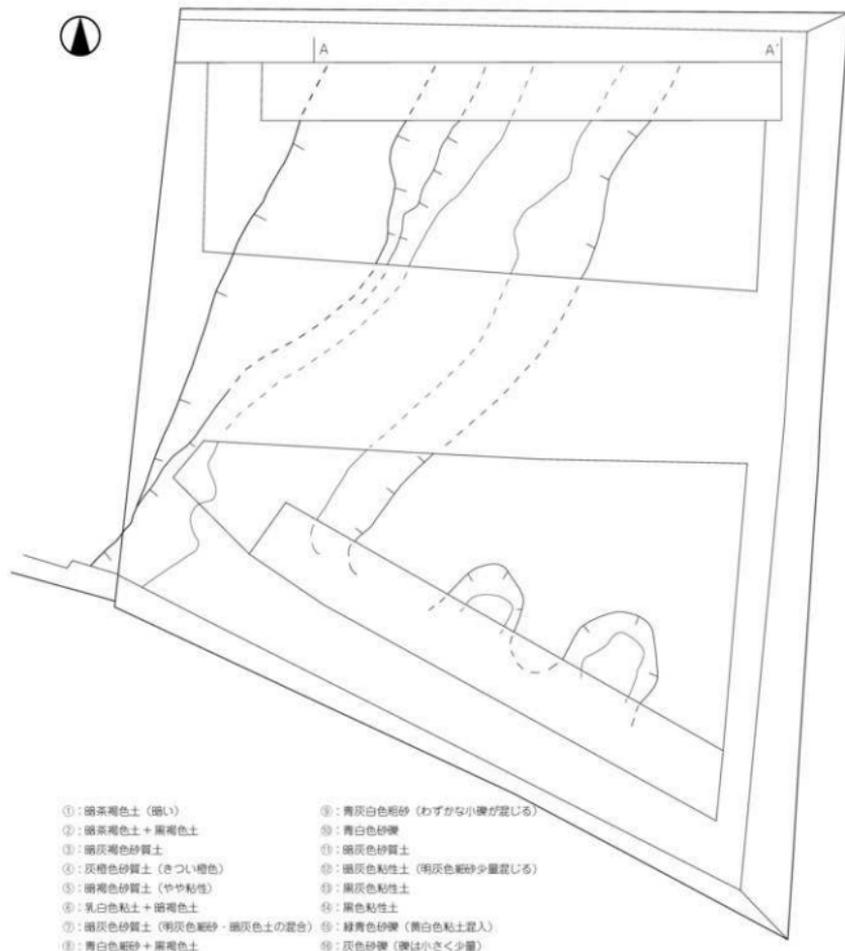
(2) 古代

検出した遺構は掘立柱建物2棟、土坑9基、溝3条、自然流路4条である。時期は出土遺物や埋土から古代(10世紀後半代)とする。

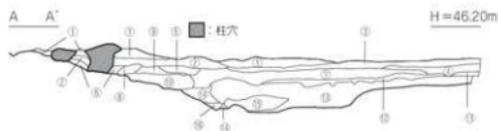
1) 掘立柱建物(掘立)

掘立1 (第55図、図版17)

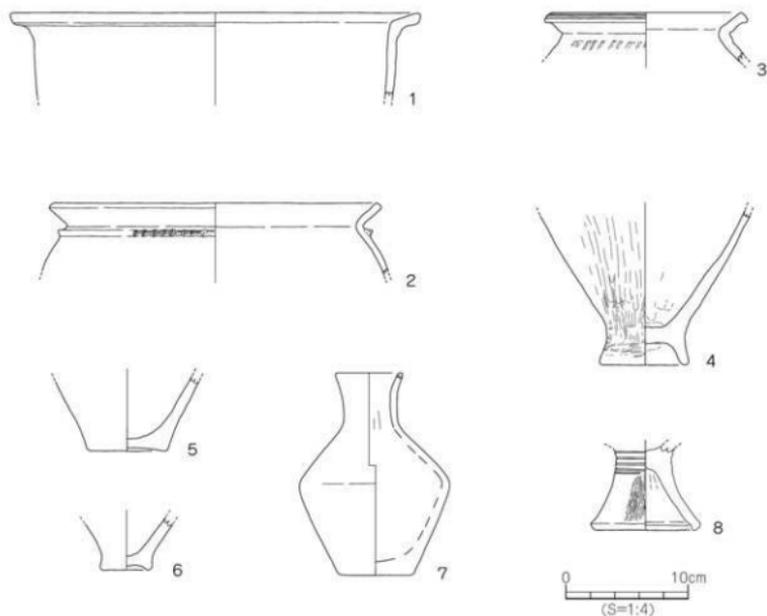
掘立1は整理作業により復元できた建物址である。調査地1区中央に位置する。建物を構成する柱穴数基に切り合いがあり、建替え、改築があったと思われる。3間×2間の東西棟で、建物規模は軒先柱の柱穴も含めて、東西長6.55m、南北長4mを測る。建物を構成する柱穴の平面形態は円～楕円形で規模は径30～64cm、深さ25～50cmを測る。柱穴埋土は、茶褐色粘性土の単一層のもの、茶褐色粘性土と地山層である白色シルトの混合、黒色土と白色シルトの混合、この3種類の混合土のものがある。遺物は、須恵器片、土師器片の他、木製遺物の木の削り滓(チップ状)が8点、P108より残存径20cmを測る柱根、種子の桃核がP55より13点、P56より49点、P70より4点出土した。



- | | |
|-------------------------|----------------------|
| ①：暗茶褐色土（硬い） | ⑭：青灰白色細砂（わずかな小礫が混じる） |
| ②：暗茶褐色土 + 黒褐色土 | ⑮：青白色砂礫 |
| ③：暗灰褐色砂質土 | ⑯：暗灰色砂質土 |
| ④：灰褐色砂質土（きつい褐色） | ⑰：暗灰色粘性土（明灰色細砂少量混じる） |
| ⑤：暗褐色砂質土（やや粘性） | ⑱：黒灰色粘性土 |
| ⑥：乳白色粘土 + 暗褐色土 | ⑲：黒色粘性土 |
| ⑦：暗灰色砂質土（明灰色細砂・暗灰色土の混色） | ⑳：緑青色砂礫（黄白色粘土混入） |
| ⑧：青白色細砂 + 黒褐色土 | ㉑：灰色砂礫（礫は小さく少量） |



第53図 SR5測量図



第54図 SR5出土遺物実測図

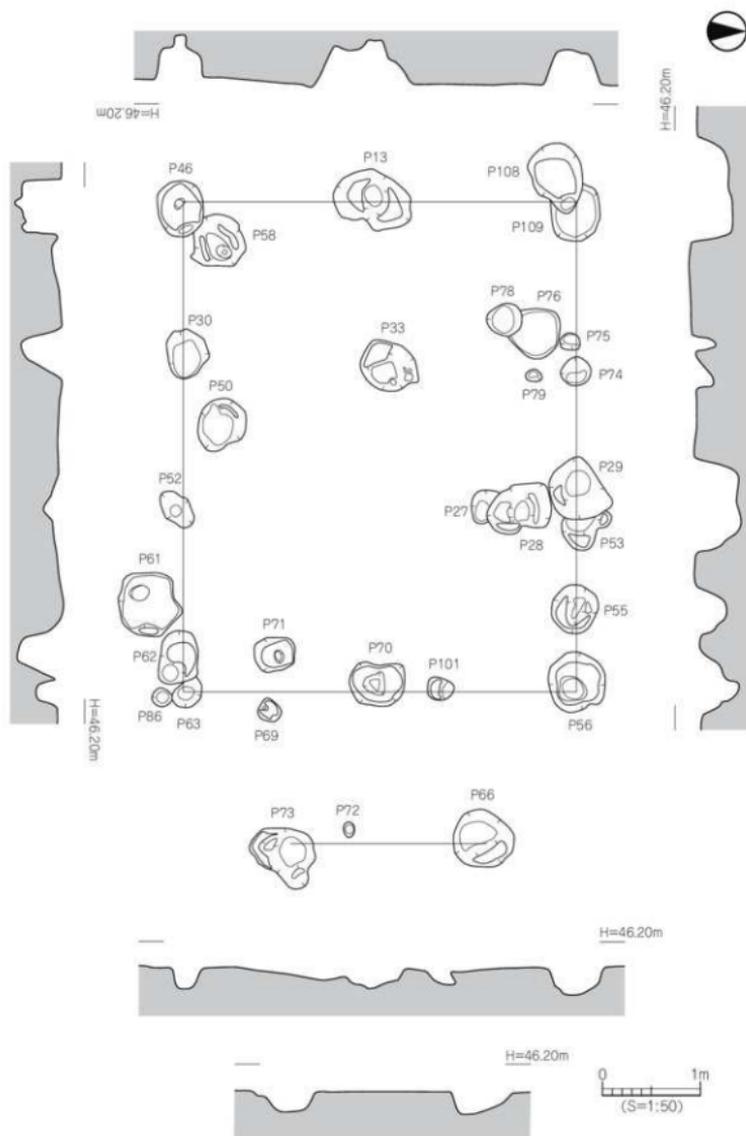
掘立2 (第56図、図版17)

掘立2も整理作業により復元できた建物址である。調査地1区中央の掘立1の南側に近接する。建物を構成する東側柱列中央の柱穴にのみ切り合いがある。P 18、P 43は東柱と考えられるため、掘立1と同様3間×2間の東西棟で、建物規模は東西長4.85m、南北3.75mを測る。建物を構成する柱穴の平面形態は円～楕円形で規模は径30～70cm、深さ10～35cmを測る。柱穴埋土は、褐色土を主体として灰褐色土、暗灰褐色土、茶褐色土、茶褐色粘性土のもの、これらに地山層の白色シルトの混合土のものがある。遺物は須恵器片、土師器片が出土した。木製遺物、種子の出土はない。

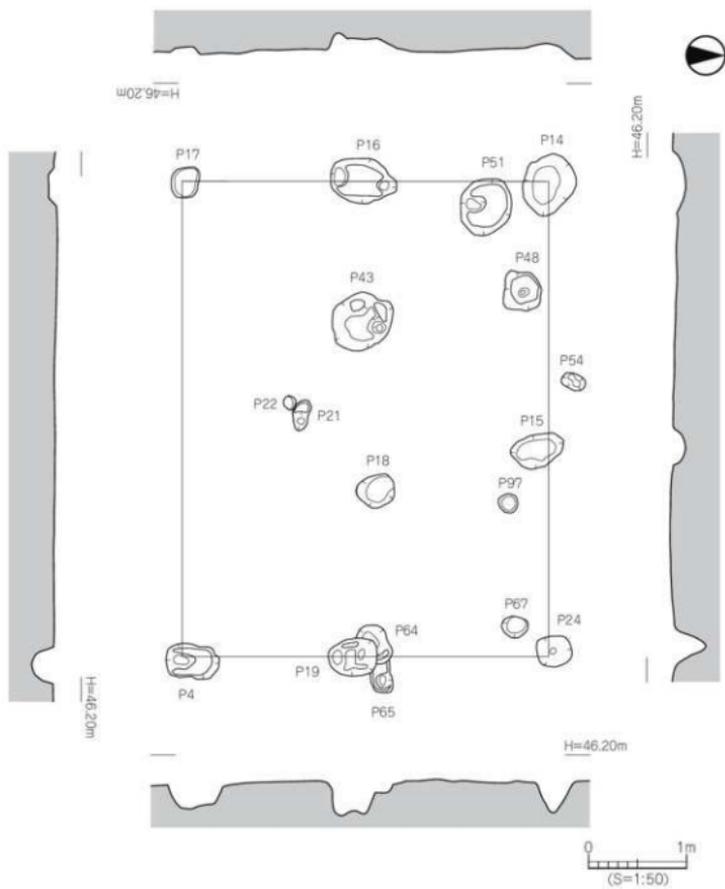
2) 土坑 (SK)

SK1 (第50図)

SK1は調査地1区中央やや西寄りに位置する。平面形態は楕円形で、規模は径75～82cm、深さ29cmを測る。断面形態は逆台形状である。埋土は6層に分層され、①層：明灰褐色細砂質土、②層：明灰褐色細砂質土(やや黒い)+白色シルト、③層：①層+白色シルト、④層：明灰褐色細砂質土(やや白い)+白色シルト、⑤層：明灰褐色砂質土、⑥層：白色シルト+明灰褐色土(少量)である。遺物は、須恵器、土師器の小片が少量出土した。



第55図 掘立1測量図



第56図 掘立2測量図

SK4 (第50図)

SK4は調査地1区中央やや東寄りに位置する。平面形態は楕円形で、規模は径65～71cm、深さ40cmを測る。断面形態は「U」字状である。土坑其底面にて径16cm、深さ8cmのピットを検出した。埋土は3層に分層され、①層：黒灰褐色土+白色シルト、②層：黒色土（柔らかい）、③層：白色シルト+黒色土（少量）+小礫である。遺物は、須恵器の小片が少量出土した。

SK5 (第50図)

SK5は調査地1区中央やや西寄りのSK1の西隣に位置する。平面形は不整形で、規模は東西75cm、南北75cm、深さは北側中央部で14cmを測る。断面形態は皿状である。埋土は茶褐色土の単一層である。遺物は、須恵器片、土師器片が少量出土した。

SK6 (第50図)

SK6は調査地1区東端に位置し、SK11を切る。平面形態は楕円形で、規模は56～95cm、深さ25cmを測る。断面形態は逆台形状である。埋土は2層に分層され、①層：暗茶褐色土、②層：暗茶褐色土+白色シルト+明灰色細砂の混合土である。遺物は須恵器、土師器の小片の他、小木片、桃核が少量出土した。

SK7 (第50図)

SK7は調査地1区東端に位置し、SK8を切る。平面形態は隅丸方形で、規模は長さ82cm、幅75cm、深さ23cmを測る。断面形態は逆台形状である。埋土は暗茶褐色土（砂と白色シルトが少量混じる）の単一層である。遺物は須恵器、土師器の小片の他、小木片、10cm大の礫石が少量と桃核が1点出土した。

SK8 (第50図、図版18)

SK8は調査地1区東端に位置し、SK7に切られる。平面形態は不整形で、規模は径65～85cm、深さ30cmを測る。断面形態は東西方向では逆台形状、南北方向では皿状である。埋土は3層に分層され、①層：暗褐色土+白色シルト（黒色土少量混じる）、②層：暗褐色土+黒色土、③層：白色シルトのブロックである。遺物は須恵器、土師器の小片が少量出土した。

SK9 (第50図、図版18・22)

SK9は調査地1区東端南壁際に位置する。一部を先行トレンチにより欠除するが、平面形態は楕円形で、規模は長さ220cm、幅110cm、深さ27cmを測る。断面形態は皿状である。埋土は2層に分層され、①層：黒灰色土（白色シルトブロック混入）、②層：明灰色細砂質土（①層が混入）である。遺物は弥生土器、土師器の小片、木製品片、木片、礫石が少量出土した。

出土遺物 (13)

13は木製品（下駄）の破片である。端部には直径1.3cmの円孔が斜め方向に穿たれている。

SK 10 (第50図)

SK 10は調査地1区中央やや東寄りの南壁際に位置し、南側は調査区外に続く。平面形態は楕円形と考えられ、規模は東西175cm、南北87cm、深さ43cmを測る。断面形態はレンズ状である。埋土は4層に分層され、①層：明灰褐色粘性土、②層：灰褐色粘性土、③層：明灰褐色細砂+①層、④層：明灰褐色砂礫（礫は小角礫）である。遺物は須恵器、土師器、木片の小片が少量出土した。

SK 11 (第50図)

SK 11は調査地1区東端に位置し、SK 6に切られる。平面形態は楕円形で、規模は径55～60cm、深さ30cmを測る。断面形態は逆台形状である。埋土は暗茶褐色土の単一層である。遺物は木片、小角礫が少量と桃核1点が出土した。

3) 溝 (SD)

SD 1 (第50図)

SD 1は調査地1区北西部に位置し、北はSR 2、南はSR 3によって消滅する。方向は北東から南西を指す。規模は検出長2.8m、幅0.23～0.35m、深さ0.08mを測る。断面形態はレンズ状である。埋土は2層に分層され、①層：明灰褐色細砂質土、②層：明灰色細砂（白色シルト混入）である。遺物は須恵器片、土師器片が少量出土した。

SD 3 (第50図、図版18)

SD 3は調査地1区中央に位置し、SD 4を切る。わずかに南東方向に湾曲する南北方向の溝である。北側と南側は調査区外に続く。規模は検出長11m、幅0.15～0.4m、深さは最深度で0.35mを測る。断面形態は「U」字状である。埋土は2層に分層され、①層：白色シルトブロック状と黒褐色土の混合、②層：白色シルトブロック状と黒色土の混合である。遺物は須恵器、土師器の小片が少量と桃核1点が出土した。

SD 4 (第50図、図版18)

SD 4は調査地1区中央に位置するほぼ南北方向の溝である。SD 3に切れ、南側はSR 1によって消滅する。北側は調査区外に続く。規模は検出長10.1m、幅0.2～0.63m、深さは最深度で0.5mを測る。埋土は5層に分層され、①層：黒褐色土+白色シルトブロック状(大)、②層：白色シルトブロック状、③層：明灰色細砂（黒色土少量混入）、④層：黒褐色土、明灰色細砂、白色粘土の混合、⑤層：黄白色粘土（ブロック状）である。遺物は須恵器片、土師器片の他、木片、桃核が1点ずつ出土した。須恵器片、土師器片の出土量はSD 3より多い。

4) 自然流路 (SR)

SR 1 (第50図)

SR 1は調査地1区中央南壁際に位置し、検出部分は東西方向の流路である。SD 4、SR 3を切り、南側は調査区外へ続く。検出東西長5.98m、南北長0.8m、深さ0.45mを測る。埋土は2層に分層され、①層：明灰色砂質土、②層：①層に明灰粘土少量混入である。遺物は須恵器片、木片、10cm大の円礫石が少量と、30cm大の礫石が1点出土した。

SR2 (第50図)

SR2は調査地1区北西部に位置する東西方向の流路である。SR3に切られ、SD1を切り、東側は調査区外へ続く。検出長3.35m、幅0.8m、深さ0.11mを測る。埋土は暗灰色細砂の単一層である。遺物の出土は無い。

SR3 (第50図、図版22)

SR3は調査地1区西部に位置し、西側は南北方向、南側は東西方向の流路である。SD1、SR2・4を切り、SR1に切られ、西側及び南側は調査区外に続く。検出長16m、幅7.5m、深さ0.39mを測る。埋土は4層に分層され、①層：明灰色細砂質土（微粘性、やや黒っぽい）、②層：暗灰褐色土（細砂混じり）、③層：灰色細砂質土、④層：灰色砂礫（礫は小）である。遺物は須恵器片、土師器片、瓦片、石製品、有機質遺物の木製遺物、種子（桃核7点）が10～20cm大の礫石と混在した状態で出土したが、西側側の南北方向部分からの出土が目立った。

出土遺物（14～17）

14～17は木製遺物である。14は薄板で、長さ13cm、幅1.5cm、厚さ0.2cmを測る。柾目木取り。15～17は丸棒状で、先端は一方向から斜めに削り杭状としている。15は残存長13.7cm、径1.3cm。16は残存長79cm、径1.8cm。17は残存長29.5cm、径2.5cmを測る。ともに芯持ち材。これらの他に焼け焦げが残る自然木片や割り材片6点が出土しており、薪の残骸と考える。

SR4 (第57～60図、図版19・22～25)

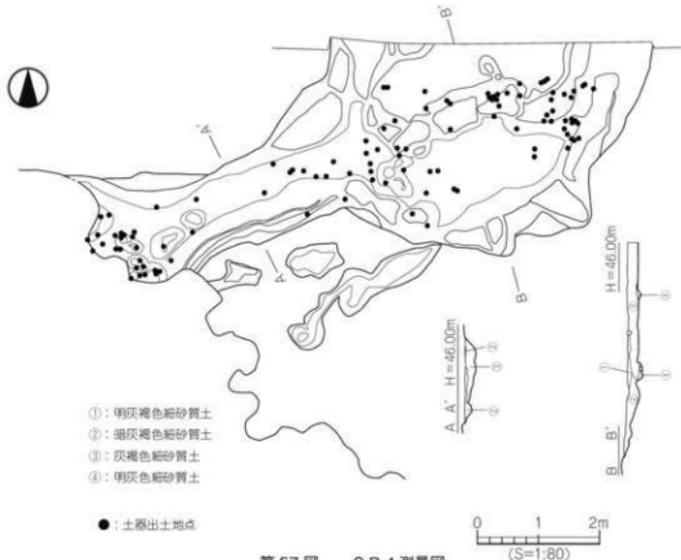
SR4は調査地1区西端部に位置し、若干南に偏る東西方向の流路である。西側と北側の一部はSR3に切られるが、北側は調査区外へと続く。検出長9.6m、幅5m、深さは最深部で0.32mを測る。埋土は4層に分層でき、①層：明灰褐色細砂質土、②層：暗灰褐色細砂質土、③層：灰褐色細砂質土、④層：明灰色細砂である。遺物は土師器、須恵器、施釉陶器、土製品、有機質遺物の木片、種子が10～30cm大の礫石と混在した状態で流路全域から出土した。

出土遺物（18～64）

土師器（18～36） 埵（18～25）ヘラ切り離しによる突出した円盤高台の底部片である。19は底部と立ち上がりの境は明瞭で、形態は須恵器埵に似る。内底面は回転ナデ調整されていて、約半分には煤が付着している。23～25は底部と立ち上がりの境の稜は回転ナデ調整により明瞭ではない。23・24は高台は厚く作られ、内底面はナデ窪ませている。

坏（26～30）ヘラ切り離しによる底部の坏である。26～28の口縁端部は丸くおさめていて、26・28はやや外反している。内外面ともていねいではないが回転ナデ調整されている。口径10.6～11.0cm、器高3.3～3.9cm、底部径6～7.3cm台におさまる。27・29はわずかに突出する底部である。

器種不明（31～33）31は高台から底部にかけての破片で、高台は貼り付けである。底内面は回転ナデ調整。下方へ外傾する高台は端部を丸くおさめる。内外面とも回転ナデ調整。高台の法量は下端径9.6cm、高さ2.7cmを測る。32は高台部片でやや外反する高台は端部を外方へ尖り気味におさめる。内外面とも回転ナデ調整。法量は下端径8.4cm、高さ2cmを測る。33は貼り付け高台の欠失した底部片。外面、底部外面には多段ナデの痕跡が残っている。法量は底部径10cm、残高3.6cmを測る。31～33は皿の可能性が考えられる。



壺(34・35) 口縁部片である。外面頸部から口縁、内面にかけてはナデ調整。外面頸部より下方はヘラ削りされ調整されている。34の法量は復元口径7.9cm、残高3.2cm、35の法量は復元径6.9cm、残高2.8cm、を測る。ともに釉薬の痕跡は見られない。

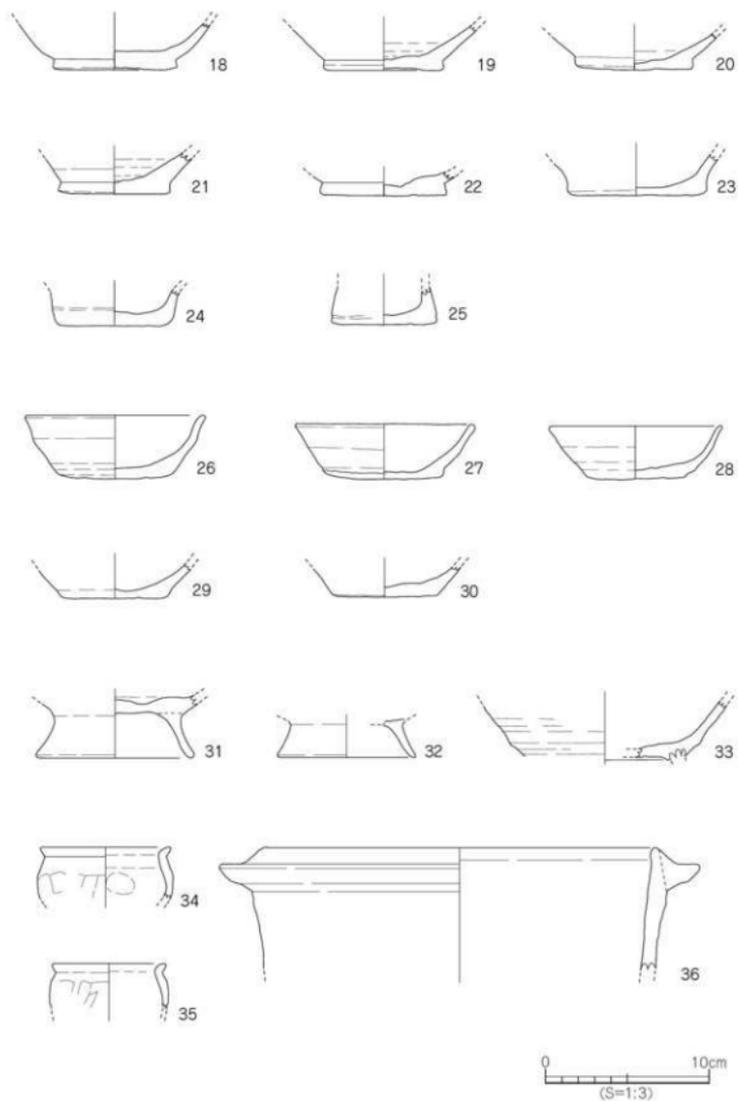
羽釜(36) 口縁直下に断面三角形の罫が貼り付けられている。罫の上面はナデ窪み、端部は上外方へ尖り気味におさめている。

須恵器(37～47) 埴(37～42) すべてヘラ切り離しの突出した円盤高台を持つ形態のものである。内外面とも回転ナデ調整されていて、底内面はすべて撫で窪む。法量は口径13.6～15.4cm、器高4.6～6.0cm、高台径6.2～7.7cmを測る。

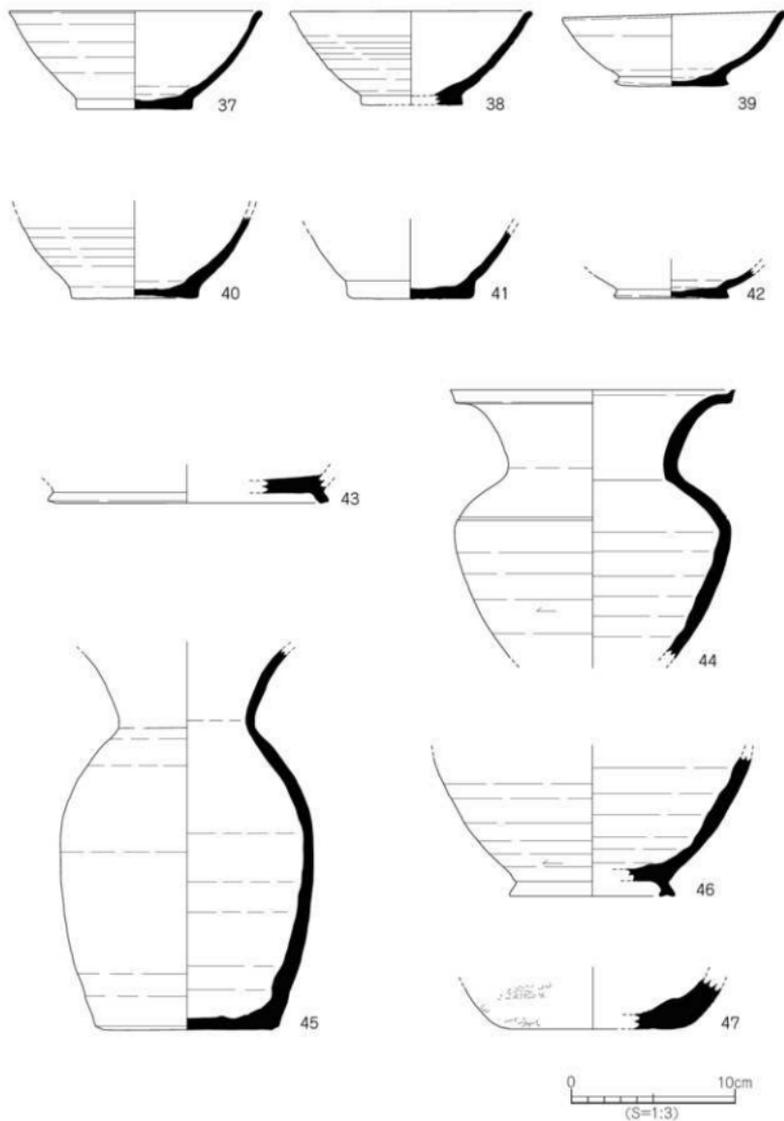
坏(43) 輪高台の坏の破片である。「ハ」の字状に付く輪高台端部は接地面は内端側である。

壺(44～47) 44は肩部に一条の沈線が巡る。外反しながら立ち上がる口縁部は、口縁内面をナデ窪め、上外方へ拡張し外端面を作る。胴部下半部は回転ヘラ削り調整が残るが他は回転ナデ調整される。法量は口縁径17.4cm、残高16.4cmを測る。45は平底の長胴で、内外面とも回転ナデ調整されている。法量は底部径11.2cm、残高23.3cmを測る。46は輪高台の底部片である。高台下端面はナデ窪み、内外方へやや拡張する。高台よりやや内湾しながら立ち上がる胴下半分はヘラ削り調整が残るが、他は回転ナデ調整される。法量は高台径10.0cm、残高8.6cmを測る。47は底部片である。底部と胴部の境は不明瞭である。器壁は厚い。底部も含め外面には叩きの調整痕が残る。法量は復元底径11.8cm、残高3.2cmを測る。

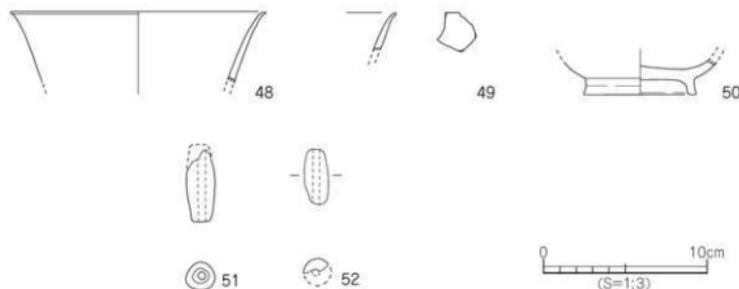
施釉陶器(48～50) 48は口縁部片。外傾して立ち上がる口縁で端部は外反し尖る。埴と思われる。内外面とも灰色の釉がかかり、焼成は良好で須恵質である。49も口縁部の小片と思われる。形態・



第58図 S R 4出土遺物実測図(1)



第 59 図 S R 4 出土遺物実測図 (2)



第60図 SR4出土遺物実測図(3)

器種は48と同じと考える。内外面ともやや薄い緑色の釉がかかり、焼成は良好で須恵質である。50は碗の底部片。内外面とも回転ナデ調整後、褐色味をおびた緑色の釉が、高台下端面までかかる。高台径6.8cm、高台高1.0cm、残高2.2cmを測る。焼成は良好で胎土は褐灰色を呈し緻密である。内底面に重焼の目跡が残る。長門・周防産。

土製品(51・52) 51・52は土鍾である。51はやや長めの樽型を呈する。法量は残存長4.4cm、径1.8cm、孔径0.4cm、残存重量11.3gを測る。52は破片である。残存長3.4cm、復元径1.5cm、復元孔径0.4cm、残存重量3.6gを計る。51・52とも漁労用の網の鍾と考える。

木製遺物(53～64)

曲物(53～60) 53～55は曲物の側板の破片である。柁目木取りの厚さ2～3mmの板を使用している。内面にケビキの痕跡、榿皮結合されている部分が残っている。56～60は曲物の底板である。端部に弧を描く加工面が残っている。この加工面には側板に固定するための釘穴が穿たれている。残存長35.4cmを測る材が見られる。

棒状品(61) 61は柁目木取りの棒状品と思われるが、厚さは曲物の底板に近い。

板状品(62) 62は板状品と思われる。法量は残存長10cm、残存幅4cm、厚さ0.9cmを測る。最終には薪として使用されている。

加工痕の残る破片(63) 63は木口面に鋸の加工痕が残る破片である。

杭状品(64) 64は自然木の板を落として棒状にしている。先端はないが杭と考えられる。

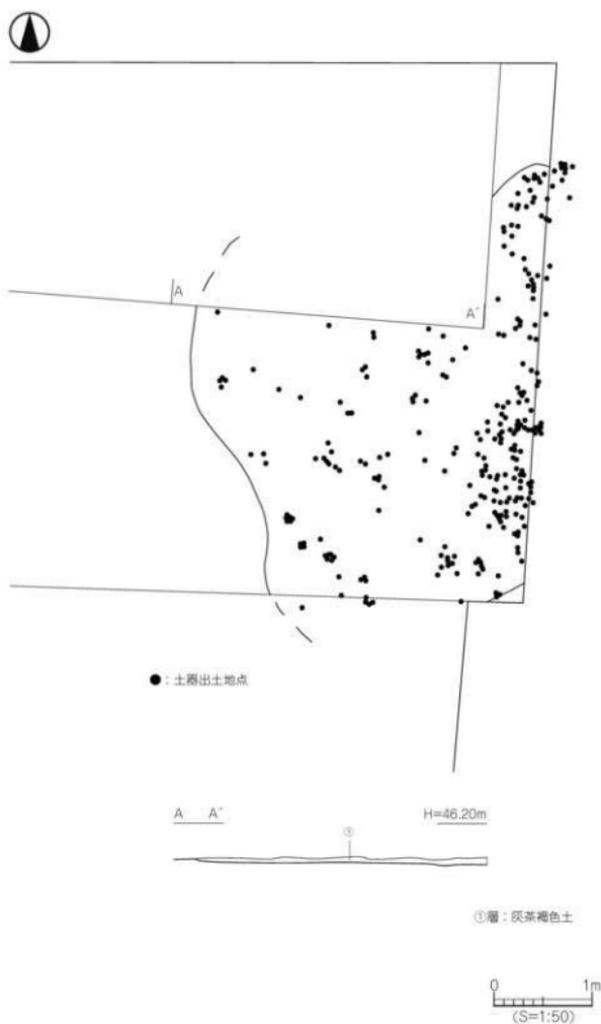
この他、SR4からは桃核が189点出土した。核の先端は細長く尖り、断面は扁平である。法量は長さ3.5cm、幅2.5cm、厚さ1.5cmを測る。核の形状、法量から栽培モモと思われる。

(3) 中世

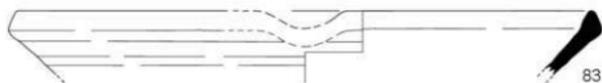
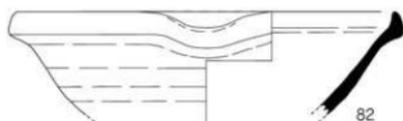
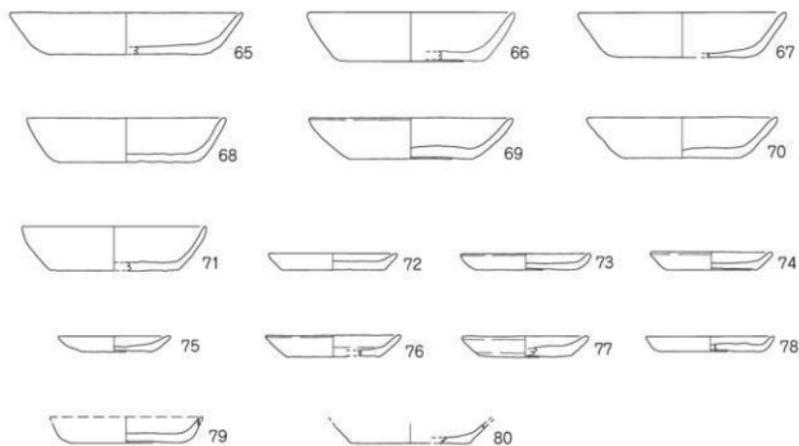
検出した遺構は、土器溜り一基である。

土器溜り(第61～63図、図版20・25・26)

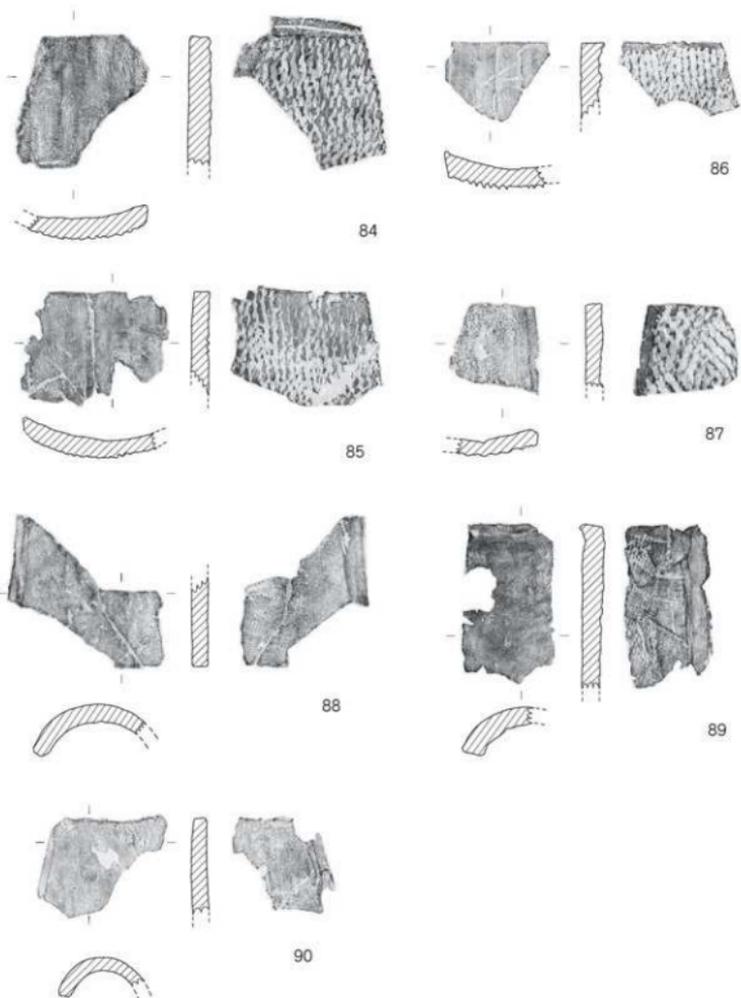
土器溜りは調査地2区に位置し、東側は未調査部分へ続く。明確な掘り方は未検出であったが、遺物を取り上げた床面は凸凹がみられた。検出長南北4.5m、東西3.6m、深さ0.08mを測る。埋土は灰茶褐色土(炭化物混じり)である。遺物は土師器、須恵器、瓦の破片、小木片が、10～15cm大



第 61 図 土器溜り測量図



第 62 図 土器溜り出土遺物実測図 (1)



0 20cm
(S=1:6)

第63図 土器溜り出土遺物実測図(2)

の円礫石と混在して出土した。土師器の出土量が一番多く、中にはその場で押し潰された状態で出土したものもあった。接合作業の結果、完形には至らなかった。

出土遺物 (65～90)

土師器 (65～81)

杯 (65～71) 摩滅を受けていて判別できないものもあるが、回転糸切りによる切り離しの杯である。外傾して立ち上がる口縁端部は丸くおさめるが、71のみやや尖る。法量は口径11.2～14.1cm、底径7.1～9.8cm、器高2.5～3.0cmにおさまる。胎土は密である。焼成はあまい。69・71の外底面には板状圧痕がある。

皿 (72～80) 摩滅を受けていて判別できないものもあるが、回転糸切りによる切り離しの皿である。外傾して立ち上がる口縁端部は丸くおさめる。法量は口径6.8～8.2cm、底径4.2～7.5cm、器高0.9～1.6cmを測る。胎土は密である。焼成はあまい。図化していないが、外底面には板状圧痕が見られる底部片が出土している。

鍋 (81) 内傾して立ち上がる口縁は外面直下に断面三角形の鐫を貼り付けている。この他に、図化していないが、足(脚)片も出土している。

須恵器 (82・83)

鉢 (82・83) 82・83は東播系のこね鉢である。体部は外傾して立ち上がり、口縁端部は肥厚させ上方に尖る。端部外面は自然軸がかかる。焼成は82はややあまく灰色、83は良好で青灰色を呈する。

瓦 (84～90)

平瓦 (84～87) 凸面側は大縄の叩き目の平瓦片である。焼成はあまいものが多い。隅を短辺に対して約75度に切り落としていることから、隅切瓦の破片と考えられる。図化していないが、斜格子の叩き目の平瓦片も出土している。

丸瓦 (88～90) 88～90は丸瓦片である。90の凸面側は丁寧にナデ調整されていて、焼成も良好で須恵質を呈する。88・89の焼成はあまい。

時期：出土した土師器、須恵器の形態より、土器溜りの埋没時期は13世紀代とする。

(4) その他の遺構と遺物

1) 古代の柱穴 (S P) (第50図、図版13・14)

古代の柱穴は61基を確認した。調査地1区中央から1区東端に位置し、掘立柱建物址の周囲に集中している。柱穴の平面形態は円～楕円形で、規模は径10～66cm、深さ7～32cmを測り、掘立柱建物址を構成する柱穴の規模よりひとまわり小型の物である。埋土は褐色土が主体となる。遺物は、須恵器、土師器、木片、種子があるが、少量の出土である。

2) 中世の柱穴 (S P) (第50・64図、図版16・26)

中世の柱穴は11基を確認した。中世の柱穴は3区に集中して検出された。平面形は円形～楕円形を呈し、規模は径12～40cm、深さ10～51cmを測る。埋土は明灰褐色粘性土である。遺物は土師器、石鍋、柱材がある。

出土遺物 (91・92)

土師器杯 (91) 調査地3区S P 111より出土した。回転糸切りによる切り離しである。底部と立ち上がりの境は明瞭ではない。口縁端部は丸くおさめる。口径11cm、器高2.9cmを測る。外部底面

には柀目状圧痕がある。

石鍋(92) 調査地3区S P 110より出土した。復元口径19.4cm、器高9cmを測る滑石製の鍋である。口径端部より2cm下がった位置に断面台形状の鏝を削り出している。外面には煤が付着している。



第64図 中世の柱穴出土遺物実測図

3) 倒木痕(倒木) (第50図)

倒木痕は1区で検出した。平面形は楕円形で、規模は径0.7～3.5mを測る。倒れた方向は倒木1、4は北西方向、倒木2、3は北方向である。時期は遺構の切り合いから古代以前である。

4) IV②層出土遺物 (第51・52・65図、図版26)

緑釉陶器(93) 輪高台の坏の破片で摩滅を受けている。胎土は密であるが、焼成はあまく土師質である。内面と高台内面の一部に薄い緑色の釉が残っている。



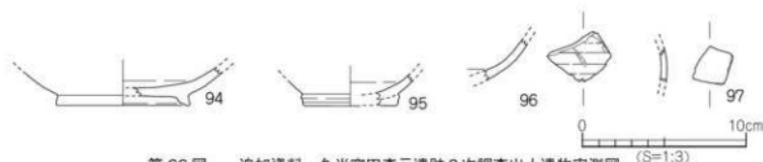
第65図 IV②層出土遺物実測図

5) 追加資料 (第66図、図版26)

久米窪田森元遺跡3次調査地より出土したものである。本報告書にて追加資料として掲載する。

壺(94～96) 94は近現代の暗渠排水路より出土したものである。やや「ハ」の字状に付く輪高台は端部内面が回転ナデ調整により外側へ尖り気味におさめる。内外面とも緑色の釉がかかるが、高台内面と底外面は薄い緑色に仕上げられている。復元底径8.1cm、残高2.4cmを測る。焼成は良好で須恵質である。近江産。95は表採資料である。貼り付けによる円盤高台のものである。内外面とも光沢のあるオリブ灰色の釉がかかる。復元底径5.8cm、残高2cmを測る。焼成は良好で須恵質である。京都産か。96は包含層(第Ⅲ層)より出土した。内外面とも回転ナデ調整、緑色の釉がかかる。残高3.1cmを測る。焼成は良好で須恵質である。

器種不明(97) 出土地点、層位不明である。2.2cm×2cmの小破片である。摩滅により色落ちしていると思われる。外面オリブ灰色、内面明オリブ灰色を呈する。焼成は良好で須恵質である。



第66図 追加資料・久米窪田森元遺跡3次調査出土遺物実測図

第4節 小 結

今回の調査では弥生時代～中世の生活関連遺構と遺物を確認した。調査地は、北から南へと広がる来住舌状台地の南端部の落ち際に位置している。

古代の遺構は1区に集中して検出された。検出した掘立柱建物址は方位、規模に多少の差はあるものの掘立2から掘立1へと移動・建替えが行われ、建物の建替えに伴い溝SD3からSD4へ付け替えたものと考えられる。おそらくは自然流路SR3の氾濫等により水際が移動した事が建替えの理由の一つではないだろうか。生活等に必要の水の確保が出来る流路からはあまり離れていない位置である。自然流路SR4からは須恵器、土師器、施釉陶器、土製品、木製遺物の破片、植物遺体等の遺物が礫石と混在した状態で出土した。これらの生活関連遺物は投棄されたと思われる。なかでも土師器、須恵器の塊・坏はすべてが底部へラ切り離し技法によるもので、これらと併せて長門・周防産の緑釉陶器が出土しており、一括性が高い資料である。

今回の調査で古代10世紀後半代の集落内での遺構配置状況の一部を確認する事ができた。調査地周辺には古代8世紀から10世紀代の集落の存在が明らかとなっており、また出土する遺物等から一般的集落ではなく官衙周辺の施設群の一部である可能性がより考えられる。

【文献】

- 「一般国道11号松山東道路関係遺跡」愛媛県埋蔵文化財調査センター
 「鷹ノ子町遺跡1次調査、久米窪田古屋敷遺跡C、来住町遺跡1・3次調査、久米高畑遺跡8次調査」『来住・久米地区の遺跡』松山市文化財調査報告書27
 「来住庵寺遺跡18・20次調査、久米窪田森元遺跡3次調査」『来住・久米地区の遺跡Ⅱ』松山市文化財調査報告書44
 「石井幼稚園遺跡、南中学校構内遺跡2次調査」松山市埋蔵文化財調査報告書45
 「久米窪田古屋敷遺跡」松山市文化財調査報告書148
 「南久米片瀝り遺跡、久米窪田森元遺跡」松山市文化財調査報告書157

遺構一覧・遺物観察表 — 凡例 —

- (1) 以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
 (2) 遺物観察表の各掲載について。

法量欄	() : 推定復元値
調整欄	土製品の各部位名称を略記した。 例) 底→底部、胴→胴部、口頸→口縁部から頸部。
胎土欄	胎土欄では混和剤を略記した。 例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土。 () 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。 例) 石・長(1~3) → 「1~3mm大の石英・長石を含む」である。
焼成欄	焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良

表 42 掘立柱建物址一覧

掘立	規模(間)	方向	桁行		梁行		床面積(m ²)	時期	備考
			実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)			
1	3×2	東西	6.55	1.5~1.8	4.0	2.0	26.2		
2	3×2	東西	4.85	1.5~1.6	3.75	1.8	18.2		

表 43 土坑一覧

土坑(SK)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	1区	楕円形	逆台形	0.82×0.75×0.29	明灰褐色細砂質土	須恵器片・土師器片		
4	1区	楕円形	U字状	0.71×0.65×0.40	黒灰褐色土+ 白色シルト	須恵器片		
5	1区	不整形	皿状	0.75×0.75×0.14	茶褐色土	須恵器片・土師器片		
6	1区	楕円形	逆台形	0.95×0.56×0.25	暗茶褐色土	須恵器片・土師器片・ 木片・種子・石		
7	1区	隅丸方形	逆台形	0.82×0.75×0.23	暗茶褐色土+砂+ 白色シルト	須恵器片・土師器片・ 木片・種子・小礫石		
8	1区	不整形	逆台形	0.85×0.65×0.30	暗茶褐色土+ 白色シルト	須恵器片・土師器片		
9	1区	楕円形	皿状	2.30×(1.1+a)×0.27	黒灰色土	弥生土器片・土師器片・ 木製品片・小礫石		
10	1区	楕円形	レンズ状	(1.75+a)×(0.87+a)×0.43	明灰褐色粘性土	須恵器片・土師器片・ 木片		
11	1区	楕円形	逆台形	(0.6+a)×0.55×0.3	暗茶褐色土	木片・種子・小礫石		

表 44 溝一覧

溝(SD)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	方向	埋土	出土遺物	時期	備考
1	1区	レンズ状	2.8×(0.23~0.35)×0.08	南西	明灰褐色細砂 質土	須恵器・土師器	古代	
3	1区	U字状	11.0×(0.15~0.4)×0.35	北→南	白色シルト+ プロック状+ 黒褐色土	須恵器・土師器・ 種子	古代	
4	1区	レンズ状-U字状	10.1×(0.2~0.63)×0.5	北→南	黒褐色土+ 白色シルト プロック状	須恵器・土師器・ 木片・種子	古代	

表 45 自然流路一覧

流路(SR)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	方向	埋土	出土遺物	時期	備考
1	1区	皿状	5.98×(0.8+a)×0.45	東西	明灰色砂質土	須恵器片・木片	古代	
2	1区	レンズ状	(3.35+a)×0.8×0.11	北東→南西	暗灰色細砂		古代	
3	1区	皿状	(160+a)×(75+a)×0.39	北→南 西→東	明灰色細砂質土 (微粘性) やや湿った	須恵器・土師器・ 石器・布目瓦・木片・ 種子・獣骨	古代	
4	1区	皿状	(9.6+a)×5.0×0.32	北東→南西	暗灰色細砂 質土	須恵器・結核陶器・ 土師器・土師・木片・ 種子	古代	
5	2~3区	皿状	(9.8+a)×(190+a)×0.95	北東→南西 西→東	暗茶褐色土	弥生土器・木片・ 種子	古代	

表 46 土器溜り一覧

土器溜り	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	2区	楕円	皿状	4.5×3.6×0.08	灰茶褐色土	土師器・須恵器・ 瓦・小木片・円礫石	中世 (13世紀代)	

表 47 S R 5 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	甕	口径 (33.0) 残高 6.8	短く外方に屈曲する口縁部。肩部は面をもつ。	マメツ	マメツ	にぶい黄褐色 灰黄褐色	石・長(1~3) ○		
2	甕	口径 (26.8) 残高 5.9	短く外反する口縁部。肩部は面をもつ。肩部外面に細目凸帯が走る。	ナデ	マメツ	黒褐色 にぶい黄褐色	石・長(1~3) ○		21
3	甕	口径 (16.4) 残高 4.0	口縁面に2条の凹線文。頸部下に刻目文を施す。	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色・灰黄褐色 にぶい黄褐色・灰黄褐色	石・長(1~3) ○		21
4	甕	底径 7.2 残高 12.6	くびれて上げ底の底部。	ハケ(6本/cm) →ミゴキ	ナデ	灰白色・灰色 灰白色・灰色	石・長(1~3) ○		21
5	甕	底径 6.4 残高 6.1	やや上げ底の底部。	マメツ	マメツ	灰黄褐色 灰黄色	石・長(1~3) ○		
6	甕	底径 4.2 残高 4.3	ややくびれの上げ底の底部。	ナデ	ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長(1~3) ○		
7	甕	口径 (5.4) 底径 6.0 器高 16.6	体部が舞臺玉のように横にはっている。平底。「く」の字状?	ナデ?	ナデ?	淡黄色 灰白色	石・長(1~2) ○	黒斑	21
8	高杯	底径 8.9 残高 6.9	柱部に5条の凹線。脚端部内面は強いナデにより凹む。	マメツ	マメツ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長(1~4) 金 ○		21

表 48 S R 5 出土遺物観察表 木製品

番号	器種	残存	樹種	法 量			備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)		
9	加工品片	破片	未同定	120	5.3	2.3	榎目木取り	21
10	匙	*	*	65	3.7	0.8	杖状・芯持ち材	21
11	杖	先端部	*	16.5	径 3.0		芯持ち材	21
12	杖	*	*	420	径 4.0		芯持ち材	21

表 49 S K 9 出土遺物観察表 木製品

番号	器種	残存	樹種	法 量			備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)		
13	下駄	破片	未同定	105	2.1	0.9	斜め方向の円孔	22

表 50 S R 3 出土遺物観察表 木製品

番号	器種	残存	樹種	法 量			備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)		
14	木削片?	完形	未同定	13	1.5	0.2	榎目木取り	22
15	杖状	先端部	*	13.7	1.3		杖状・芯持ち材	22
16	杖状	上部欠損	*	7.9	径 1.8		芯持ち材	22
17	杖状	先端部	*	29.5	径 (2.5)		芯持ち材	22

表 51 S R 4 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
18	埴	底径 7.5 残高 2.9	平高台。	回転ナデ ◎ 回転ヘラ切り ナデ(腹3玉あり)	回転ナデ	灰白色 黄灰色	石・長(1~5) ○		
19	埴	底径 7.2 残高 2.8	平高台。	マメツ ◎ 回転ヘラ切り	回転ナデ	灰白色・灰色 灰白色・黒褐色	微砂 ○		

出土遺物観察表

SR4 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
20	埴	底径 7.0 残高 2.3	平高台。	回転ナデ ⑧ 回転ヘラ切り→ ナデ(板状圧痕あり)	回転ナデ	灰白色 黄灰色・灰白色	微砂 ○		
21	埴	底径 6.8 残高 2.5	平高台。	回転ナデ ⑧ 回転ヘラ切り (板状工具痕あり)	回転ナデ	灰白色 灰白色	微砂 ○		
22	埴	底径 7.7 残高 1.5	平底の底部。	回転ナデ ⑧ 回転ヘラ切り	回転ナデ	暗灰黄色 灰黄色	微砂 ○		
23	埴	底径 8.5 残高 2.5	平底の底部。	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長(1) ○		
24	埴	底径 6.8 残高 2.3	平底。外面強いナデにより凹線あり。	回転ナデ ⑧ マメツ	回転ナデ	灰黄色 灰黄色	長(1) ○		
25	埴	底径 6.4 残高 2.4	平底の底部。	回転ナデ ⑧ 回転ヘラ切り	回転ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色・ にぶい褐色	微砂 ○		
26	坏	口径 (11.0) 底径 (6.8) 器高 3.9	平底。外面に強いナデによる横をもつ。	回転ナデ ⑧ 回転ヘラ切り (板状圧痕あり)	回転ナデ	赭灰色 灰黄褐色 赭灰色 灰黄褐色	微砂 ○		22
27	坏	口径 10.9 底径 7.3 器高 3.4	やや丸味のある平底の底部。内湾して立ち上がる口縁部。	回転ナデ ⑧ 回転ヘラ切り →ナデ	回転ナデ	灰白色 褐色 灰白色	石・長(1) ○		22
28	坏	口径 10.6 底径 6.0 器高 3.3	平底の底部より内湾気味に立ち上がる。	回転ナデ ⑧ 回転ヘラ切り	回転ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	微砂 ○		22
29	坏	底径 6.5 残高 2.2	平底の底部。	回転ナデ ⑧ 回転ヘラ切り	回転ナデ	灰黄色 灰黄色	微砂 ○		
30	坏	底径 6.4 残高 1.8	平底の底部。	回転ナデ ⑧ 回転ヘラ切り	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1) ○		
31	皿?	底径 9.6 残高 3.9	高台付。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	微砂 ○		
32	皿?	底径 (8.4) 残高 2.2	高台部片。「ハ」の字状に広がる。端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ○		
33	皿?	底径 (10.0) 残高 3.6	高台部欠損。	回転ナデ	回転ナデ	褐色・にぶい黄褐色 にぶい黄褐色・に ぶい黄褐色	微砂 ○		
34	壺	口径 (7.9) 残高 3.2	わずかに外縁して短くのびる口縁。外面はケズリによる横。	ケズリ	ヨコナデ	淡黄色 淡黄色	微砂 ○		22
35	壺	口径 (6.9) 残高 2.8	わずかに外縁して短くのびる口縁。外面はケズリによる横。	ケズリ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	微砂 ○		22
36	羽釜	口径 (23.8) 残高 7.5	胴は水平方向に取り付く。端部は丸い。	ナデ	ナデ	黄灰色 灰黄色・黒褐色	石・長(1~5) 金 ○		
37	埴	口径 15.4 底径 7.1 器高 6.0	平高台。内湾して立ち上がる口縁部。端部はわずかに外反して丸い。	回転ナデ ⑧ 回転ヘラ切り →ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1~2) ○		23
38	埴	口径 (14.7) 底径 (6.2) 器高 5.7	平底の底部より外上方へのびる。口縁端部は外反気味に丸くおさめる。	回転ナデ ⑧ 回転ヘラ切り	回転ナデ	灰白色・黄灰色 灰白色・黄灰色	微砂石(1) ○		23
39	埴	口径 13.6 底径 6.9 器高 4.6	平高台。内湾気味に立ち上がる口縁。口端部は丸く仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ○		23
40	埴	底径 (7.7) 残高 5.0	平高台。中心がやや凹む。	回転ナデ ⑧ 回転ヘラ切り →ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1) ○		

SR4 出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量 (cm)	形態・論文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
41	埴	底径 (7.7) 残高 4.2	平底の底部。	回転ナデ ⑤ 回転ヘラ切り	回転ナデ	灰白色 灰白色	微砂 ○		
42	埴	底径 7.0 残高 1.9	平高台。	回転ナデ ⑤ 回転ヘラ切り →ナデ	回転ナデ	灰色 黄灰色	長(1) ○		
43	杯	底径 (17.0) 残高 1.8	輪高台付きの底部片。高台端部は「コ」の字状。	回転ナデ	ナデ	黄灰色 灰黄色	石・長(1~2) ○		
44	壺	口径 17.4 残高 16.4	大きく外反する口縁部。端部は上外方へ突る。肩部に1条の凹線が走る。	⑤ ⑥ 回転ナデ ⑤ ⑥ 回転ヘラ切り	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1~2) ○		23
45	壺	底径 (11.2) 残高 23.3	外反する口縁。平底。	回転ナデ ⑤ ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色・灰色	長(1) ○		23
46	壺	底径 10.0 残高 8.6	高台付壺	回転ヘラケズリ ⑤ 回転ナデ	回転ナデ	にみ 褐色・灰色 灰色	石・長(1~3) ○		
47	壺	底径 (11.8) 残高 3.2	平底の底部。外面にタタキ調整がみられる。	タタキ→ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ○		
48	埴	口径 (15.5) 残高 4.3	直口口縁。先廻りでやや外へ開く。口縁。端部はうすく欠損する。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○		輪
49	埴	残高 2.4	外反する口縁。端部は尖り気味におさめる。	回転ナデ	回転ナデ	緑色(施釉) 緑色(施釉)	ち密 ○		輪
50	埴	底径 (6.8) 残高 2.2	輪高台付底部。高台端部は面をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	暗オリーブ色 灰オリーブ色	石・長(1) ○		輪 23
51	土師	最大径 1.8 残存長 4.4	タル型	マメツ	穿孔	黒色	密 ○		23
52	土師	最大径 1.5 残存長 3.4	不明	マメツ	穿孔	淡黄色	密 ○		23

表 52 SR4 出土遺物観察表 木製品

番号	器種	残存	樹種	法 量			備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)		
53	曲物(側板)	破片	未同定	(6.7)	(1.7)	3.5	榎皮結合・榎日本取り	24
54	曲物(側板)	*	*	(7.0)	1.6	0.2	榎皮結合・けびき・榎日本取り	24
55	曲物(側板)	*	*	(12.0)	2.3	0.3	けびき・榎日本取り	24
56	曲物(底板)	*	*	(13.5)	5.7	0.6	榎日本取り	24
57	曲物(底板)	*	*	(19.5)	(7.7)	0.5	榎日本取り	24
58	曲物(底板)	*	*	(10.0)	2.0	0.6	榎日本取り	24
59	曲物(底板)	*	*	(31.5)	3.8	1.0		24
60	曲物(底板)	*	*	(35.4)	2.4	0.8		24
61	棒状品	*	*	(30.2)	2.0	1.1		24
62	板状品	*	*	(10.0)	(4.0)	(0.9)	焼け焦げあり	25
63	破片	*	*	(8.9)	3.5	1.3	顔目痕か?	25
64	杭	*	*	(35.0)	径 3.0		芯持ち材加工痕あり	24

出土遺物観察表

表 53 土器溜り出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
65	坏	口径 (14.1) 底径 (9.8) 器高 2.6	口縁端部は先細り気味で丸い。	マメフ ◎ 回転糸切り	マメフ	灰白色 灰白色	長 (I) ○		
66	坏	口径 (12.6) 底径 (9.0) 器高 3.0	口縁は上外方へ立ち上がり端部は丸くおさめる。	マメフ	マメフ	灰白色 灰白色	撒砂 ○		
67	坏	口径 (12.7) 底径 (8.8) 器高 2.8	口縁への屈曲はあまい。端部は先細り突る。	マメフ	マメフ	灰白色 灰白色	撒砂 ○		
68	坏	口径 (12.1) 底径 8.8 器高 2.7	上外方へのびる口縁。端部は丸くおさめる。	マメフ	回転ナデ	灰白色 灰白色	撒砂 ○		
69	坏	口径 (12.4) 底径 (7.7) 器高 2.5	口縁端部は丸い。	ナデ ◎ 回転糸切り スノコ痕残る	ナデ	灰白色 灰白色	長 (I) ○		25
70	坏	口径 (11.6) 底径 7.1 器高 2.5	口縁端部は先細り気味。	マメフ ◎ 回転糸切り	ナデ	灰白色 灰白色	長 (I ~ 2) ○		
71	坏	口径 (11.2) 底径 (7.6) 器高 2.7	口縁端部は先細り丸い。	回転ナデ ◎ 回転糸切り スノコ痕残る	回転ナデ	浅黄褐色・明黄褐色 浅黄褐色・褐色	石・長 (I ~ 2) ○		25
72	皿	口径 (7.8) 底径 (6.4) 器高 1.0	平底の底部。	マメフ	マメフ	灰白色 灰白色・浅黄褐色	長 (I) (撒砂) ○		
73	皿	口径 (7.9) 底径 6.1 器高 1.0	口縁端部は丸い。	ナデ ◎ 回転糸切り	ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	撒砂 ○		
74	皿	口径 (7.4) 底径 5.5 器高 1.1	口縁端部は丸い。	ナデ ◎ 回転糸切り (板状圧痕あり)	ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (I) ○		25
75	皿	口径 6.8 底径 4.2 器高 0.9	口縁端部は丸い。	マメフ	マメフ	浅黄色・灰黄色 浅黄色・灰黄色	撒砂 ○		25
76	皿	口径 (8.2) 底径 (5.8) 器高 1.3	口縁端部は丸い。	マメフ ◎ 回転糸切り	ナデ	淡黄色 淡黄色	石・長 (I ~ 3) ○		
77	皿	口径 (7.7) 底径 (5.7) 器高 1.3	口縁端部は丸い。	マメフ	マメフ	明褐色・黄灰色 灰白色	長 (I ~ 2) ○		
78	皿	口径 (7.8) 底径 (6.2) 器高 0.9	口縁端部は丸い。	マメフ	マメフ	浅黄褐色 灰白色	撒砂		
79	皿	口径 (7.5) 底径 1.6	口縁端部欠損。	マメフ ◎ 回転糸切り (板状圧痕あり)	マメフ	灰白色 灰白色	撒砂 ○		
80	皿	口径 (7.4) 底径 1.2	平底の底部。	マメフ	マメフ	黄褐色 灰黄色	石・長 (I ~ 2) ○		
81	罎	口径 (22.6) 残高 3.6	やや内へ傾く口縁部片。口縁部外面に突起状の跡を張り付けている。	マメフ	マメフ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長 (I ~ 2) ○		
82	鉢	口径 (24.0) 残高 6.3	片口鉢の口縁部片。 口縁外面自然軸。	回転ナデ	回転ナデ	灰色・灰白色 灰白色	石・長 (I ~ 3) ○		25
83	鉢	口径 (36.0) 残高 3.9	片口鉢の口縁部片。 口縁外面自然軸。	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色 灰色	石・長 (I) ○		25

表54 土器溜り出土遺物観察表 土製品 瓦

番号	器種	法量 (cm)				調 整		色 調	胎土 焼成	備考	図版
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	凸 面	凹 面				
84	隅切平瓦	(16.0)	(14.6)	2.7	821.24	太縄タタキ	布目	浅黄棕色	密 △		
85	平瓦	(9.4)	(12.0)	2.7	428.53	太縄タタキ	布目枠板直	灰白色	密 ○		26
86	隅切平瓦	(12.8)	(16.2)	2.5	822.49	太縄タタキ	布目枠板直	灰白色	ち密 ○		26
87	平瓦	(10.3)	(10.0)	2.1	376.20	太縄タタキ	布目	灰白色	やや密 △		
88	丸瓦	(11.0)	(14.0)	2.2	285.97		布目	灰色暗灰色	ち密 ○		
89	丸瓦	(20.2)	(9.4)	2.6	746.79	ナデ	布目	灰白色	密 ○		26
90	丸瓦	(11.7)	(10.3)	2.0	371.03	ナデ	布目	灰色	密 ○		26

表55 S P出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
91	環	口径 (11.0) 底径 (8.2) 器高 2.9	平底の底部。口縁肩部は丸い。	マメフ ◎ 回転糸切り	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1) ◎		26

表56 S P出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
92	鍋	破片	滑石	(19.2)	9.0	1.2	389.2		26

表57 IV②層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
93	環	底径 (7.2) 残高 2.4	輪高台。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	微砂 ○		26

表58 久米窪田森元遺跡3次調査出土遺物観察表 (追加資料) 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
94	埴	底径 (8.1) 残高 2.4	輪高台付底部口。高台肩部は内側に面をもちナデにより凹む。内外面ともに輪を施す。	回転ナデ →施輪	回転ナデ →施輪	薄い緑色 薄い緑色	長(1~2) ○		26
95	埴	底径 (5.8) 残高 2.0	貼り付けによる平高台。内外面共に輪を施す。	回転ナデ →施輪	回転ナデ →施輪	オリーブ灰色 オリーブ灰色	石・長(1) ○		26
96	埴	残高 3.1	緑釉陶器の小片。内外面に緑色の輪が均一にかかる。	工具痕あり	回転ナデ	緑色 緑色	○		26
97	不明	残高 2.2	内外面共に輪を施す。			オリーブ灰色 明オリーブ灰色	○		26

第5章 まとめ

ここでは、来住町遺跡8次調査、来住町遺跡12次調査と久米窪田森元遺跡4次調査を中心として、来住廃寺・久米官衙遺跡東側の来住町遺跡、久米窪田遺跡の調査成果をあわせてまとめを行う。

1. 来住町遺跡

(1) 縄文時代

来住町遺跡では、これまでの調査からは縄文時代の遺構は検出されていない。

(2) 弥生時代

来住町遺跡では、来住町遺跡8次、12次調査の西側に位置する来住V遺跡から弥生時代前期末から中期初頭の2重に巡る環濠があり、その続きは来住廃寺20次調査で内側、平成23年度の試掘調査からは外側の環濠の続きが確認されている。来住町遺跡の西には弥生時代前期末から中期初頭の集落範囲が明らかになってきている。弥生時代の明確な遺構は11次調査から検出されているだけである。8次調査、12次調査からは弥生時代の遺構は検出されていない。来住町遺跡の中では、遺物がわずかに出土しているだけである。弥生時代の集落は来住町遺跡の西側と11次調査より北側に展開するものと思われる。

(3) 古墳時代

来住町遺跡では、8次調査で検出したSR1は隣接する7次調査、10次調査に続いており、SR1の南側には7次調査と8次調査があり、掘立柱建物や土坑が多数検出されている。北側には8次調査、11次調査、12次調査、来住VI遺跡があり、掘立柱建物が多数検出されている。12次調査から9次調査までの間は、5次調査から掘立柱建物が検出しているだけである。また、1次調査、2次調査、4次調査からは自然流路SRが検出されている。来住町遺跡の古墳時代の居住域は8次調査SR1の両岸と5次調査、11次調査周辺の北側に展開している。

(4) 古代

来住町遺跡では、8次調査SR1の南岸の7次調査、北岸の10次調査、来住VI遺跡から掘立柱建物を検出している。5次調査、11次調査にて掘立柱建物が検出され、そのほかに3次調査、6次調査からも集落に関連する遺構を検出している。居住域は古墳時代に引き続き来住町遺跡の南東部の8次調査SR1の両岸と来住町遺跡の北西部から北部に集落が展開していることになる。また、来住町遺跡の中央部に、現在の水路が南西方向から北西方向にあり、この水路より東側の約30件の試掘結果からは遺跡が確認されていないことから、流路の東側は居住には適さない区域が存在すると考えられる。

2. 久米窪田遺跡

(1) 縄文時代

久米窪田遺跡では、森元遺跡4次調査の北側に位置する、森元遺跡から後期の土坑を検出している。久米窪田I遺跡からは後期の竪穴、久米窪田V遺跡からは中期から晩期の土坑を検出している。

(2) 弥生時代

久米窪田遺跡からは、前期では久米窪田IV遺跡から竪穴、土坑墓、久米窪田V遺跡から竪穴、土坑墓、

古屋敷遺跡から前期末から中期の土坑、溝、竪穴建物が検出されている。中期では、古屋敷C遺跡から中期後半のL字状に曲がる溝、森元遺跡4次調査から弥生時代中期の流路、久米窪田Ⅲ遺跡から竪穴、土坑墓、久米窪田V遺跡から竪穴、土坑墓が検出されている。後期では、久米窪田Ⅳ遺跡から竪穴、土坑、久米窪田V遺跡から竪穴住居、土坑墓が検出されている。

久米窪田遺跡の弥生時代の遺構は、森元遺跡4次調査から検出された流路SR1より東側に検出されており、前期末から後期にかけて集落が久米窪田遺跡の東側に広がりが見られる。

(3) 古墳時代

久米窪田遺跡では、明確な古墳時代の遺構は、森元遺跡3次調査から検出した六世紀後半の溝1条と久米窪田V遺跡の掘立柱建物だけである。

(4) 古代

久米窪田遺跡では、森元遺跡4次調査から掘立柱建物、土坑、溝、流路が検出されている。古屋敷遺跡、久米窪田Ⅱ遺跡、森元遺跡、森元遺跡3次調査からも土坑、溝、流路など数多くの遺構が検出されている。遺物では、古屋敷遺跡から円面硯、久米窪田Ⅱ遺跡から木簡、斎串、円面硯、墨書土器、森元遺跡3次調査から木簡、下駄が出土している。久米窪田Ⅳ遺跡2次、久米窪田古屋敷遺跡A区、B区、森元遺跡3次調査、4次調査から自然流路が検出されている。久米窪田遺跡の中央部に自然流路が複数存在し、自然流路の西側に官衙関連の施設が存在したと考えられる。

古代には、来住町遺跡、久米窪田遺跡内からは多くの掘立柱建物が確認されている。遺物では円面硯、木簡、墨書土器、斎串が出土し、来住町遺跡、久米窪田遺跡は久米官衙遺跡群に関連する周辺の施設が考えられる。

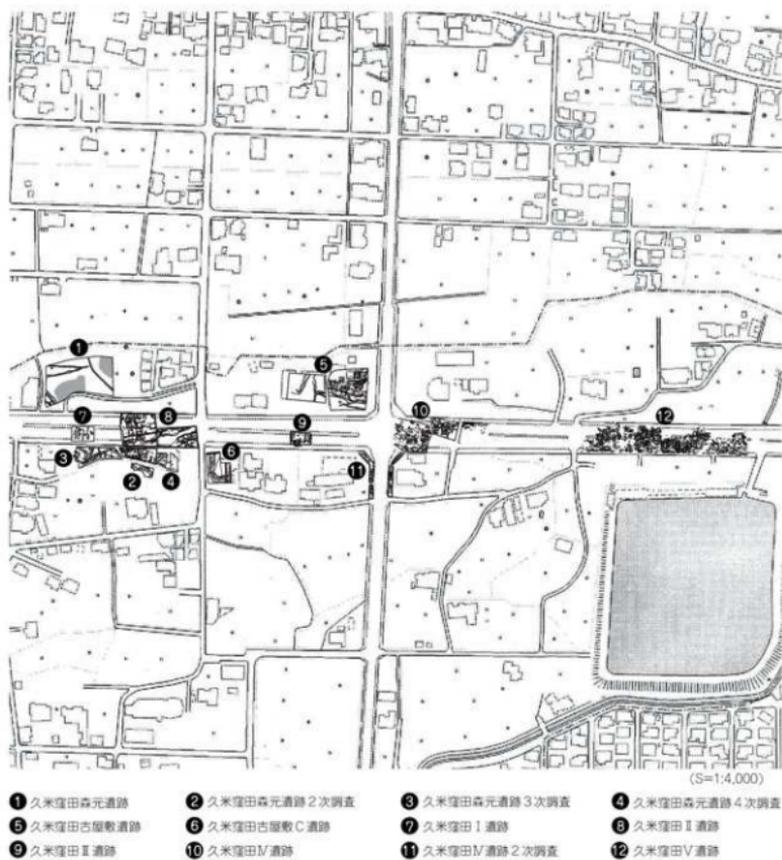
今回、来住町遺跡と久米窪田遺跡の時代ごとのまとめを行った。来住町遺跡、久米窪田遺跡ともに古代には多くの自然流路が存在することが解った。さらに来住町遺跡、久米窪田遺跡の調査が進み明確な流路が確定できれば集落域の確定が明らかになると考えられる。今後は、来住町遺跡、久米官衙遺跡群との比較検討を行い来住台地上の時代ごとの集落変遷を明確にすることが必要と考えられる。

【文献】

- 梅木謙一 1992 「来住町遺跡1次・3次調査」『久米窪田古屋敷C遺跡』「来住・久米地区の遺跡」松山市文化財調査報告書27
 梅木謙一 1994 「来住廃寺20次調査」『久米窪田森元遺跡3次調査』「来住・久米地区の遺跡Ⅱ」松山市文化財調査報告書44
 田城武志 2000 「来住町遺跡4次調査」『来住・久米地区の遺跡Ⅲ』松山市文化財調査報告書76
 栗田茂敏 2011 「久米窪田古屋敷遺跡」松山市文化財調査報告書148
 小玉聖紀子 2004 「来住町遺跡6次調査」『来住・久米地区の遺跡Ⅳ』松山市文化財調査報告書100
 小笠原善治 2011 『松山市埋蔵文化財調査年報24』
 栗田茂敏 2012 「久米窪田森元遺跡」松山市埋蔵文化財調査報告書157
 吉本祐・阪本安光 1981 「来住Ⅳ遺跡」『来住Ⅴ遺跡』「久米窪田Ⅰ遺跡」『久米窪田Ⅱ遺跡』「久米窪田Ⅲ遺跡」
 『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』
 阪本安光・小林一郎 1981 「久米窪田Ⅳ遺跡」『久米窪田Ⅴ遺跡』『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』
 稲葉靖司 2003 「久米窪田Ⅳ遺跡2次」埋蔵文化財発掘調査報告書107 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター



第 67 図 来住町遺跡周辺調査地位位置図



第 68 図 久米窪田遺跡周辺調査地位位置図

※久米窪田Ⅰ～Ⅴ遺跡の位置は 久米窪田Ⅳ遺跡 2次の図 4 2 を参考にした。

稲葉靖司 2003 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

写真図版

写真図版 1～6: 来住町遺跡 8 次調査

写真図版 7～12: 来住町遺跡 1 2 次調査

写真図版 13～26: 久米窪田森元遺跡 4 次調査

写真図版データ

1. 遺構は、主な状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35mm判フィルムカメラ・デジタルカメラで補足している。一部の撮影には高所作業車・やぐらを使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	レンズ	スーパーアンギュロン 90mm他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67 55mm他
	ニコンニューFM2		ズームニッコール28～85mm他
フィルム	白黒 ネオパンSS・アクロス		

2. 遺物は、4×5判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カメラ	トヨビュー45G
レンズ	ジンマーS 240mm F 5.6 他
ストロボ	コメット/CA32・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム	ネオパンアクロス

3. 単色図版は、一部を除き、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引伸機	ラッキー450MD・90MS
レンズ	エル・ニッコール135mm F5.6A・50mm F2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレードIV RC ベーパー

4. 製版：写真図版175線
印刷：オフセット印刷
用紙：マットコート110kg

【参考】『埋文写真研究』vol.1～20・『報告書制作ガイド』『文化財写真研究』vol.1～3

【大西 朋子】



1. 北半部遺構検出状況（南より）



2. 南半部遺構検出状況（南より）



1. 北半部完掘状況(南より)



2. 南半部完掘状況(南より)



1. 西壁土層 (東より)



2. SB1検出状況
(北より)



3. 掘立1検出状況
(北東より)



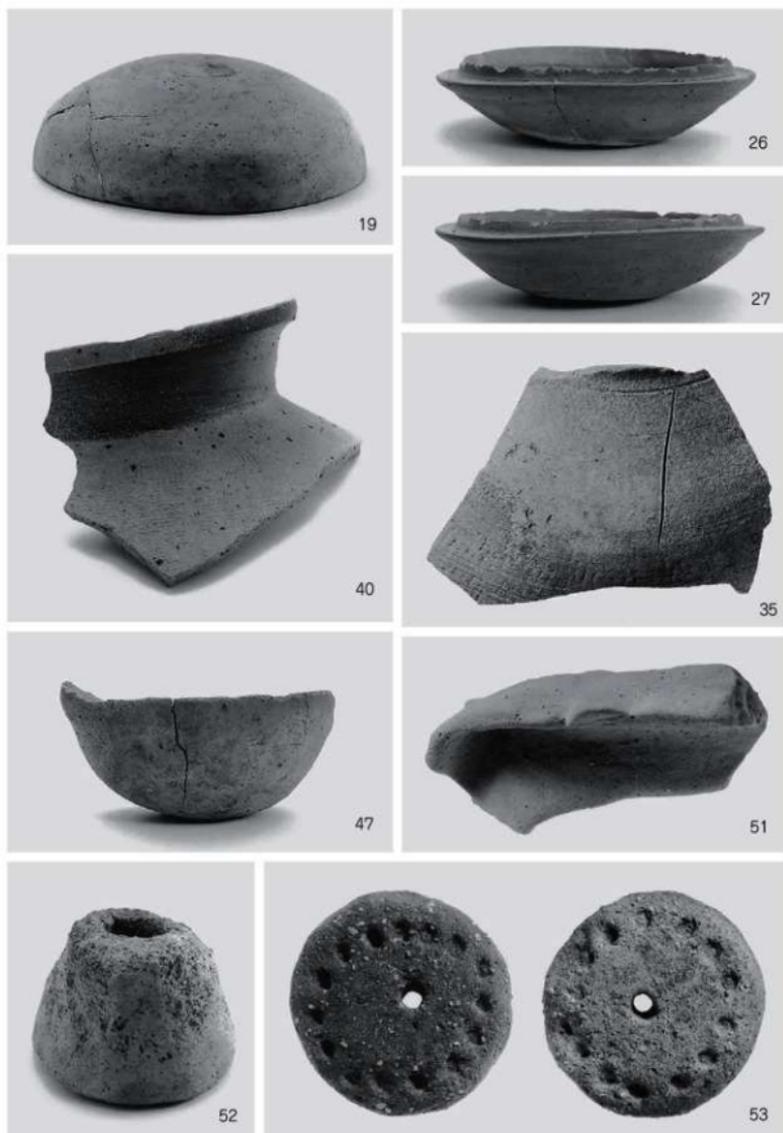
1. 掘立2検出状況
(北西より)



2. SR1検出状況
(東より)



3. 足跡①検出状況
(西より)



1. SR1下層出土遺物

図
版
6



1. 出土遺物 (SR1上層 : 55~57・70・74、SR1地点不明 : 75・78・86・87、SK1 : 12・13、包含層 : 92)



1. A区遺構検出状況（西より）



2. A区遺構完掘状況（西より）



3. A区遺構完掘状況（南西より）



1. B区遺構検出状況(北より)



1. B区遺構完掘状況(北より)



2. 掘立1・掘立2完掘状況(北より)



1. SK1 遺物出土状況 (南より)



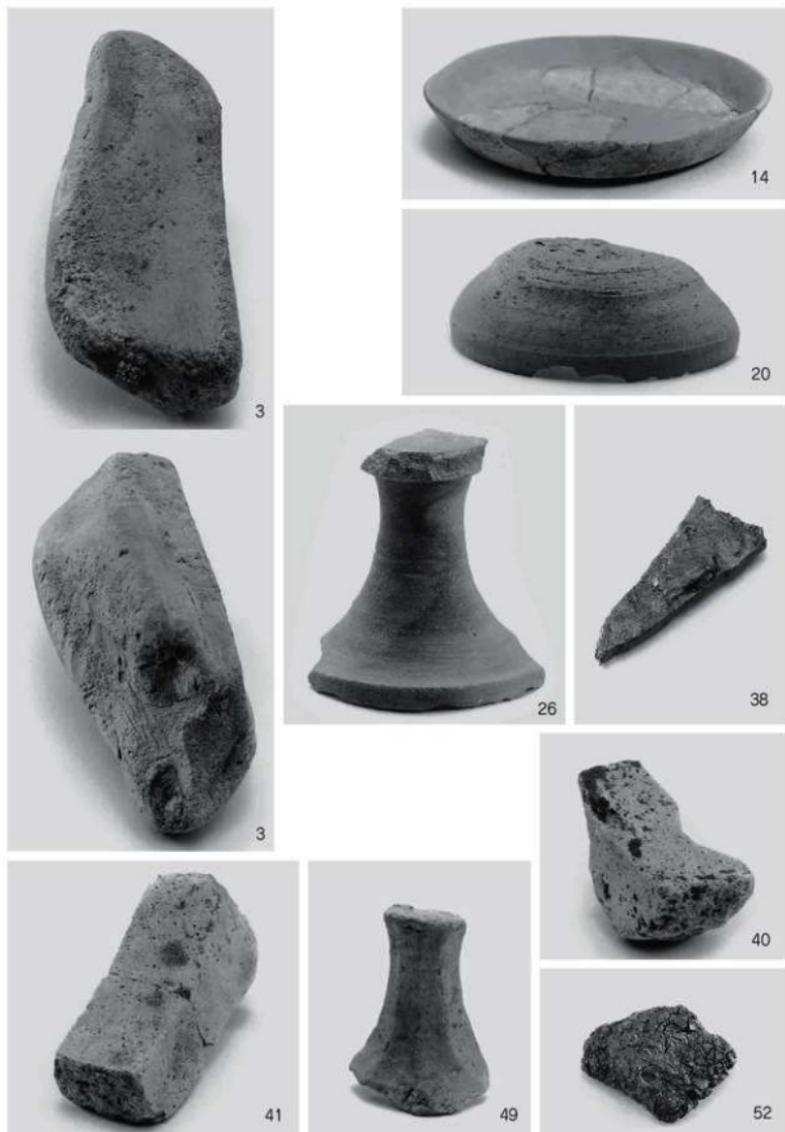
2. SK1 完掘状況 (南東より)



1. SX3遺物出土状況 (南東より)



2. SX3完掘状況 (南西より)



1. 出土遺物 (SB1 : 3、SK1 : 14、SX3 : 20・26・38・40・41、地点不明 : 49・52)



1. 1区遺構検出状況(南東より)



2. 1区遺構検出状況(西より)



1. 1区遺構完掘状況(西より)



1. 2区遺構検出状況(南東より)



2. 2区遺構完掘状況(東より)



1. 3区遺構検出状況(南東より)



2. 3区遺構完掘状況(南東より)



1. SR5北半部完掘状況
(北より)



2. 掘立1・掘立2完掘状況
(東より)



3. 掘立1、P108・P109
半截状況 (南より)



1. SK8完掘状況
(東より)



2. SK9完掘状況
(東より)



3. SD3・SD4完掘状況
(北西より)



1. SR4遺物出土状況
(北東より)



2. SR4完掘状況
(北東より)



3. SP117柱材出土状況
(南西より)



1. 土器溜り遺物出土状況
(西より)



2. 土器溜り遺物出土状況
(北より)



1. SR5出土遺物

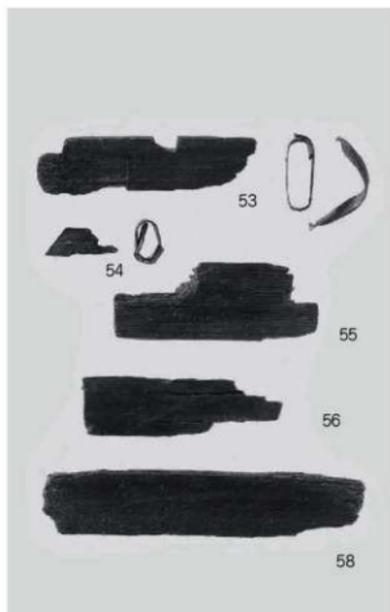


1. 出土遺物 (SK9 : 13, SR3 : 14~17, SR4① : 26~28・34・35)



1. SR4出土遺物②

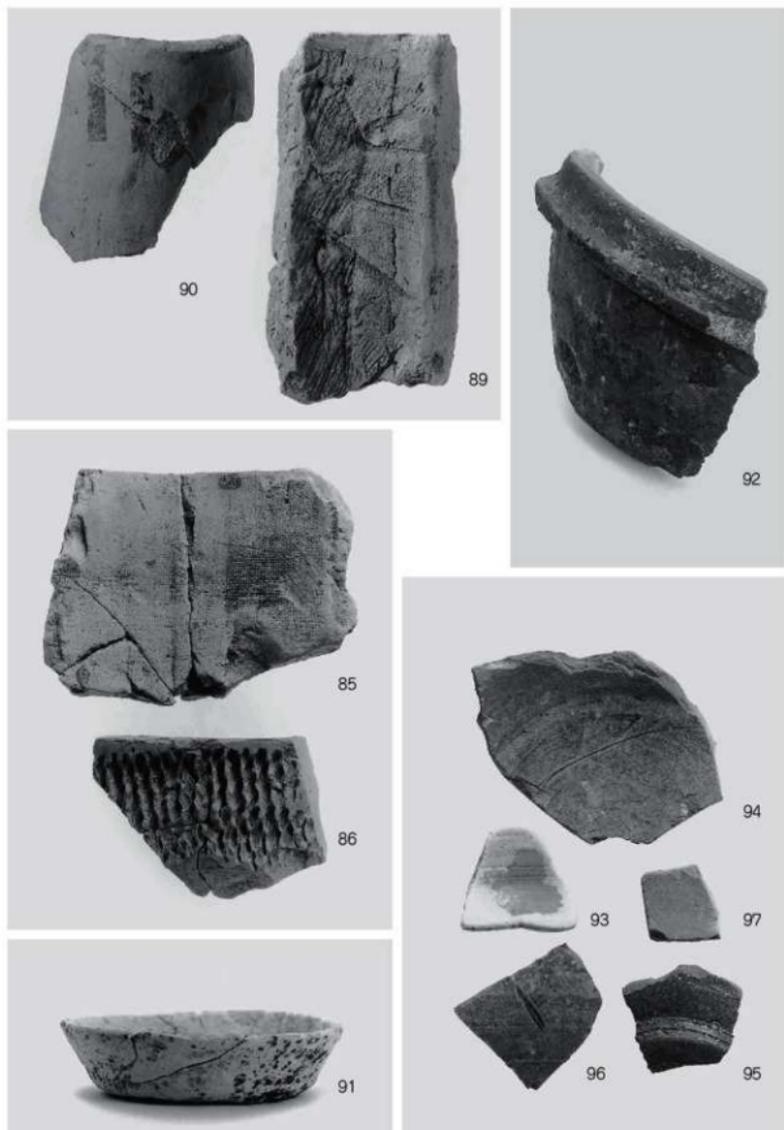
図
版
24



1. SR4出土遺物③



1. 出土遺物 (SR 4④) : 62-63・桃核、土器溜り① : 69-71・74-75-82-83)



1. 出土遺物(土器溜り②: 85-86-89-90、柱穴: 91-92、IV②層: 93、久米窪田森元遺跡3次: 94~97)

報 告 書 抄 録

ふりがな	しまちいせき	しまちいせき	くめぼたもりもといせき
書名	来住町遺跡8次調査・来住町遺跡12次調査・久米窪田森元遺跡4次調査		
副書名			
巻次			
シリーズ名	松山市文化財調査報告書		
シリーズ番号	第161集		
編著者名	高尾和長・宮内慎一・山本健一・大西朋子		
編集機関	公益財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団 埋蔵文化財センター		
所在地	〒791-8032 愛媛県松山市南斎院町乙67番地6 TEL089-923-6363		
発行年月日	西暦2013(平成25)年3月13日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	道路番号					
しまちいせき 来住町遺跡 8次調査	まつやましまちいせき 松山市来住町	38201		33°48'36"	132°48'19"	19980416 / 19980717	1272	宅地造成
しまちいせき 来住町遺跡 12次調査	まつやましまちいせき 松山市来住町	38201		33°48'31"	132°48'15"	20010409 / 20010525	387	立体駐車場建設・浄化槽設置
くめぼたもりもといせき 久米窪田森元 遺跡4次調査	まつやま 松山市 久米窪田町	38201		33°48'30"	132°48'40"	19971215 / 19980331	1,330.01	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
来住町遺跡 8次調査	集落	古墳	堅穴建物・掘立柱建物・土坑・溝・流路	弥生土器・須恵器・土師器・石製品・鉄滓	
		古代	掘立柱建物・溝・流路・足跡		
		中世	掘立柱建物・溝・足跡		
来住町遺跡 12次調査	集落	古墳	堅穴建物・掘立柱建物・溝・土坑	須恵器・土師器・石製品	
		古代	性格不明遺構		
久米窪田森元 遺跡4次調査	集落	弥生	流路	縄文土器・弥生土器・須恵器 緑釉陶器・木製遺物	
		古代	掘立・土坑・溝		
		中世	土器溜り		

要 約	<p>調査からは古墳時代から中世にかけての、集落に関する遺構と遺物を検出した。来住町遺跡8次調査からは、古墳時代後期から終末期において調査地一帯は堅穴住居や掘立柱建物が存在する居住区として土地利用されていた。その後、飛鳥時代、7世紀中葉以降は水田や畠を営む生産域として利用され、断絶期の後、中世段階になり再び生産域として土地利用されることになる。来住町遺跡12次調査からは、古墳時代後期の堅穴建物、掘立柱建物を検出した。久米窪田森元遺跡4次調査からは今回の調査で古代10世紀後半代の集落内での遺構配置状況の一部を確認する事ができた。調査地周辺には古代8世紀代から10世紀代の集落の存在が明らかとなっており、また出土する遺物等から一般的な集落ではなく官衙周辺の施設群の一部である可能性がより考えられる。</p>
-----	--

松山市文化財調査報告書 第161集

来住町遺跡 8 次調査
来住町遺跡 12 次調査
久米窪田森元遺跡 4 次調査

平成 25 年 3 月 13 日 発行

編 集 公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

発 行 埋蔵文化財センター

〒 791 - 8032 松山市南京院町乙 67 番地 6

TEL (089) 923 - 6363

松山市教育委員会

〒 790 - 0003 松山市三番町六丁目 6 番地 1

TEL (089) 948 - 6605

印 刷 株式会社明朗社

〒 791 - 2112 伊予郡砥部町重光 150 - 1

TEL (089) 958 - 6868

